

立教大学図書館蔵『平家物語』翻刻（一）巻第一～巻第三

朴 知恵・鈴木 彰

ここに紹介する『平家物語』全十二冊は、二〇一六年に立教大学図書館に新たに収蔵されることになった写本である。その本文は、八坂系第一類本B種⁽¹⁾に分類される中院本と近似した関係にあり、その装幀なども併せて、近世前期における『平家物語』の写本制作の一樣相を伝える、興味深い伝本のひとつである。

まずは本書の簡単な書誌を示しておく。

写本。袋綴。全十二冊。請求記号913434H51。縦二十八・〇糎、横二十・三糎（巻第一による）。料紙は縮紙。金地金泥霞唐草九曜紋入の表紙（原表紙）。見返しは前後とも、紙面を対角線で二等分し、金切箔と銀砂子を散らす。表紙左上に題簽（藍鼠色地に金で霞・草の下絵）を貼り、外題は「平家物語 一（三、五、七、十一）」、「平家ものかたり 二（八、十、十二）」、「平家物かたり 四（六）」、「平家もの語 九」と墨書する。内題は「平家物語巻第一（～十二）」。目録題「平家物語巻第一（二）、四（十二）目録」、「平家物語巻三日録」。尾題「平家物語巻第三（四～七、九、十一）終」（一、二、六、

八、十、十二なし）。漢字平仮名交じり。片面十行。一部に傍書・異本注記あり。奥書・識語なし。挿絵なし。旧蔵者印記なし。総かぶせの木箱入り。箱蓋表中央に銀で「平家物語」と記し、同裏貼紙に「宝暦五乙亥年／十二月二十七日／御歳頭当番即於江府求／神樂大膳国慶」と墨書（宝暦五年は一七五五年）。箱身の内側底面に「平家物語全部十二冊／かぐら館」、同底面外側の中央下に「かぐら館」と墨書されている。

この伝本の性格や伝来等の詳細については機会をあらためて論じる予定であるが、まずはその本文を本誌で数回にわけて翻刻・紹介していくこととする。本稿は巻第一～三の翻刻である。

本書の翻刻・紹介をご許可くださった立教大学図書館の関係各位に心より御礼申し上げます。

注

(1) 『平家物語』の八坂系諸本の分類についての理解は、山下宏明

編『平家物語八坂系諸本の研究』（三弥井書店、一九九七・十）に拠る。

章段が立てられていない。そのため、該当箇所には「しん大なこんせいきよの事」という章段名を補った。

【凡例】

- 一、立教大学図書館蔵『平家物語』全十二巻（請求記号913.434/H.51）を底本として翻刻したものである。
- 一、異体字は通行字体に、旧字体は新字体に直した。
- 一、丁の表裏の変わり目には「」を付し、（1オ）（1ウ）のよう
に示した。なお、遊紙は丁数に入れていない。
- 一、内題・巻頭の目録を除いて本文は追い込みの形とし、改行箇所
は「/」で示した。ただし、和歌・漢詩・文書類は行頭二字下げ
とし、末尾で改行する形式とした。
- 一、見せ消ちされた文字の左側に傍線を付した。
- 一、本文の右傍に記された異本注記や補記はそのまま記した。
- 一、本文の文字間に符号「○」を付して補入位置を示した傍記は、
符号の入られた箇所の右傍に「*」を付してから傍記された文
字を記した。本文中に小字で書き加えられた後筆の補記につい
ても同様に扱った。
- 一、誤字・誤脱があると考えられる箇所もそのままに翻刻し、当該
箇所には「(ママ)」と傍記した。
- 一、本文中の章段名は行頭二字下げの形で統一した。なお、巻第二
「しん大なこんせいきよの事」は目録題のみあって、本文中には

【翻刻】

- 平家物語巻第一目録
- 一た、もりせうてんの事
 - 一わか身のゑいくわの事
 - 一さわうきによの事
 - 一二代のきさきの事
 - 一二条院ほうきよの事
 - 一六てうのぬん御そくぬの事
 - 一後白川院御しゆつけの事
 - 一すけもり天下の御出にさんくわいの事
 - 一しゆしやう御けんふくの事
 - 一新大納言なりちかのきやう大将しよまうの事
 - 一もろたかとうあくきやうの事
 - 一後二条関白殿日吉の社に御りうくわんの事
 - 一後二てう関白殿御せいきよの事
 - 一御こしふりの事
 - (以下、五行分余白)
- 「(1ウ)

平家物語巻第一

た、もりせうてんの事

きをんしやうしやのかねのこゑしよきやうむしやうのひ、き／ありしやらさうしゆの花のいろしやうしやひつすいのこと／はりをあらはずをこれる人も久しからずた、はるの／夜の夢のもしたけきものもつゝぬにほろふひとへに／風のまへのちりにおなしとをくいてうのせんせうをとふ／らへはしんのでうかうかんのわうまうりやうのしゆうい／たうのろくさんこれらはみなきうしゆせんくわうのまつり／ことにもしたかはすたのしみをきはめいさめる事をも」(2オ)おもひ入すてんかのみたれむ事をもさとらすみんかんのう／れふる所をもしらざりしかはひさしからずしてほろひ／にしものなりちかくほむてうをうか、ふに承平にまさ／かと天慶にすみとも康和に義親平治にのふより／をこれる心もたけき事もみなとり／にこそありし／かともまぢかくは入道さきの大政大臣たいらの朝臣清／もりこうと申し人のありさまをつたへうけたまはるこ／そ心もことはもをよはねそのせんそのをたつぬるに／わんむ天皇第五のわうしーほんしきふきやうかつらはらの／しんわう九代のこうるんさぬきのかみまさもりかまこ」(2ウ)きやうふきやうた、もりの朝臣のちやくなんなりかのしん／わうの御子たかみのわうはむくわんむるにしてうせ給ひ／ぬその御子たかもちのわうの時よりはしめてたいらのしやう／を給てかつさのすけになり給ひしより此かたたちま／ちにわうしを出て久しくしんしんにつらなるその子／ちんしゆふのしやうくむよしもちのちにはひたちの大せう／くにかとあらたむくに

かとよりさたもりこれひらまき／さのりまさひらまさもりにいたる(マエ)まで六代はしよ／こくのしゆりやうをへていまたてん上のせきを(マエ)はゆるさ／れすしかるをた、もりびぜんのかみたりし時鳥羽院の「3オ)御くわんとくちやうしゆあんをさうしんし三十三間の御たう／をたて一千一たいの御ほとけをすへたてまつるくやうは天永／元年(承平)三月十三日也けんしやうにはけつこくをたまふへき／よしおほせくたさるおりふしたしまのくにのあきたりける／をそ給りけるしやうくわう猶ゑいかにたへさせまし(マエ)事さ／すしてうちのせうてんをゆるされた、もり年三十六に／て始てのせうてんすくもの上人これをそねみいき／とをりておなしき年の十一月廿三日五せつとよの／あかりのせちゑの夜てん上にてた、もりをやみうち／にせんときせられけるた、もりこの事をつたへ」(3ウ)き、てわれゆうひつつ身にあらすふようの家に生／れて今ふりよのはちにあはん事家のためのため／心うかるへしせんするところ身をまたうして君に／つかへよといふほんもんありとてかねてそのよういをいた／さるさんたいのはしめよりいくわんのしたに大きなさ／やまきをしとけなけにさしつ、火のほのくらきかたにむ／かひてやはらこのかたなをぬきいたしひんにひきあてられ／けるかこほりなどのやうにそみえけるしよ人めをすます／又た、もりのらうとうにもとは一門たりしむくのすけ／平のさたみつかまこしんの三郎太夫すゑふさか子に」(4オ)さひやうゑのせういへさたと云ものありと草のかりきぬの(うすあほイ)／したにもえきのはらまきをゑふのたちわきはさみて／てん上のこ

庭にかしこまでそ候けるくわんしゆ巳下あや／しみをなして六位をもてうつほはしらよりうち鈴のつ／なのへんにほいの物の候は何ものそらうせきなりすみや／かにまかり出よといはせければさうてんのしゆびぜんのかみ殿のこよひやみうちにせられ給ふへきよし承りて／ならんやう見候はんとてかくて候なりえよりこそまかり／出候ましけれとてかしこまでそ候けるこれらをよしなし／とやおもはれけんその夜のやみうちなかりけりさるほとに」(4ウ) た、もり御前のめしにまはれけるに人／＼ひやうしをかへて／いせへいしはすかめなりけりとそはやされけるこの人かた／しけなくもかしははらの天皇の御すゑとは申ながら／なか比はむけにくたりてくわんともあさくみやこのすまゐ／もうと／＼しういせにちうこくふかくかりければ彼国のう／つはもの、へいしにたとへて伊勢へいしとははやされけり／そのうへた、もりはかためすこしすかまれたりければか／やうにそはやされけるた、もりいかにすへきやうもなくて／御ゆうもいまたはてさるにいそき御前をまかり出られける／かいか、おもはれけんよこたへさ、れたりける刀をはししん」(5オ) てんの御ごにてとのもつかさにあひつけをきてそ出られけ／るいへきたまちうけ奉りさていかに候と申ければ此事／ありのま、にいひつるものならはてん上までもきりのほら／むするもの、つらたましゐなりければへちの事なしと／てそいてられける五せつにはしろうすやうとうせんしの／かみまきあけのふてとも多かきたるふてのちくなどさま／＼におもしろき事をのみこそうたひまはれけるに中

／比たさいのこんのそつすゑ仲のきやうと申人おはしけりあ／まりにいろのくろかりければみな人こくそつとそ申ける／この人いまたくらんとのとうたりし時かみイこれも五せつにま」(5ウ) はれける人／＼ひやうしをかへてあなくる／＼くろきかほ／かないかなる人のうるしぬりけんとそはやされける又ならひには／＼はつなる殿上人のまわれけるをかの人かた人とおほしく／てあなしる／＼しろきかほかなたれかたらへてはくををしけん／とそはやされける又花山院のさきの大政大臣た、まさこう／いまた十さいと申し時ち、の中なこんた、むねのきやうに／をくれ給てみなし子にておはせしをみかとのとう中なこん／家成卿そのときはいまはりまのかみにておはしけるか／むこにとりてはなやかにもてなされければ是も五せつにはり／まよねはとくさかむくの葉か人のきらをみかくはとそは」(6オ) やされけるいにしへはかやうの事ありしかとも事いてこそ末代／はいか、あらんすらむおほつかなしとそ人申けるあんのことく／五せちはてしかはてむ上にはをの／＼せんきありふゆう／けんをたいしてくゑんにつらなりひやうちやうを給てきう／中を出入する事はみなこれかくしきのれいをまほりり／むめいよせあるせんきなりしかるにた、もりさう／てんのらうとうとかうしてほいのつはものをてん上のこに／はにめしをきその身は又こしのかたなをよこたへさし／てせちゑのさにつらなるりやうてうきたいのしよきやう／いまたきかさるらうせきなり事すてにてう／＼せりさい」(6ウ) くわもとのかれかたし御ふたをけつりてけくわんちやうに／むせら

れるへきよしをのくうたへ申されければ上くわうも大きにおと
ろきおほしめしいそきた、もりをめして御たつねありちんし申さ
れけるはまつらうとう小庭にしこうのことた、もりかくこつかま
つらすた、し近日人／＼のあひたくまる、しさいあるかの間さう
てんのけ人この事をつたへ承るによりてた、もりにしられすして
ひそか／＼にさんこうのてうちからをよはさるしたいなりもしなをそ
／＼のとかあるへくはその身をめししんすへきかつきに刀／＼の事との
もつかさにあつけをきをはんぬいそきこれをめ(7オ)しいたさ
れかたなのしつふにまかせてとかのさう有へきかと申されたりけ
れはこの義も^ッもしかるへしとていそ／＼きかのかたなをめし出して
ゑいらんあるに上はさやまき／＼のくろくぬりたるか中は木かたなな
にきんはくをそおし／＼たりけるたうさのちしよくをのかれんかため
にこしのかたな／＼をたいするよしをあらはすといへる共後日のそせ
うをそ／＼むしけるようい程こそしんへうなれきうせんにたつさ／
はるもの、はかりことはもとよりかやうにあらまほしけれ／＼又らう
とうこにはにそし^(マ)その事かつはふしのらうとう／＼のならひなりさ
てはた、もりかとかにあらすとかへ^ッ(7ウ)ゑいかににあつか
るうへはあへてさいくはのさたなかりけり／＼その子ともしよゑのす
けをへてせうてんせしにてん上の／＼ましはり人きらうにをよはずあ
るときた、もりひせんの／＼くによりみやこへのほられたりける鳥羽
院あかしのうらは／＼いかにと御たつねありければかしこまで御返事
に／

ありあけの月もあかしのうらかせになみはかりこそよるとみ
えしか

と申されたりしかは上くわう大きに御かん有てこの歌／＼をはきんよ
うしうにそ入られける又た、もりせんとうに候／＼はれける女はうの
もとへかよはれける程にある夜そのつほね／＼につまに月いたしたる
あふきをわすれて出られたるを(8オ)かたへの女はうたちあな
めつらしの月かけやいつくよりにかある／＼らんにてところおほつか
なしとたはふれあはれければ此女房／

くもゑよりた、もりきたるつきなれはおほろけにては／＼いはし
とそおもふ

とよみたりければいと、あさからすそおもは／＼れけるさつまのかみ
た、のりのは、これなりになるをともと／＼かやのふせいにてた、もり
のすかれたりければにより^(マ)房／＼もゆうなりけりさる程にた、もりき
やうふきやうにいた／＼りて仁平三年正月十五日に年五十八にてうせ
られぬきよ／＼もりちやくなんたるによてそのあとをつくしぬるほう
けん元／＼年七月にしゆ上しやうくわう御くにあらそひありしとき
あ(8ウ)きのかみとてみかたにてくんこうありしかははりまの
かみに／＼うつりておなしき三年たさいの大武になる又平治元年／十
二月にのふよりよしともかむほんの時きよもりなをみか／＼たに候て
そくとをうちたいらくくんこう一にあらすをんし／＼やうこれをもか
るへしとてつきのとし正三位にしよして／＼うちつ、きさいしやうゑ
ふのかみけんひいしのへつたう／＼中なこんになりあまさへせうしや

うのくらゐにいたりさ／うをへす内大臣より太政大臣しゆ一位に
かり給ひにけり／太将にはあらねともひやうちやうを給てすいしん
をめしくしれん／しやにのりて宮中を出入すひとへにしつせいの人
におなし」(9オ) 大しやう大しんは一人にしはんとして四かいに
けいせりくにを／おさめみちをろんしあんやうをせうりせしむもし
その人に／あらずはけかすへきくわんならずされはそつけつのくわ
んとも／なつれたりしかれともかやうに一天四かいをたな心のうち
にき^{ママ}／り給しうへは人とかく申に及はずそも／平家かやうにはん
／しやうする事はくまの、こんけんの御りしやうとぞ聞えし／その
ゆへはきよもりいまたあきのかみたりしとき伊せの／くにあの、つ
より船にてくまのへまいられるに大きなる／す、きの船へをとり
入たりけるをせんたち申けるはこれは／めてたき御事かないまいる
へしと申ければ入道しやうこく」(9ウ) かいも十かいをたもつて
しやうしんけつさいのみちなれともむかし／しうのふわうのふねに
こそはくきよはをとり入たなれと／てうみして我身くい家のこら
うとう共にもくはせらるぞ／のゆへにや下かうの後うちつ、きて吉
事のみおほかりけり／わか身太政大臣にいたりしそむのくわんもれ
うのくもに上る／よりはなをすみやかなり九代のせんしようをこし
給ふこそ／めてたけれかくてきよもり仁安三年十一月十二日にやま
ひ／におかされそんめいのためにとし五十一にて出家入道してほ
うみやうしやうかいとそなのりけるそのしるしにやしゆくひやう／
たち所にいへて天命をまたくす人のしたかひつき奉る」(10オ)

事ふく風の草木をなひかすかとし世のあまねくあふき／けること
ふる雨のこくとをうるほすにおなし六はらとの／の御一かのきんた
ちといひてしかはくわそくもゑいゆうも／をもてをむけかたをなら
ふる人なしされは入道のこしうと／平大なこんときた、の申されけ
るはこの一もんにあらさらん／ものはみな人ひにんなるへしとそ
給ひけるされはいか／なる人も此えんゆかりにむすほ、れんとそし
けるゑほうし／のためやうよりはしめてゑもんのかきやうさしぬき
のり／むにいたるまでなにも六はらやうといひてしかは一天／
四かいこれをまなふいかなるけんわうせいしゆの御まつり」(10
ウ) ことせつしやうくわんはくの御せいはいをも人の聞ぬときはな
／にとなう世にあまさのれたるいたつらものなどのそしり／かたふ
け申事はつねの事なれともこのせんもんの世／さかりの程は人の見
きかねはとていささかもあるかせ／に申ものなしそのゆへは入道の
はかりことに十五六／のわらはへを二三百人めしあつめてかみをか
ふろにきりま／はさせあかきひた、れをきせかふるとなつけてめし
／つかはれければきやう白川にみち／てわうへんしける／平家の
事をいさ、かもあるかせに申ものあれは一人き、い／たさぬ程こそ
ありけれよたうにふれめぐりてそのいへに」(11オ) らんにうし
しさいさうくをついふくしてそのやつをめ／し取て六はらへつれて
参る入道うきとらせてそくし／にうしなはれけりか、りければめに
みみ、にふる、といへ／ともことにいたして申ものなし六はらと
の、かふるといひ／てしかはみちをすくる馬車もよきてこそとおし

けれ／きんもんを出入すといへともしやうみやうをたつぬるにを／
よはすけいしのちやうりこれかためにめをそはむとみ／えたり／

わか身のゑいくわの事

我身のゑいくわをきはむるのみにあらずちやくししけ」(11ウ)
もり内大臣の左大しやう二男むねもり中なこんの右大／しやう三な
んとももり三位中将四なんしけひらくらんと／のせうとうちやくそ
んこれもり四位のせうしやうをよそ一もん／のくきやう十人殿上人
六十よ人その外しよこくのしゆりや／うゑふしよしつかう六十よ人
なり世には又人なしとそみえ／しむかしならのみかとの御とき神亀
五年にてうかに中／ゑの大しやうをはしめをかれしかへいせい天皇
の御宇に中／ゑをこんゑにあらためられてより此かたきやうたいさ
うに／あひならふ事わつかに三四かとなりもんとく天皇の御とき／
はひたりによしふさ右大臣のさ大しやうみきによしあふ大」(12
オ)なこんの右大しやうこれか院のさ大しんふゆつきこう／の御
子也朱雀院の御時は左にさねよりの、みやとのみ／きにもろすけ
九てうとのていしんこうの御子なり後冷泉／院の御ときはひたりに
のりみち大二てうとのみきによりむねほり川とのみたうの関白の
御子也二てうの院の御時／はひたりにもとふさ松殿みきにかねさね
月輪との法性寺／との、御子なりこれみなせうろくのしんの御子は
んしんにを／いてはそのれいなし日ころはてん上のましはりをたに
もきら／はれし人のしそんの今はきんしきさつはうをゆりれう／ら
きんしうを身にまとひ大しんの大しやうにいたりてき」(12ウ)

やうたいさうにあひならふ事末代とはいひなからふしき也／し事共
なり又御子むすめも八人ましますこれもみなと／り／にさいわい
給けり一は桜まちの中納言しけのりの卿／に八さいより御やくそく
ありしを平治のらんの時ひき／ちかへ奉りて後には花山院のさ大し
んとの、御たいはん所／にならせ給てきんたちあまたおはしましけ
り御いはひの／夜いかなるあとなしもの、しことにか有けん花山院
の四つ／あしにらくしよあり／

花の山たかきこすゑとこはしにあまのこかとよふる／めひろふ
は

このしけのりのきやうと申はこ少なこん入道しん」(13オ)せい
の四なん也此人を桜まちの中なこんと申けるはことに／心やさしく
おほしはしましてつねによしの山の春をこひ／つ、ちやうにさくら
をうへならへそのなかにやをたて、すみ給ひ／けれはくるとしのは
ることにみる人さくらまちとそ申ける／大かた花はさきて七日にち
れければ三七／日までなこりありきみもけんわうにておはしませは
神も／しんとくをか、やかし花も心あればにや廿日のよはひをたも
ち／けり二はきさきにた、せ給ひてわう子御たんしやう有／てくわ
うたいしにた、せ給ひしかはるんかうかうふらせ給」(13ウ)て
建礼門院とそ申ける天下のこくもにてまし／くしうへ／はとかく申
にをよはす三は六てうのせつしやう殿の北政所／なりて高倉院御さ
いの時御はく代とてしゆん三こうのせ／むしをかうふらせたまひ

てしら川のと申て世にはおもき／人にてそおはしける四はれいせ
んの大なこんりうはうのきや／うのきたのかた五はふけん寺との、
北のまん所也六は七／てうのしゆりの大夫のふたかのきやうあひく
したまへり七は後／白川院に参らせ給ひて女御のことくにてそおは
しけるこ／れはあきのいつくしまのないしかはらの御むすめ也その
外／九てうの院のさうしときはかはらにも姫君一人おはしけり」
(14才) これを御あね花山院とのに上らう女房にてらうの御かた
と／そ申ける日ほんあきつ国は六十六かこく平家ちきやう／のくに
三十よか国すてに半国にをよへりそのほかしやう／えんでんちくい
はくいくらといふかすをしらすきらしう／まんしてたうしやう花の
ことしけんきくむしゆしても／むせん市をなすやうしうのこかねけ
いしうのたまこさんの／あやしよつかうのにしき七ちん万ほう一と
してかけたる事／こそなかりけれかたうふかくのもといきよれうし
やくは／のもてあそひものをそらくはていけつもせんとうもいか／
てかこれにはすきしとそみえし」(14ウ)

きわうきよの事

むかしより源平両家てうかにめしつかはれてわうくわ／にしたかは
す朝けんをかるむするものあれはたかひにいま／しめをくわへしか
は世のみたれもなかりしに保元のため／よしきられへいちに義朝う
たれしかはすゑ／の源氏／ありといへ共あるひはなかされあるひ
はちうせられいまは平家の／一ののみはんしやうしていかならん
すゑの世までもなに／ことかあらんとそみえし入道かやうに天下を

たな心のうち／ににきり給ひしかは世のそしりをもは、からす人の
あさけ／りをもかへりみすふしきの事をのみしたまひけりたとへ
は」(15才) そのころ都に聞えたるしらひやうしきわうきよによと
ておと／とひありとちと申しらひやうしのむすめ也中にも入道／あ
ねのきわうをあひしてにし八てうのしゆくしよにとりす／へてそを
かれけるは、のとちをも大事のものにし給て／よきやつくりてとら
せ毎月に百石百貫ををくられけれ／は家のうちふきしてゆたかなる
事かきりなしか、りけ／れはいもうとのきによをも人をもくしても
てなしけりき／やう中のしらひやうしきわうかさいわいをうらやむ
ものもあり／そねむものもおほかりけりうらやむものはあなめてた
のき／わう御せんのさいわいやおなしあそひものとならばかくこ
そ」(15ウ) はあらまほしけれあはれこれやはきと云文字をなに
つ／きてかくはめてたきやらんいさやわれらもつきてみんと／てあ
るひはき一とつくもありあるひはき二とつくも有／りきとくきしゆ
きふくきほうなとつくものも有けり／そねむものはなんてう名によ
りもじによるへきさいわ／いはせんせのしゆくしう生れつきにてこ
そあむなれとて／きといふ文字をつかぬもの共もありけりそも
／我てう／にしらひやうしのはしまりけることは鳥羽院の御とき
し／まの千さいわかのみへとて二人かまひはしめすいかんにたてゑ
／ほうしさまきをさしてまひければ男まひとなつけれ」(16
才) たりしを中ころより刀ゑほうしをのけられてしるきす／いかん
はかりにてまひければしらひやうしとなつけれたり／きわうかく

とりすへられ奉りて三年と申し春のころ／仏御前とてゆうなるしら
ひやうしいてきたりむかしより／おほくのおそひものありつれとも
これ程のものこそいまたなけ／れとて京中の上下こそりてこれもも
てなしけり有時／佛こそんおもひけるは我きやう中にかくれなしと
いへともたう／しときめき給ふ大政の入道殿にいまくまでまいらぬ
こ／そほいなければおそひもの、すいさんはなにかくるしかるへきと
／思ひければある時きつしやしんしやうにて西八てうへそ参〔16
ウ〕りたる人まいりてほとけと申しらひやうしのまいりて候と／申
ければ入道なんてうさやうのおそひものと云は人のめ／しにつきて
こそまいる事なれめさぬにすいさんしか／るへしからす神ともいへ
ほとけともいへきわうかあらん所へ／はかなふましとくまかり出よ
と有ければほとけ御前すけ／なきおほせをかうふりて車にのりて出
けるをきわうこそん／申けるはおそひもの、すいさんはつねの事に
てこそさふら／へこれはとしもいまたおさなきと承りさふらふたま
／思／ひ立まいりてさふらふたま／かすけなきおほせをかうふ
り／ていかばかりはつかしうもかたはらいたくもさふらふらん我〔
17オ〕身もたてしみちなれば人の上共おほえすとひまひ／を
御らんしこゑをこそきこしめさすとも御たいめん有／てかへさせお
はしましたらんはありかたき御なさけにて／こそと申ければ入道さ
らはめせとてよはせらるほとけ／こそんすけなういはれ奉てはる
／出たりけるをめし返し／給てけふのけさむはいかにも有ましか
りつるをきわう／かなにと思ひてやらむしきりに申つる間めしたる

なり／かやにたいめんしたらんにこゑかさらんもむねんなり今／や
う一うたへかしとの給ふ仏御承ていまやうをそうたひける／君をは
しめてみるときは千代もへぬへし姫小松御〔17ウ〕まへのいけ
なるかめをかに鶴こそむれゐてあそふめれと／二三へんはたひすま
したりければみな人かんしあはれけり入／道もおもしろけにてあま
わこそんは今やうかよければま／ひもさためてよかるらん事にても
一はん見はやつ、みう／ちめせとてめして一はんまはせらるをよそ
このしらひ／やうし年は十六七なりみめかたちならひなくかみの
か、／りまひのすかたこゑよくふしも上すなればなしかはま／ひも
そんすへき心もよはすそまふたりけるけんもんの／人／しほく
をおとろかさすと云事なし入道まひ／にやめて給ひけんほとけに心
をうつされけるてんせい此入道〔18オ〕とのはいら／しき人
にておはしませはまひのはつるをも／おそしとやおもはれけんはし
めのわかをはうたはせせめ／のうたをいまたいひもはてさるにほと
けをいたきて入給ふ／ほとけこそんこは何事さふらふそやわらはす
いさんの／ものとしてすけなきおほせをうけたまはりてまかりて出さ
ふ／らひつるをきわう御せんの申されてこそめされて候へき／わう
こそんの心のうちはつかしきれた、いとまを給てまか／りいてんと
申ければ入道いやく／すへてくるしかるましと／もかうもた、しや
うかいかま、そとよた、しきわうか有／をは、かるかさらはきわう
をこそ出さめとあれは仏こそん〔18ウ〕それ又いよ／心うく
さふらひなんもろともにめしを／かれ参らせんたにはつかしうもか

たはらいたうもさふら／ふへしましてきわう御せんをいたさせおは
しまさむ／事いかてかさるうき事さふらふへきまことに後まで／も
忘れぬ御事ならば又こそまいりさふらはめけふは／た、いとまをた
ひていたさせ給へと申けれども入道き、／いれたまはすきわういそ
きまかりいてよとの御つかひ／しきなみなりけるうへはきわうしは
しもやすらふへ／きにあらすとて住かたのちりひろはせはきのこひ
見／くるしきものなとりした、めてすてにいっへきに」(19オ)
こそなりにけれ日ころよりかゝるへしとは思ひまう／けし事なれと
もさすかにきのふけふとおもはず／この三とせかあひたすみなれ
し所をいまをかきりとたち／いつれはなこりもおしくかなしくてか
ひなきなみたそ／こほれけるきわうさるにつけてもたち帰りしやう
しに／かくそかきつけける／

もへいつるかる、もおなしのへの草いつれかあきにあは／ては
つへき

さてしもあるへきならねはすてにくるまに／のらんとしけるか／
いつちともいつへきかたもおほえぬになにと涙のさきにたつ

(19ウ)らん

きわうしゆくしよに帰りつ、しやうしのうちにま／ろひふしなく也
より外の事そなきは、是をあやし／みていかに／ととひけれども
返事をするにをよはず／くしたる女にたつねてそさることありとは
しりてける／去程に毎月をくられる百石百貫をもとめられて／い
まはほとけこせんのゆかりのものともそはしめてたのしみ／かへけ

る京中の上下きわうこそにし八てうよりいと／またひて出されたる
なれいさやけさんしてなくめ／さめんとてあるひは文をやる人も有
ししやをつかは／すかたもありきわうされは今さらたちかへり人
に」(20オ) みえあそひたはふるへきにあらすとてふみをとりに入
みるに／をよはねはましてつかひにこたふるまもなかりけりかくて
／年もくれ春のころにもなりにけり入道いか、思はれけん／きわう
かもとへつかひをつかはしていかに其後なに事か／あるほとけかあ
まりにつれ／けなるに参りてなくさめ／よかしの給ひければき
わうあまりの心うさに返事を／申にをよはず入道かさねての給ひけ
るはいかに返しをさせ／ぬそさてまいるまじきかまいるまじくはす
みやかにその／よしを申せき、きりて入道もはからふむね有へし／
とそおせられけるは、のとち申けるはなとか程に」(20ウ) し
かられまいらせんはり御へんしをは申ぬそ都のうちに／すむほとに
てはともかうも入道殿のおほせをはそむくま／しきにてあるそとい
へはきわうまいらんとおもふみち／ならばこそやかてまいる共申さ
めすにまいらすはは／からふむねありとおほせらる、はみやこの
うちを出さるる／かさらすは命をうしなはる、かこれ二にはすきし
たと／ひ都の中をいたさる、ともいつくかつるのすみかなるたとひ
／いのちをめさる、共又おしかるへきかわ身かは一度うき／物に思
はれまいらせて二たひむかふへきにもあらずと／て猶へんたうにも
をよはずは、のとち申けるは男女の」(21オ) えんしゆくせは今
をはしめの事ならず千年をかけて契／れともやかてわかる、なかも

ありた、かりそめと思へ共なか／らへはつる事もありた、世にさた
めなきはおとこ女の／ならひなりいはんやわこせんたちはあそひも
のなり一日／かた時めされたらんたにもありかたかるへしいはんや
三／年までとりをかれまいらせたりつれば今生のおもいて／にはい
かてかあるへきめすにまいらぬとて命をめさる、ま／てかあるへき
めはよもあらしみやこのうちを出されんすら／めたとひみやこを出
さるともわこせんたちはわかればいつく／のうら岩木のかげにて
もすくさむ事はやすかるへしわら」(21ウ) はかとしおひおとろ
へたる身の都のうちを立出てなら／はぬひなの住るこそかねて思ふ
もかなしけれど、わらはを／みやこのうちにすみはてさ、せ給へそ
れそ今生後生／のけうやうと思ふへきと涙もせきあへす申ければき
／わう此うへはまいるにてこそあらめとて出立けりひとりま／いら
んか物うければいもうとのきによをもくしけりおなし／やうなるし
らひやうし二人と四人ひとつ車にとりのり／てにし八てうへそ参り
たる日ころめされし所よりはるかに／さかりたる所にさしきしてこ
そをかれけれこはなにこ／とのとかそやさしきをさへさけられつる
事の心うさよ」(22オ) 是につけてもなにかまいり候けんと思
ふにもけしき／をみえしとおさふる袖のしたよりあまりてなみた
そ／なけれけるほとけ御せん申けるは日比めされぬ所にてもさ／ふ
らはすた、ひとつ所へめさるへしさらすはわらは出てけ／さんせん
と申ければ入道なんてうとてゆるされざりければ／ちからをよはす
や、有て入道いてあひ給ていかにきわう／そのちなに事かありし

仏かつれ／けなるにいまやう／ひとつたひてなくさめよかしと
の給へはきわうまいる／ほとにてはともかうも仰のま、にこそとお
もひければいま／やう一そなたひけるほとけもむかしはほんふなり
我らも」(22ウ) おもへは仏なりいつれもふつしやうくせる身を
へたつるのみ／こそをろかなると二三へんうたひすましたりければ
みな／人かんるいをもよほしけり入道あいう申たりやかてま／ひ
をもみるへけれ共いさ、かまきる、事ありこの後はめ／さよすとも
つねに参りてまひをも今やうをもうたひ／て仏なくさめよさらはと
う／かへれとその給ひける／きわうわかともかへりつ、きぬひき
かつきてなきふしたり／おやのめいをそむかしと二たひうきみちに
おもむきてけふ／はさしきをさへさけられつる事の心うさよ猶もう
き世に／あるならばかさねてうき事をこそみんすらめされは火」
(23オ) の中水のそこへも入なはやとそかなしみけるいもうとの
き／によあね身をなけはわれもともにとそ申けるは、申けるは／か
くまでなさけなくおはすへしとは露もおもひよらすして／とかくけ
うくんして参らせつる事こそくやしけれうらむるも／まことにこと
はり也あね身をなけはいもうとも共になけん／と云二人のむすめに
をくれて一人のこりま、まりたらはいか／はかりの事かはあるへき
ともに身をなけんすらめた、しし／こもきたらぬおやにみをなけさ
せん事五きやくさいにてあ／らんすらんみた如来はさいはうしやう
とをしやうこんし一／念十ねんをもきはす十あく五きやくをもみ
ちひかんと」(23ウ) いふひくはんましますなり四十八のせいく

わんのなかに第三／十五の願にはわれらかやうなるくちあんども
ものをみちひ／かんとひくわんましますなりかのくわんりにす
かり／て西はうしやうとふたいのほうとへまいらんとはおもはず
やといひければきわうまことにしこもきたらぬおやをうし／なはん
事五きやくさいうたかひ有ましとてみをなけん／事を思ひと、まり
ぬとし廿一にてさまをかへにけりいもうと／のきにもあねみをな
けは我もともに契りしかうき／世をいとはんにもたれかおとるへき
とて十九にて同身をそ／やつしけるは、のち二人のむすめのわか
くさかりなるた」(24オ)にもさまをかへぬる世中に我みおしか
らぬしらかをつけても／なにかはせんとて年四十五にてかみをそる
三人さかのおくなる／山里にねんふつしてこそゐたりけれかくて春
すき夏たけ／秋の初風吹ぬればほしあひの空をなかつ、あまのと
／わたるかちのには思ふ事かくころなれや物をおもはざらん／人た
にも露けき秋の夕はかなしかるへしいはんや思ひ有人／の心のうち
をしはかられてあはれなりにしの山のはに／かたふく日を見てはあ
れこそ西方しやうとにてありけれ／いつか我ら生てものを思はてす
くさんとねかふにつけて／もむかしの事のみ忘れねはつきせぬもの
はなみた」(24ウ)なり日もすてにくれければ仏前に花かうそな
へともし／火かすかにか、けつ、三人のあまとも一所にさしつとひ
て／念仏しけるところにとぢふさきたる竹のあみ戸を／た、くをと
のしければあまともねんふつをと、めてひ／るたにも人もかよはぬ
かくれかた、今誰とひくへしと／こそおほえねあはれこれはわれ

らかかやうにをこなひて／あるをさまたけんとてまえんなどのきた
れるにこそ／た、しまえんならばこれほと竹のあみとおしあけ
ていらん事はやすかるへしすみやかにあけたらん程に／たすけはし
かるへしたとひ命をうしなふ共日ころたのみ」(25オ)奉りつる
ねんふつあひかまへてをこたるなよとたかひの／心をいましめてて
をとりくみとぢたるあみとを思ひきり／てあけたれはまはんにては
なかりけりほとけこそんそ出き／たるきわうあなふしきやひるたに
も人もとひこぬしはの／いほりにはた、いまなにとしてきたり給へ
るそといへは／ほとけいまさら申は事あたらしきにたり申さねは
又／思ひしらぬに成ぬへければ申なりわらは、もとすいさんの／も
のとてすけなういはれ奉りてまかり出しをわこせん／申されてこ
そ参せてさふらひしに思ひのほかにめしをかれ／まいらせてわこせ
んをいたされ給ひし心うさ申はかりも」(25ウ)さふらはすいつ
か又わかみの上にてあらむすらんとおもひし／にあはせてしやうし
にいつれか秋にあはてはつへきとか／きをき給ひしふての跡おもひ
しられてこそさふらひし／か又いつそやめされまいらせて今やうう
たひ給ひし時さし／きをさへさけられ給ひし心うさ申いたせはをろ
かなり／そののちいつく共承しうやさりしか此程き、いたしまいらせう
／らやましき事には思ひ参らせてしきりにいとまを申せ／ともおほ
かたゆるされまいらせる事もさふらはすしやはの／ゑいくわは夢の
ゆめたのしみさかへてもなにかせん人しん／はうけかたく仏経には
あひかたし出るいき入をまたすかけ」(26オ)ろふいなつまより

もほともなしかやうの事ともをおもふにいと、／心もと、まらてこのひるひまの有けるにけ出てかくなりて／こそまいりたれとてかつきたりけるきぬをのけけるを見／ければ花やかなりしゑひくわのたもとをひきかへてあまになりてそいてきたる日ころのとかをはこれにゆるし給へゆる／さむとの給は、おなしあんしつに念仏してともに往生／をいのるへし猶もゆるさしとの給は、是よりいつかたへも／あしにまかせてまよひゆきいかならんいはのかと松かねにたふれすまでもねんふつしてみた三そのらいかうにあつから／むとなみたませきあへす申ければきわうあないとおしの」(26ウ)心そのこのいさきよさよかく思ひ給ふとはいかてか露はかり／もしるへきなにも憂世中のさかなれは我身のうき事／をのみ思ふへきにともすればわ御せんの事のみ忘すかた心に／かくりて今生も後生もともにしそむしぬるとおほえて／はれやるかたもなかりつるにわ御せんは思ふ事もおはせず／年もいまた十七に成給ふとこそきくにゑとをいとひしやう／とをねかふへしと思ひ入たまふこそまことの大たうしんにて／おはしけれわらかかやうにさまをかへしこそ人も有かたき事／に申身ながらもふしきに思ひしにわこせんの出家にくら／ふれは事のかすにもあらさりけり日ころのうらみはなにし」(27オ)に露はかりものこるものへきいさやおなし心にこな／はんとて四人ひとつあんしつに念仏してたかひに往生を／いのりけるにちそくのふたうこそありけれともつるにわ／うしやうのそくはいをとけらるとそ承る入道ほとけをうし／なひて手にてをわけてた

つねさせられけれどもなかりけり／しやうかいほとけはあまりにみめのよはりつれは是くか取カ／たるにこそとの給ひける其後や、有てき、いたされ／たりともさやうになりたらんするものをとてたつねられ／さりけり彼ちやうかうたうのくわこちやうにもきわうきによ／ほとけとちらかゆうれいと入れけるとそ承るあはれ也し」(27ウ)事共なり／

二代のきさきの事

そも／鳥羽院御あんかの後はひやうかくうちつ、きしき／いるけいけくわんちやうにむつねにをこなはれてかいたたいも／しつかならすせけんもいまたらつきよせすなかつく永曆／応保よりこのかたあんのきんしゆをほうちよりいましめをく／はへられしかは上下をそれをの、きてやすき心なかりけり／りふかきふちにのそみうすこほりをふんにマツおなし主上し／やうくわうふしの御間なれはなに事御へたてかあるへき／なれともおもひの外の事共ありきこれまた、世け」(28オ)うきにをよひて人けうあくをさきとするゆへなりその／ころ主上と申は二条の院上くわうと申は後白川院／の御事也しゆ上つねは院の仰をも申かへさせおはし／ます中にも人しほくをおとろかし世もおほきにかた／ふけ申事ありここん糸のきさきたいくわう大こくうと／聞えさせ給ひしはおほいのみかとの右大臣きんよしこそこの御むすめ也せんていにをくれ参らせ給てのちは九／重のほかこん糸かはらの御所にそうつりすませ給ひけるさ／きのきさきのみやにていつしかふるめかしくかすかなる／御すまゐにてそ

ありける応保長くはんの比ほひは廿二三に(28ウ)もやならせ
おはしましけん御さかりはすこし過させ給／ふ程なりきされ共天下
第一のひしんのきこえわたらせ給／ひしかはしゆ上いろにぞみたる
御ありさまにてひそかにかう／りよくしにせうしてくわいきうにひ
きもとめしむるにおよ／ひてしのひつゝ御えんしよあり大宮あへて
御返事なかり／けりされはにやひたすらほにあらはれてきさき御し
ゆた／い有へきよし右大しんへせんしをくたされたりければこの
事天下にをいてことなるせうしなれともはくきやうせんき／ありを
の／いけんにはくかのそくてんくわうこうはたう／たいそうの
きさきかうそうくわうていのけいほなりたいそう(29オ)ほう
きよの後かうそうのきさきにたち給へる其れいき／けともそれはい
てうのせんきたるうへちたんの事なり／ほんてうには神武天皇よ
りこのかた今は七十よ代にいた／るまていまた二代のきさきのれい
をさかすとしよきやう／一同うに申あはれけるうへ法皇もしかるへ
からさる事におほ／せられければしゆ上おほせのありけるは天子に
ふほなしわ／れ十せんをよくんによりて万せうのほういをたもてり
され／はこれほのことなかゑいりよにまかせさるへきとて／す
てに御しゆたいの日しをせんけせらるゝうへはしさいを申に／をよ
はす大宮此よしきこしめして御なけきにしつませ(29ウ)おほ
しますせんていにをくれ奉りし久寿の秋のはしめ／おなし草はの露
ともきえやかて家を出世をのかれたり／せはかく憂事はきかさらま
しとそおほしめしけるちゝ／のおとゝまいらせ給て世にしたかはさ

るをもてきやうしん／とすすてにせうめいをくたされぬるうへはし
さいを申／にところなしたゝすみやかに御しゆたいあるへし是ひ
とへにくらうをたすけさせおはしますかうかうの御はから／ひなる
へしなとやう／くにこしらへ申させ給ひけれども／さらに御いらん
もなかりけりやゝ有ておとゝ御返事か／とおほしくて御硯のふたに
かく書すさませおはしける(30オ)

うきふしにしつみもはてぬかはたけの世にためし／なきなをや
なかさん

世にはいかにしてかもれにけんあは／れにやさしきためしにぞ申侍
りける去ほとに御しゆけ／たいの日にもなりうかはちゝのおとゝく
ふのかんたちめ殿／上人しゆつしやのきしき心ことにいたしたて参
らせ給へ／とも大宮物うき御出なれはとみにもいてさせ給はず／は
るかにときうつりさよもなかはになりてのちなく／御車にたす
けのせられ給ひけりことさら色ある御衣をはめ／されすしろき御衣
十五はかりそめされけるうちへまいらせ／給てはけいてんにすませ
たまふひたすらあさまつりこと(30ウ)をすゝめまいらせたま
へる御さまなり彼ししんでんのくわう／きよにはけんしやうのしや
うしをたてられたりいゐんてい五り／むくせいなんたいこうはうち
やうりやうきてうりせきと／しよくわいりしやうくんかすかたをさ
なからうつせるところ／もありてなかあしなかむまかたのしやうし
おにのまをの／たうふうか七くわいけんしやうのしやうしと申ふ
みにの／せたりけるもことほりなりせいりやうてんのくわとの御／

しやうしにはむかしかなをか、うつせるゑんさんの有明の月も有とかやこ院のいまたようしゆにわたらせ給ひしそのかみなにとなき御てすさみにかきくもらか(31オ)させ給ひしかありしなからにかはらぬを御らんしてもせんていの御おもかけいまさら御こひしくやおほしめされけんかくそあそはされける

おもひきやうき身なからにめぐりきておなしくもゐの月をみるとは

そのあひたの御なからひいひしらすあはれにやさしき御事なり
二条院ほうきよの事

さる程に永万元年の春のころよりしゆ上御ふよの御事わたらせ給ふと聞えさせ給しか夏のはしめにもなりしかは事のほかにおもらせ給ひけり是によりて大蔵(31ウ)のたいふゆきのかねもりかむすめのはらにこんしやうの一宮の二さいにならせ給ひけるを太子にたて参らせらるへしと聞えさせ給ひし程におなしき六月廿五日にはかにしんわうのせんしをかうふらせ給ふやかて其後御しゆせんありしかは天下なにとなくあはてけるさまなりそのときいそうしよくの人々の申されけるはほんてうにとうていのれいをたつぬるに清和天皇九さいにしてもんとく天皇の御ゆつりをうけさせ給ひたりしかはかのしうこうたんのせいわうにかわりてなんめんにして一日はんきのまつりことをおさめ給ひしになすらへてくわい^マうちうしんこうようしゆ(32オ)をふちし奉り給きこれせつしやうのはしめなり鳥羽院五さい近衛院三さいにてせんそあ

りこれをこそいつしかなりと申しにこれは二さいにならせ給ふせんれいなしとそ申されけるものさはかしもおろかなり同き七月二十五日しんてい大こく殿にして御そくあり天下のいうきともにあひましはりてなに事もとりあへぬさまなりおなしき二十八日上皇つめにほうきよならせ給ふ御代をさらせ給ひてた二十日そおはしましける御とし二十三にならせたまふつほめる花のちれるかことし玉のすたれにしきのちやうのうちみな御なみたむせ(32ウ)はせ給ふやかてその夜かうりう寺のうしとられんたいの、おく船をか山のふもとにそをくりおさめ奉りけるきをのへつたうてうけん山門よりおりられるか御さうさうのていのみ奉り

きのふみしき^キかゆきをけふとへはかへらぬたひと聞そかなしき

大宮二代のきさきにたせ給ひたりけれともさまての御さいはいにてもわたらせたまはす此君にさへをくれまいらせ給ひしかはつゐに御さま替させ給ひけり

かくうちろんの事

さる程にえんりやくこうふく両寺の大衆かくろんと(33オ)いふ事をしいたしてたかひにらうせきにをよふ一天の君ほうきよの時二京の大しゆことく御むしよのまはりに我てらくのかくをうつ事ありまつしやうむ天王の御くはんあらそふてらなければ東大寺のかくをうつたんかい^マこうの御くわんとてこうふくしの

かくをうつほつきやうには／こうふくしにむかへて延暦寺のかくを
うつつきに／天武天皇の御くわんけうたいくわしやうのさう／と
て／をんしやう寺のかくをうつしかるを今度山門いか、おもひ／け
んせんれいをそむいてこうふくしの上にかくをう／つ間南都の大し
ゆおほしきにいきとをりてさいこん」(33ウ) たうしうにくわん
おんはうせいし房とて二人のあく／そうありくわんおんはうはくろ
いとをとしのよろひに／しらえの長刀のさやはつしせいしはうは
もえき／をとしのよろひに大たちをぬきはしりか、りて延暦／寺の
かくをきりてをとす清水法師にちもんはうつ／とよりてかくをさん
／／にうちわりてけりうれしやみつ／なるはたきの水日はでるとも
つねにとふたへたえずとふ／たへとはやしあけて我かたへそはしり
けるみかどよ／をはやうせさせ給てはいかに心なき草木ぞいたるま
て／もみなうれへたる色をこそあらはすへきに上下をそれ」(34
オ)をの、いてみな四はうへたいさんしぬおなしき二十九日／山門
の大しゆ下らくすときこえしかはふしけひい／しにしさかもとには
せむかひた、かひけれとも大しゆこと／ともせずちやふりてらん
にうす平家のくんひやう／ともたいたりにはせさんしてさゑもんものち
んをけいこす／又なにものか申出したりけん一院山の太しゆに仰て
平治^(平)／をついたうせらるへしと聞えしかは平家の人／／みな六は
らにはせあつまるに小松との、いまた其比は／さゑもんのかみにて
おはしけるかなに事によりてた／うしざやうの事あるへきと大きに
しつめられけれ」(34ウ)とも上下さはきの、しる事なのめなら

す一院もこの／よし大きにおとろき思召ていそき六はらへ御幸なる
平／相国もさはかれけり大しゆそ、ろなる清水寺にをしよせ／たり
清水ほうししやうくわくかまへてたてこもる大しゆを／しよせたり
けれはふないはせはかりけり一たまりもた／まらすあるはうたのあ
るはおちちりにけりその後寺中／にみたれ入て火をはなつたうしや
たうへうふつかくそう／はう一字ものこらすやきはらふ清水寺と申
はこう／ふくしの末寺なるによりて去ぬる御さうその夜のくわい
／けいのはちをきよめんかためにやくとそ聞えける大しゆ」(35
オ)かへり上りてのこうてうにいかなるものかしたりけんや／くわ
んおんくわきやうへんしやうちはいかにといふふたを書／て大門に
立たりければつきの日の朝りやつこうふしき／これを云也と返しふ
たを立たりけるいか成あとなし／もの、しわさにてか有つらむおか
しかりし事ともなり／さるほとにことしつまりければ一院もくわん
きよなる／さゑもんのかみ御をくりに参られけり平しやうこくは
と、／まり給ふ是は猶ようしんのためとそ覚たる小松殿婦／り給て
後相国の給ひけるはさるにても一院の御幸こそ／をそれいりておほ
ゆれいかさまにも仰あはせらる、むねある」(35ウ)に御へんも
うちとけ給ふへからすとの給へはしけもり／のきやうゆめ／／その
こと御ことはにも出させ給ふへから／す人に心つけかほに中／／あ
しく候ななた、しいりよ^(ママ)／にそむかせたまはて人のためにせんをほ
とこさせたま／は、神明ふつたのかこ有へしざらんにとりては御身
の／をそれ有ましとてた、れければ此きやうはゆ、しく／おほやう

なる人かなとそち、のおと、はの給ひける一院くわ／むきよの後御前にうとからぬきんしゆの人／におほせ／けるはさるにてもなもの、いひいたしたりけるやらん露／も思召よらぬ事を夢のやうなる事かなと仰有ければさい」(36才) くわう法師か申けるは天に口なし人をもていはせよと／平家のあまりくわふんにのみ成ゆき候へはほろふへきせん／へうにて天のつけにてもや候らんと申ければ人々是／はよしなしかへにみ、ありおそろしく／とそ申あはれ／ける其年はりやうあんなりければ御けい大しやうゑも／をこなはれすおなしき十一月十二日けんしゆむもん院／のいまたひんかしの御かたとてわたらせ給ひける御はらに／一院の御子五さいにならせ給ひけるか親王のせんしをかう／ふらせ給ふ／

六てうのゐん御そくるの事」(36ウ)

おなしき二年八月廿七日にかいけんあり仁安とかうすこ／としは大しやうゑあるへしとて天下そのいとなみなり／同き十月八日きよねんしんわうのせんしかうふらせ／給ひし王子とう三条とのにしてとうくうにた、せ給／ふとうくうと申はつねはていの御こなり又御おと、のまう／けの君にそなはらせ給ふ事ありそれをはくわうたいて／いと申しかるそにこれはとうくうは御をち六さい主上は御／をい三さいにならせたまふしようほくあひかなはずた、し／くわんわ二一年に一条院七さいにてせんそ三てうの院十一さい／いにて東宮に立せ給ふせんれいなきにあらすしゆ上御ゆ」(37才) つりをうけさせたまひわつかに五さいと申し仁安三ねん／二月十九日にとうくうせ

んそありしかは御代をさらせ給て／いつしか新院とそ申けるいまた御けんふくもなくて大／しやう天皇のそむかうありかかほんてうこれやはしめな／るらん六てうの院の御事也同き二月廿一日しんてい大こ／くてんにして御そくゑありこのきみの御代をしろし／めしけるは一かう平家はんしやうとそみえしそのゆへは／入道のきたのかた八てうの二位とのは女院の御あね平大納／言ときた、のきやうは女院の御所としゆ上の御くわいせ／きにておはしければ内外につめたるしつげんの臣とそ」(37ウ) みえしそのころのしよあちもくと申もひとへにこの時／忠卿のま、なりけりやうきひかさはいはしときやうこく／ちうかさかへしかことし世のおほえときのきらめてた／かりき入道相国天下の大小事をの給ひあはせられけ／れは時の人へいくわんはくとそ申けるおなしき四年四月／八日かいけんありて寿応元年とかうす／

後白川の院御出家の事

おなしき七月十六日後白川院御出家あり御とし四十三に／ならせ給ふゐん御出家の後も猶はんきの御まつりことをし／ろしめされければゐんの御方に候はれけるくきやう殿上人」(38才) 上下のほくめんにいたるまでみなくわんゐるほうろく身に／あまりたりされとも人のならひとてなをあきたらすへいけ／の人々のくわんをもなりくにをもしやうをもふさくをはめさ／ましく思てあはれは人ほろひなはそのくにはあきなん其／の官にはなりなんとうとからぬともたちはさしつと／ひさ、やく時もありけり法皇内々仰の有けるはむかし

／より代々のてうてきをたいらくるものおほしといへ共／かやうの
れいはいまたきかすさたりもりひてさとかま／さかとをほろしら
いきかさたうむねたうをせめ^{義イ}茂／家かたけひらいへひらをうちた
りしもけんしやうをこ」(38ウ) なるは、事しゆりやうには過さ
りししかるに此きよもり／入道かかやうに心のま、にふるまうこそ
しかるへからねこれ／もた、王法の末に成ぬるゆへこそと仰られけ
れともつい／てなければ御いましめもなしへいけも又てうかをうら
み／奉る事もなかりけり／

すけもりてんかのきよしゆつに参会の事

そも／世のみたれそのめけるこんほんは小松殿の二なん／新三位
の中将すけもりのいまたちせんのかみとて十三に／なられるか
さんぬる^(マ)寿応三年十月十六日雪白妙に／ふりてかれの、けしきおも
しろかりければ、いたかはやふさす」(39オ) へさせてさふらひ
二三十きめしくしてうこんのは、むらさき／の北のへんにうち出て
うつらひはりをひたて、ひねもす／にかりくらしはくほにをよんで
大宮のおほちよりこう／ちきりに六はらへこそかへられければその
ときのせうろ／く松殿中御門の御宿所より御さむたいありゆうはう
もん／より出御あるへきにて東洞院をくたりにおほいの御門を／西^(ママ)
へ御出なるすけもりほり川ゐのくまのへんにてはなつき／にいりま
あふてうをんにのみほこりて世をも世ともせず人／をも人とも思は
さりしうへめしくしたりけるさふらひと、／みなわかきものとも
にて礼きこはうをも存せず一せつ下馬」(39ウ) にをよはずせん

くう御すいしんともなにもそらうせき也／御出にてあるそおり候
へ／といひてけれ共み、にもき、入す／かけわりてこそとをりけ
れとの、御ともくらさはくらし入／道のまこともつや／しらすす
けもりい下を馬より取／てひきおとしすこふるちしよくをあたふす
けもりはふ／六はらへおはしておほち大政入道とのにこのよし
を一きに／申されければ入道さいあひのまこにてはおはしけり大き
に／いかりてこはいかにたとひてむかなりとも入道かあたりを／は
一とはなとかは、かり給はさるへきおひさきあるお／さなきものに
ちしよくをあたへられけるこそいこんの」(40オ) したいなれか、
るよりして人にもあさむかるるとよ／この事思ひしらせ申さては
えこそ有ましけれとのた／まへは小松とのその比いまた大納言の大
しやうにておはし／けるかゆめ／その御くわたて思召よらせ給ふ
へからすす／けもりなとか殿下の御しゆつに参りあひてのり物よ
りおり候はぬこそひろうに候へなをしか、る事仕り候も／これらを
人かすに思召たるゆへにてこそ候へよしまさみつ／もとなど申けん
しともにあさむかれても候は、こそ一／もんのちしよくにても候め
これは少もくるしかるましあ／やまで殿下へふれいを申たくこそ存
候へとてた、れければ」(40ウ) てんか^(ママ)その、ちは小松とのには
のたまひもあはせられす／中さふらひとものきはめてこはらかに
入道との、仰より外／はおそろしとも思はさりけるさふらひと六
十よ人をめし／て来二十一日に主上御けんふくのために殿下参内あ
らむす／るをみちにて待うけ奉りてせんくう御すいしんと／もかは

ちすくげ^すとその給ひける承てむねとのさふら／ひには伊せのかみか
けつなをはしめとしてつかうその／せい三百よき中のみかとほり川
ゐのくまへんにて殿下／の御出を今や／とまちかけ奉るてん下は
この事夢／にも思召よらせ給はず日ころの御さんけいよりもひきつ
く」(41オ) ろひてしゆ上御けんふくの御かくはんのためにけふ
より御ちよ／くろにしはらくわたらせ給ふへきにて御参内ありたい
けん／もんよりしゆきよ有へきにて中御門を西へ御出ありほ／り川
ゐのくまへんにて兵共殿下の御出をまちうけたて／まつりて御くる
まの前後より時をと、そつくりけるさし／もはなやかかいてたちけ
るせんく御すいしんともをかしこ／にをひふせこ、におさへても
と、りをきるせんく六人／かうちとうの藏人の大夫たかのりかも
と、りをきると／てこれはなんちかもととりとおもふへからすしう
のもと、り／おもへ^マといひふくめてこそきりたりけれすいしん十人
かうち右」(41ウ) ふしやうたけもとかもと、りもきられにけり
くふのく／きやうてんしやう人くるまのもの見うちわりうしのむな
／かひしりかいきりはなちたりけれはみなくもの子をちら／すこと
／くに也にけりとの御くるまのうちへも弓のはすをつき／入などしけ
れはあまりのおそろしさにいそぎ御くるまよ／りこほれおりさせ給
てあやしの小屋のかたはらへ立そしの／はせ給ひける兵ともかやう
にさん／にしちらしてよ／ろこひのときをつくり六原にさんして
このよしを申／ければ入道しんへう也とそのままひけるその、ち殿
の／御くるまつかうまつるものなかりけるにいなはのさいつ」

(42オ) かひとはの国ひさまろと申男下らうなりければとも／さ
かしきものにて御くるまつかうまつるせつし^マしやうとの／も御なを
しの袖にして御なみたをおさへさせたまひくわ／むきよのぎしきの
心うさ申はかりもなかりけり大しよ／くわんたんかいこうの御こと
は中／申にをよはすてちう^マ／しんこそせう^マせんこうより此かたせ
つしやう関白か、る御め／にあはせ給ふ御事いまた聞さるためしな
るこれそ平家／のあくきやうのはしめとは承る小松とのその夜むか
ひ／たりける御さふらひともしのしみかかけつなをはしめと／して
みなかんだうせられけりたとひ入道とのこそいかなる」(42ウ)
ふしきをけちし給ふともしけもりになとゆめをはみせ／さりけるそ
をよそはすけもりきくわい也せんたんは二は／よりかうはしとこそ
みえたれさすかしけもりか子とも／なといひたらんするもの、十二
三にならはいきこはう／をもそんしてこそふるまふへきに云かひ
なきわかものと／もめしくしてかやうにひろうをけんしふそかあく
みやうをも／たつる事ふかうのいたりなんちひとりに有とてすけも
り／をかんたうしていせの国へそ下されけるあはれこの大しやう／
程なに事につけてもゆかしき人はおはせせりと世にも／ほめられ給
ひけりさるほどに主上の御けんふくものひに」(43オ) けり同き
二十五日に院の殿上にてそ御けんふくのだたは／有けるせつしやう
殿扱しもわたらせ給ふへきにあらねは／おなしき十一月九日かねせ
んしをかうふらせ給ひておなし／き十四日太政大臣にあからせたま
ふ同き十七日に御はいかの／きありしかと世中いとにかりてそ有け

る／

しゆしやう御けんふくの事

去程に年くれて寿応も三年になりにけり正月五日／しゆ上御けんふくあり御年十さいにそならせおはしましけ／るおなしき十三日てうきんため^(ママ)にほうちう寺とのへきやう／かうなるうみかふりの御すかた法皇も女院もいかばかり」(43ウ) かつてたくおほしめされけんおなしき四月二十一日かいいけん／あり承安とかうす／

新大納言なりちかの卿大将所望の事

さる程に其比めうをん院の太将政大臣のいまた内大臣の／左太しやうにておはしましけるか大しやうをしせさせ給ふ事／有時に徳大寺の大納言しつていの卿もそのしんにあた／り給り花山院の中納言かねまさのきやうもしよまう／ありその外こなかの御門のとうちうなこんかせいのきやうの三男／新大納言なりちかのきやうもゐんのでうしんにてひらに／のそみ申されけるかさま／のきたうをはしめらるま」(44オ) つ八幡にそうをこめてしんとくの大はんにやをよませられ／けるかはんふにをよひけるとき男山の方より山はと／二きたりてかうらの大明神の御前にてくいあひてこそし／に、けれ鳩は大はさつ第一のししやなり宮寺にかゝるふし／きなしとて時のけんけう長清法印此よしをそもん／すしんきくわんにて御うらあり天下のさはきとら／なひ申た、してうかの御大事にはあらずしんかのつ、し／みとそ申ける大なこんこれにははかり給はすひるは／人めをつ、みて中御門からすまろの御しゆくしよより／夜な

／ほかうにてかもの上のやしるへ七か夜までそ参」(44ウ) られける第三日にあたりける夜ふかうしてうちふさ／れたりけれ夢にかもへ参りたるとおほしくて御ほう／てんの御戸ををしひらきうたをそあそはされける／

れ さくら花かもの川風うらむなよちるをはえこそと、／めざりけ

大納言なを是にもをそれ給はすなかのやし／ろにそうをこめ百日けほうをこなはれけるにけちくわ／むちかうなりてわかみやのうしろの大杉にいかつちおちか、／り火もえつきてしやたんもあやうくみえければ神人／みや人ともをこりてこれをうちけちてけり神はひれ／いをうけ給はす大なこんひふんの大しやうをいのり申さ」(45オ) れければかゝるふしきもいてきけるにやそのころのしよゐ／ちもくわ院うちせつしやう関白の御せいはいにもをよはず／一かう平家のまゝなりければ徳大寺花山院もなりたて／まはず入道のちやくなんしけもり大なこんの左大将にて／おはしけるかひたりにうつりておと、むねもり中なこん／にておはしけるかすはいの上しゆをてうをつして右にく／はくられけるこそ申はかりもなかりけれ徳大寺殿は一の太／なこんくわしよくゑいようゆう^(ママ)かくゆうちやうにてこえられ／給ふそいこんなるされは御出家などもやあらんすらんと／人申あひけるにしばらく世のなりゆかんやうをみるとや」(45ウ) おほしけん大なこんほうこうのともからのなかに蔵人の／太夫のりはると申ものありかれ有時大なこんに申／けるは君もし御出家など

も候はく御一かのめつはうの／みならずほうこうのともから共皆ま
とひものと成候な／むすくちおしき事にてこそ候へあきのいつくし
まは／平家のひとへにあかめ奉る神にておはしまし候かれへ御さ
むけい候て御せんとの御事も御きせい候へかしくたん／のやしろに
はないしとてゆうなるまひ姫とものす十／人候かれらをも御もてな
し候は、入道相国かへり聞てあ／ひはからははる、むねもや候はん
すらんなど申ければ大」(46才) なこんけにもとやおほしけんし
やうしんはしめていつく／しまへそ参られける七日御さんろう事ゆ
へなくとけさ／せ給て都へ上らせ給ひけるにないしとも御名残をお
し／み奉り一日ちまでをくり奉る大納言あまりにないし／たちのな
こりのおしくおほゆるにさらは都までもと／なひ給へかしてし
かるへきないし十よ人めしくして／みやこにのほりさま／の御ひ
き出もの有てかへされ／けりないしをもみやこに上るほどにてはい
かてかわれらか／平家へ参らさるへきとて西八条へそまいりける入
道／たいめんし給ていかにないしたちはなに事のれつさん」(46
ウ)そへちにしさいはさふらはす徳大寺殿の大しやうの／事御きせ
いのために当しやへ御参りさふらひしかめし／くせさせ給てさま
／の御もてなしとものさふらひつる／なりと申せは入道しやうか
いかあかめ奉るやしろをと／く大寺のたうとみ給ふ事こそ有たたく
おほゆれしんめ／いもさためて御なうしゆわたらせ給らんとて御子
のしけ／もり大納言のさ大将にておはしけるを大しやうをしせ／さ
せ奉りてとく大寺へこそわたされければのりはる／かはかり事

かしこかりしかうみやう也とく大寺とのはかくこそ／ゆ、しくおは
しまし、に成親卿はとく大寺花山院」(47才) などのなりたらん
はいか、せんへいけの二男むねもりに／こえられぬる事こそいこむ
のしたいなれこれもた、万へ／いけの思ふさまなるかいたす所也さ
れはいかにもして平／家をほろほしほんまうをとけはやと思はれけ
るそおそ／ろしきち、のきやうはこのよはひにてはわつかに中納
言にてこそおはせしかこれはその末子にてくらい正二位／くわんだ
納言にあかり大國あまた給てしそくしよし／にいたるまでみなえ
いくわにのみあきみりされはな／にのふそくにてこの心のつかれ
けんこれた、事にあら／すひとへにてんまのしよいとそみえし去ぬ
る平治に」(47ウ) のふよりの卿の事にあひしをもまさしく見き
かれし／人そかしその時ものふよりのきやうに同心によりてすて
にちうせらるへかりしか小松とのやう／に申てくひをつ／き給ひ
しにあらすやされともいつしかそのおんを忘れ／てくわいななき所
にては平家をほろほさんとのいと／なみの外はまたなし東山し、の
たにと申はほつせう／寺のしゆきやうしゆむくわん僧都のりやうな
りうしろは／三ゐてらにつ、きてくきやうのしやうなればこ、をこ
しらへて／へいけをほろほしてかしこへひきこもらんとそきせられ
／きるしゆむくわんそうつかさんさうにつねはよりあひこ」(48
オ)のこをのみきせられける法皇有時少納言入道しん／せいか
しそくしやうけん法印はかりを御ともにて忍ひつ、かし／こに御幸
なるしやうけんここの事を仰あはせられければ／ほういん申されけ

るはゆめ／＼この御くわたて思召よらせ／給ふへからす人あまた承り候この事もれ聞えなは天／下の御大事にて候へしと申されければ大納言のけしき／大きにかはりて御まへをたゝれるかへいちの口にかりきぬの／袖をかけてひきたをされたりければ法皇あれはいかにと／おほせられければ大なこん立かへりてやあへいちたをれ候／ぬと申されけるほうわう大きにゑつほにいらせ給ひて」(48ウ)ものとも参りてさるかく仕れとおほせられければ平／判官やすより御前につとまいりてあゝあまりにへい／ちのおほく候にもてゑひてこそ候へしゆむくわんさてそれ／をは何とかつかまつるへきと申たりければれいの西光／つとよりてへいちをはたゝくひを取にしかしとてへい／ちのくひを取て御まへの桜のえたにそかけたりけるつちの／あなをほりていふ事たにももらし聞ゆる也返さもおそ／ろしかりし事共なりしやうけんあまりの心うさにつや／＼物をも申さすいそき法皇をすゝめ参らせてくわんき／よなし奉るよりきのしゆにはまつあふみの中将入道れん」(49オ)せいそくみやうなりまさ山しろのかみもとかぬしきふの太夫／まさつなほつせう寺のしゆんくわんそうつそう判官のふま／さ平はんくわんやすより新平判官すけゆきつの国け／むしたゝの蔵人ゆきつなをさきとしてほくめんのと／もからおほく同心してんけり中にもゆきつなをは大納言／事のものにし給て御へんをは一方の大將にたのむにし／おほせたらんにをいては国にてもしやうにても所望による／へしこれは弓ふくろのれうにとてしろきぬ五十たん／ゆきつがもとへをくりつかはされけ

りとしざりとしき／たりて承安五年になりけり七月二十八日かいけんあり」(49ウ) あん元とかうす上こにはほくめんはなかり白川院の／御時よりそはしまりけるゑふともあまためしをかれて／ためのりもりしけわらはより千寿丸いまいぬ丸とて／これらはさうなききりもの也鳥羽院の御ときもすゑ／のりすゑよりふしともにてんそうする時もありなときこへ／しかともこれはみな身のほとを存してこそふるまひし／にこの御ときのほくめむはもての外にくわふんにてく／きやう殿上人をも事ともせずれいきもなく北面より上／ほくめんにあかり上ほくめんより殿上のましはりを／ゆるさるゝもありかくのみをこなはれし程にみなをこれる」(50オ)ものともにてかやうの事にもくみしけりかのともからのな／かにもろみつなりかけと申ものありこれはこ少納言入／道しんせいのもとにめしつかひけるわらはあるひはかくこん／しやにてけしかるものにて候けるかさか／＼しきにより／て院の御かんろにもかゝりけりもろみつはさゑもんのせう／とて二人一度にゆけいのせうに成たりしかしんせい事に／あひしときともに出家してさゑもん入道西光う衛門／入道西けいとて出家ののちも猶院のくらあつかりにてそ／候ひける／もろたかとうあくきやうの事」(50ウ)かのさいくわうか子にもろたかと申ものありこれもきり／もりければ蔵人との五位のせうにへあかりて安元元年／十二月二十九日ついなのもくにかゝのかみにそふせられけ／るしたかつてこくむを、こなふあひたひはうひれいをち／やうきやうし神社仏寺けんもんせ

いけのしやうりやうをもつた／うしきむくの事ともにてそ有ける
たとひてうこうか／あとをこそへたつともをんひんのまつりことを
こそをこ／なふへきにかくのみふるまひし程におなしき二年の／な
つママの比しやていこむとう判官もろつねをか、のもくた／いにさしく
たすけちやくふのへんにうかは寺と申山寺ママ（51オ）ありもろつ
ねかのてらにらんママにうして寺そうとももの／ゆあみけるをおひあけて
わか身もあママみいへのこらうとうを／もおろしけりあまさへさう人と
もをもおろして馬の湯／あらひなとせさせければしそうら大きにい
きとをり／てわうこより此所へ国方のもの、入部する事なしすみ／
やかに入ふのわうはうをと、めよといへは前さのもく／たいはふか
くにてこそいやしまるれ当もくたいにをる／てはまたくそのき有ま
した、はうにまかせよと云／問しそうらは国方のものをついしゆつ
せんとす国はう／のものついでをもてらんママにうせんとせし程にたか
ひにママ（51ウ）うちあひはりあひなとしけるもろつねかひさうし
ける／馬のあしをうちおるのみならずおかみをさへきりてけり／も
ろつね大きにかママてみなうちとれとけちしければ／しそうもきうせ
んひやうちやうをたいしてたかひにい／あひなとしけるほにもろつ
つねかなはしとおもひけん／夜に入てこくふへひきしりそくもろつ
ね当国のさ／いちやうくはん人三千よきをそつしてうかは寺にをし
／よせてたうしやふつかくそうはう一字も残さすやき／はらふふせ
くところのそうりよ二百よ人うちころさる／う川と申ははくさん中
宮の末寺なるによりて三ママ（52オ）しやならひに八院のしゆとさ

うす白山ママの衆とのちやう／ほんにはちしやくかめいほうたいはうし
やうちかくいとさの／あしやりそす、みけるそのせい二千よき同き
七月九日の／とりのこくにはもろつねかおちちかうこそをしよせた
れ／けふは日くれぬ明日にてこそとて大しゆその夜はちかき／へん
にちんをとりてゆらへたり露ふきむすふ秋かせ／はいむけの袖をひ
るかへしくもまをてらすいなつまは／かふとのほしをか、やかすも
ろつねかなはしとや思ひけん／夜にけしてこそ上りけれつきの日の
また朝大しゆを／しよせたりけれとももろつねおちぬと聞えしか
はママ（52ウ）ちからをよはてひきかへすせんする所此よしを山門
に／うたへてくけへそうもんすへしとてめうりこんけん／のしむよ
をひえい山へふりたてまつる八月十一日のむ／まのこくはかりにめ
うりこんけんママのしんよ東さかもと／につかせ給ふと申程にこそあり
けれにはかにそらかき／くもり北国のかたよりいかつちおひた、し
く都をさし／てなり上るにしらゆきくたてちをうつみ山上らくちう
／をしなへてときはのこすゑまでみなしろたへにそ成／にける三千
の大しゆひかしさかもとにおりくたてしんよ／をはいし奉るすなは
ちきやく人の社へ入奉る山門にママ（53オ）きやく人の御せんと申
は白山めうりこんけんママの御事也さ／たのしやうふはねとも白山のし
ゆとしやうかいのめんほく／この時に有とそみえしきやくしんの御
せんいらせ給ひ／ぬれはかのうらしまの子か七世のまこにあへりし
かことし／たいないのもの、りやうけんママのち、をみしにおなし三千
／の大しゆくひすをつき七社の神人袖をつらねし、のき／ねんほつ

す心もことはもをよはれず大しゆそうしや／うをさ、けてこくしも
ろたかるさいにしよせらまもく／たいもろつねきんこくせらるへきよ
しそうもんすされ／とも御さいたんち、しければしかるへきくきや
う殿上人」(53ウ)の申あはれけるはあはれすみやかに御さいき
よ有へき／ものを山もんのせせうはたにことなり大藏卿ためふ／さ
たさいのすゑなかはてうかのてうしんたりしかと／も山門のうたへ
によりてるさいせられまきよしてもろ／つねなどは事のかずにや有へ
きされは何のしさいか／あらんと申されけれども大しんはろくをお
もくして／申さすと云事なれはをのく口をそとちられけるか／も
川の水すくろくのさい山ほうし是そわか心にはぬと白川院は
仰られけるされは鳥羽院の御ときゑち／せんの国へいせんしを山も
むにつけられしもたうさ」(54オ)むの御きえあさからさるによ
りてひをもてりとせよ／とせんけせられてこそめんせんをも下され
けるなれかう／そつの申されけるは大衆しんよをたいりへふり奉り
てそ／せうをいたさんには君もいか、せさせおはしますへきと申／
されければけにも山もむのせせうはもたしかたしとそ／君も仰られ
けるほりかはの院の御宇カ寿保元年の／冬の比みの、かみみなもとの
よしつなのあそん当国しんマ／りうのしやうをたをすについてやまの
くちうしやえん／ゆうをせつかいすこれにて日吉のしやし延暦寺
の／寺くわんつかう三十よ人そうもんのためにちんとそへ」(54
ウ)こそさむしけれこ二条の関白殿やまとけんしなか／つかさのせ
うよりはるにおほせてこれをふかせかせら／るよりはるからうとう

やをはなつあひたきすをかう／ふるもの八人しするものは四人なり
しやししよしらお／めきさけんでみな四方へにけちりぬかさねても
んとの／そうかうらしさいをそうもんのためにけらくすと聞え／し
かはふしけんひいし西さかもとにはせむかふさるほどに／山門には
七しやのしんよをマこんほん中たうへふり奉り／て関白殿をさま
く／にしゆそかし奉る日吉のしんよう／こかし奉る事これをはしめ
とそ承る三千のしゆと八王」(55オ)子権現の御前にてしんとく
の大はんをやをよまれけるに／中いん法印のいまた中いんくふと申
けるかかうさに上／りけいひやくのかねうちならしけうけのことは
こそおそ／ろしけれ我らかようせうなたねの二はよりおほしたて／
給ふかみたちとしりなからむしものにあひてこしから／み給ふくわ
んはくとのかふらや一はなちあて給へ大八王／子こんけんとかか
らかに申けるそ聞人身のけもよた／ちてはおほえけるやかて其夜八
王子の神殿よりかふら／やのこゑ出て都をさしてなりもてゆくこそ
人のみ、に／は聞えけるつきの日のいまた朝関白との、の御宿所
に」(55ウ)御かうしまいらせけるにた、いま山よりおりたるこ
とくなる／しきみの露にぬれたるか一枝おひ出たりこの事おほきに
／ふしきのすいさうなりと申しほとに／

後二条関白殿日吉の御社に御りうくはんの事

やかて関白との山わうの御とかめとてちうひやうをうけさせ／給ひ
しかは日吉のやしる延暦寺へさまく／の御くわんを／立さまく／の
御いのりともありとかや百はんのひとつ物百／はんのしはてんかく

けいはやふさめすまうをのく百／はん延暦寺にをいて百さのにな
わうかう百さのやくし／かうとうしんのやくしのさう七たいいちやくし
くしゆはんの」(56才) やくしの百たいしやかあみた一ちやくし
ゆはんのさうをのく／のさう百たいさうりうくやうし奉らる関白
と／の、御ほきはきやうこくのおほと、北のまん所也さ／いあひ
の御一子にておはしましたしければことに御なけき有／て日吉のやしる
へ御参りあり人めをつ、ませ給ひて／八王子のかたはらに七日さむ
ろう有ていのり申させ給ふ人／これをしり奉らす御心中に三の御く
はんありいかてか人／しり奉るへき有夜きせん上下おほく参りあつ
まれるな／かにあふしうよりはるく／とのほりたるわらはみこあり
こ／よひはしめて此御社へまいりたりけるか夜半はかりに」(56
ウ)にわかにつしゆす上下これはいかにとさはくやかていき／出
て我に八王子こんけんのりさせ給へりとてたく／せんしてはいく当
時関白との、御しよらうによりて／さま／の御祈りともありなか
にも関白との、御ほき／しのひて是に七日御さんろう有ていのり申
させ給ふいか／てか人これをしり奉るへきいはんや御心中の三の御
くわんを／やまさにきくへしとて第一の御願にはこむと関白の殿／
の御ちうひやうたち所にいへさせ給ふ御しゆみやうちやうをん／の
御事ならは大鳥ゑよりやしるく／のほうせん八王子／にいたるまで
くわいろうをつくりかけんとなり第二の御くわ」(57才) むには
祈る所しあらは我かたちをやつし八王子のした／とのなるもろ
く／のかたわう人の中にましはりてに／はのちりをはらひ千日宮つ

かへんとなり第三の御くわん／には八王子こんけんの御前にてまい
日法花もんたう／かうなかくをこたりあらしとなりいつれもく／あ
りかた／うおほしめせまことにまい日さんけいのとよもから朝／に
はきりをはらひ夕には露をしのくくわいらうあらん事／あらまほ
しくおほしめすた、しこのしゆとはみななん／きやうくきやうのこ
うをもて今度のしやうしをはなむと／今さらくわいらうをよるこふ
へからすたい二の御くはん」(57ウ) 千日のみやつかへと承るこ
とにありかたうこそ聞召せ神の／一さいしゆしやうをおほしめすも
親の子をおもふかことし御身大／殿の北の政所にて玉のすたれの内
にしきのちやうにまつはれて／たへなる御事にこそおはしませと子
を思ふやみにまよは／せ給てみるもいふせくあさましけなるかたわ
う人の中／にましはりて一日二日の事ならず一千日までつかへ神と
し／てもいかてかあはれみ奉らさるへきさこそはおほしめすら／め
とあはれ也これはさる事にてはあれ共たい三の御願法／花もんたう
かうと承るこそ中にも有かたけれこの山のふ／もとにあとをたれて
一さい衆生をとするも一しようけちえん」(58才) のためなり一
け一くのほうもむたに有かたかるへしいはんや／まい日をこたりな
からん事のめてたさにまことにさもあら／は関白殿の御やまひちや
うこうかきりありと申せ共しんかの／御身にあひかはりて三年の命
をたすけ奉らんするはいか／に関白殿のしやしらにはなちあて給へ
るやはわくわうのしん／たいにあたれりとてひたりの袖をかたぬき
たるをみけれ／はやめとおほしくてわきのした大なるかはらけの口

はか／＼り程うけのきたりしよ人めをおとろかしすいきの涙を／＼そなかしけるその時北の政所山王の御たくせん少もたか／＼はすふしきにたうとく思召れければ人めをもは、からせ」(58ウ)給はすきせんの中にあらはれてさせ給ひてたて申と／＼ころの三のくわんいつれも／＼たかひさふらはす一日二日の命／＼のひんたにもありかたかへしいはんや三年と承ればこ／＼むとの参りの御りしやうこれにすきさふらふへからす法花も／＼むたうかうにをいては御うたかひ有へからすと申させ給ひ／＼ければ御ともに候はれける人／＼さるにてもいかなる御／＼事にか猶も御いのちひさせ給ふ御事わたらせ給ふへきと／＼申されけるに三年の後は神もちからをよはせ給はず／＼とて権現はあからせ給ひけりつきの日御けかう有て／＼関白との、御けりやうきの国たなかひしやうと云所を八」(59オ)王子へ御きしん有てまいにち法花もんたうかうまつ代／＼の今までたえせずとそ承る関白との、御ちうひやう／＼たち所に御へいゆありまた神位はつきせ給はずとふ／＼しきなりし事共也三とせかすくはゆめなれや康和／＼元年六月二十一日のゆふへよりくわんはく殿又御やまひ／＼にうちそふさせ給ひける山王の御やくそくもいまの月日を／＼かきらせ給ふ事なればた、しこくのたうらいをまたせ給ふ程／＼

御二条関白殿御せいきよの事

おなしき廿八日のあかつき御とし三十八にてつゐにかくれさ」(59ウ)させ給ひけり御心のたけさりのつよささしもゆかしき人と／＼こそ聞えさせ給ひしかともまめやかに事のきうになりし／＼かは御いの

ちをおしませたまひけるとかやまことにおしかる／＼へしいまた四十にたにみたせたまはて大とのにさきたち／＼奉らせたまひけるこそあさましけれかならず親をさきた／＼つへしと云事にはあらねともせんこさういのわかればな／＼けきの中のなけき也をよそしやうしのをきてにしたかふ／＼ならひまんとくえんまんのせそん十ちくきやうの大したち／＼もちからをよはせ給はずこの御事をおもふにしひくそく／＼の山王りもつのはうへんなれはとかめさせ給はさるへしとも」(60オ)おほえすされはさんものそせうはおそろしき事也／＼とぞ申つたへたる／＼

御こしふりの事

さるほどにとしくれて安元も三年に成にけり三月五日めうをんぬん殿をしあけられ給ひけり一のかみこそ御せ／＼むとなれともあくさふの御れいそのは、かり同き十三日／＼に小松殿大臣の大きやうをこなはれけりそむしやおほい／＼の御門さたいしんつねむねこうとぞ聞えしおなしき／＼四月に山門の大しゆ日吉のさいれいをおしとめて十三日／＼のたつの一てんに大みやのろうもんのまへに三たうくわいかう」(60ウ)して加賀のこくしもろたかるさいにしよせられもくた／＼いもろつねきんこくせらるへきよしそうもんのために／＼十せんしきやく人八王子三しやのしんよをさ、けたて／＼まつりてちんとうへこそさむしけれ西さかさかりまつた、す／＼むめた、やなきはらとう院のへんにし、つつみの音おひた、／＼しく聞え神人みやしら大衆かも川原にみち／＼たりし／＼むよは一てうを西へみゆきなる御し

んほうてむにか、／やききらめきわたりて日月ちにおちさせ給へる
かとお／ほえたりくわうきよには源平りやうかの太将くんちよく／
をうけたまはりて四方のちんをかためて大しゆをふせく平」(61
オ)氏には小松との三千よきのせいにて東をもてやうめ^(ママ)にた／いけ
んゆうはう三の門をかためらるさゑもんのかみよりも／り一千よき
にて南のちんをかためらる平さいしやうのりも／り千よきにて西の
門をかためられるけんしには大内の／しゆこそ源三位頼政わたなへた
うはふくさつくとなう／なとをはしめとしてつかうそのせい三百よ
き北おもてぬい^(ママ)もの、ちんをかためたりおほちはひろしせいはず
く／なしもてのほりにまはらにこそみえたりけれ大しゆ／ふせい
なるをめにかけてしんよをぬいと、ちむより／ふり奉らんとすす
てにかうとみえけるによりまさ」(61ウ)の卿いか、思はれけん
かふとをぬき弓をはつしてしんよをはい／し奉る大将のかくしける
うへはいへのこらうとう三百よきも／したかてかくのこしよりま
さのきやういさ、かしゆとの／中へ申をくるむねありつかひはわた
なへのちやう七となう／とぞ聞えしきちんのひたたれにこさくらを
きに返したるよろひきて三尺五寸むのこくしつ^(ママ)のたちをはき十八
さ／したるしらはのやおひしけとうのゆみわきにはさみかふと／を
はぬいてたかひもにかけをき道よりあゆみ出て大しゆの／前にかし
こまる源三位殿の申せと候はこんと山門の／御せせうりうんのてう
もちろむに候御さいたんのち、こそ」(62オ)よそなからもいこ
んに候へさてはしんよを入參らせん事いとや／きす御事^(ママ)にて候た、

しこせいのしかもあけてとをし／參らせんちんよりいらせおはしま
して候はく^(ハ)(山の大しゆ／大せいにはをそれてめたりいんちしける
と京わらはへ／の後日のなんにてや候はんすふせきまいらせ候はく^(ハ)
(ねん／らい伊王山王にかうへをかたふけ參らせ候よりまさけふ／
よりのちなかくゆみやの道にわかれば候なん又とをし／參らせ候
は、せんしをそんむくににたりかれと云是と／いひしんたいこ、に
きはまれり東のちむをは小松のたい／ふ三千よきにてかためさせら
れてか^(ママ)のちんより入せおはし」(62ウ)まして候はんこそ山王の
御いくわうもいよ／めてたくしゆ／との御いしゆもあらはれて御
せせうもたつしぬとおほえ候へ／といひをくりたりければとなうか
かやうに云にふせかれ／て神人みやしろ^(ママ)しはらくゆらへたりわか大
しゆはなんてう／た、このちんより入まいらせよやと云ける中に一
山のちや／うほん三千のいひ口^(ママ)おほしきつ^(ママ)のりつしやかうんす、
／み出て申けるはもともそのいはれありまことに神よを／さ、け
奉りてせせうをいたさん日はか、る大せいの中を／かけやふりたら
んこそこうたいのきこえにてもあらんす／れしかもこのよりまさは
六そんわうよりこのかたけんし」(63オ)ちやく／の正とうな
りゆみやをとりにて天下に名をあく／るのみならずやまとことのはも
ゆうにあるなるもの／をさむぬる応保の比近衛院御さいゐの時たう
さの御くわ／いにしんさんの花といふたいのいてたりしをもすいふ
むの／人／よみわつらはれたりけるにこの頼政こそよみたりし^(カ)
み山木^(ママ)のそのこすゑともみえざりしさくらは花にあら／はれに

けり

と云めい歌をつかうまつりてゑいかにあつか／りにりしやさおと
こかためたるもんにこそ有なれいか／かなさけなくちしよくをは
あたふへきた、この神よかき／かへし奉のれやとせんきしければ三
千の大衆せんちん」(63ウ)よりこちんにいたるまでもとく／と
そとうしけるその／後きたの、しんよをさ、け奉りて東のちんへま
はる／ふしともしはしはふせきたてまつりけれ共大しゆ事／ともせ
すみたれいりける間たちまちにらうせきいてきて／たいけんもんか
ためたるふし六人やをはなつそのや十せん／しの御こしにたつ神人
みやしいころされしゆとおほくき／すをかうふりおめきさけふこゑ
上はほんてんまでも聞へ／下はけんらうち神もおとろきさはき給ふ
らん大しゆ三／社のしんよをちんとうにふり奉りてなく／ほん山
に／かへり上るそののちたいりには蔵人のさせうへんかねみつを」
(64オ)をもてせんれいを大けきもろひさにたつねらる殿上には
／にはかにくきやうせんきありいんし保安四年四月にしん／よしゆ
よ／らくのときはさすに仰てせきさんの社へ入／奉る又ほうえん四
年七月にはきをんのへつたうに仰て／きをんのやしろへ入奉る今度
はほうえんのれいたるへし／とてきをんのへつたうこん大そうつて
うけんにおほせてき／をむの社へ入奉るかのやしろのしやしよし
らさむかう／してうつとりたてまつるへいちよくにをよんでそ入た
てまつり／ける神よにたつ所のやはかの社の神人してぬかせらる
／大しゆしんよをさ、け奉りてせせうをすいたす事永久よ」(64

ウ)りこのかた安元の今にいたるまでそのれい六かとなりまい／と
ふしをもてふせかせられしかともまさしくしんよにや／をいかけた
てまつる事これそはしめと承るれいしんい／かりをなせはさいかい
ちまたにみつといへりおそろし／／とそ申けるおなしき十四日に
山門の大しゆ又けこくす^(マ)／と聞えしかは主上ようよにめして法住寺
とのへきやう／かうなる中宮御車にて六はらへ行けいあり関白太政
大臣／已下くきやうてん上人しくわん我も／とはせ参る山門に／
はせいたんちいむのうへ神人みやしいころされしゆとおほくき／す
をかうふりしかは大宮二のみや延暦寺のかうたう中堂」(65オ)
そうしてしよたうをやきはらひて三千のしゆとさんりんにまし／は
るへしとせせんきしけるしゆとの申所君も御せういん／あるへしと
聞えしかは山門の上かうこのよしをもんとにあ／ひふれんとてとう
さむすと聞えて大しゆ大きにいかりて／にしさかもとよりをつくた
すこれによりて平大納言／ときた、のきやういまたさゑもんのかみ
にておはしけるか上／けいにた、る山門には三千のしゆと大かうた
うのにはにくは／いかうしてた、上けいをひきはれかふりをおとせ
水うみに／しつめよなとせんきしけりすてにかうみえけるにとき／
た、のきやうしはらくしつまられ候へしゆとのなかへ申へき」(65
ウ)事ありとてくわい中よりこす、りた、うかみをとり／いたし一
くをかきてそをくられけるしゆとのらんあくをい／たしすはまえん
のしよきやうなりめいわうのせいしを／くわふるはせんしんのおう
こなりとそか、れたる大衆こ／れをかんしてをの／／たにく／／にく

たりはうくへそ入にける一字一くのことをもて三たう三千のいきとをりをやすめたうさのなんをのかれてちよくしのせつをまたくしけるときた、のきやうこそやさしけれ山／上らく申しほくをおとろかさすといふ事なしおなし／き廿日花山院のちうなこんた、ちかのきやうを上げいと」(66オ) してこくしもろたかるさいにしよせられもく代もろつ／ねきんこくせらる又去ぬる十三日神よにやいかけ奉り／したいけんもんかためたるふし六人こくちやうせらるこ／れは小松の内大臣しけもりここのつかはる、所のくんひ／やうともなり同じき二十八日のいこくはかりにひく／ちとみのこうちへんより火いてきたりおりふした／つみの風はけしかりければきやう中おほくやけに／けり北野の天神のこうはいとのくへいしんわうのちさく／さとのとう三条のかもいとのさい三条のそめ殿／ふゆつきのおと、かん院殿でいしんこうのこ一条」(66ウ) せうせんこうのほり川殿たちはなのいちせいはい松との／にいたるまでむかしいまのめいしよ二十よかしよくきやう／のしゆくしよたに十七か所までやけにけりてんしやう人／しよたいふ巳下のいへく／はしるすにをよはすしやりん／はかりなるほむらか三ちやう五ちやうをへてた、とひこゑ／くいぬゑをさしてやけゆけはおそろしなともを／ろかなりはてはたいりにふきつたりしゆしやくもん／よりはしめておうてんもむくわいしやう門大こくてむふら／くゑんしよし八しやうあひたん所くわんのちやう大かくれう／にいたるまでた、一時のくわいしんのちとそなりはてける」(67オ) その

ほかいへくの日き代くのもんしよ七ちんまんほう／さなからへんしのけふりとなるそのついへいくそは／くそや人のやけしぬる事す百人きうはのたくひ／かすをしらすをよそのみやこ三ふん一はやけたりな／と申けるこれた、事にあらすえいさんより大なる／さるとも一二千たりて手にまつ火をともしてやくとそ／人のゆめにみえたりけるをよそ大こくてんのやけにけるこ／そあさましけれこのてむは清和天皇の御宇ちやうくわん十／八年にやけたりしかは同き十九年正月三日やうせいな／ゐんの御そくゑはふらく院にてそありける元慶元」(67ウ) 年四月九日事はしめありておなしき二年八月にさう／ひつせられたりしか天喜五年二月二十六日に又やけに／けり治暦四年八月事はしめありておなしき十月上とう／あるへしとさためられたりしかこれんせい院ほうきよ／成しかは後三条院の御宇延久四年四月十五日につくり／出して又せんかうなし奉るもん人しをけんしれい人かく／をそうしゆ、しかりしきしき也いまは世すゑになりて国／のちからもおとろへぬれはそののちはさうゑいもいたされす／

(以下、二分空白)

「(68オ)

(空白)

「(68ウ)

平家物語卷第二目録

一さするさいの事

一ゆきつなかへりちうの事

一 さいくわうほうしちうせらるゝ事

一 小松とのにし八てうに参らるゝ事

一 たんはのせうしやうとうむほんのともからるさいの事

一 ち、けうくむの事

一 しん大なこんせいきよの事

(以下、二行分空白)

(空白)

「(1オ)

」(1ウ)

平家物語巻第二

さするさいの事

安元三年五月五日でんたいさす明雲大僧正くしやうを／と、められ
けくわんせられ給ふうへくらんとを御つかひにてによい／りんの御
ほんそんをめし返し奉りて御ちそうをかいゑき／せらるすなはちし
ちやうの御つかひをつけ今度たいりへ／しんよふり奉りししゆとの
ちやうほんをめされけり又／か、の国にさすの御はうりやうあり是
をもるたかてうは／いのあひたもんとの大衆をかたらひてせせうを
いたすこ／れすてにてうかの御事大事にをよひぬるよしさいくわ
う(2オ) ほうしかむしつのおんそうによりてほうわうおほまきに
けき／りんありてちうくわにおほしめしきためけりさすほうわう／
の御きそくあしきよしきこえしかはいんやくを返し／たてまつりて
さすをし、申されけりおなしき十一日に／鳥羽院の七のみやかつく
わいほつしんわうてんたいさすに／ならせたまふこれはこしやうれ
ん院の大そうしやうきやう／けんの御てしなりおなしき十二日けひ

いし二人をつけて／せんさす水火のせめにをよふへきよし聞えしに
よりて／山門の大しゆけらくすと聞えければたいりならひにゐんの
／御所へくんひやうをめされけりされとも大しゆさんらくせされ
は(2ウ) 事しつまりぬ同廿日太しやう大臣已下くきやう十三人
をの／／ちんのさにつきてせんさすさいくわの事きちやうありな
／かにも八てうの中なこんなかたのきやうのいまたさ大／へんの
さいしやうにてはつさに候はれけるか申されけるは／ほつけのかん
しやうにまかせてしさい一とうをけんしをんる／せらるへしとはみ
えて候へともせんさす明雲はしやうき／やうちりつなるうへけんみ
つけんかくして一しよう妙経を／くけにさつたてまつり三しゆし
やうかいをほうわうにたも／たせたてまつる御きやうのし御かいの
しなりをんるのちう／くわにをこなはれん事みやうのせうらんはか
りかたう覚(3オ) 候けんそく遠流ともになためらるへきかとい
さ、かるところ／もなく申されたりければたうのさのくきやうみな
とうす／と申あはれけれどもほうわうなをいきとをりふか／りけれ
／はちうくわにおほしめしきためけり僧をつみするなら／ひととと
えんをとりにけんそくせさせ大納言のたいふふち／井の松枝といふ
そくみやうをつけられけるこそあさまし／けれおなしき二十一日に
せんさすすてにいつのくにへし／／ときこえしかは人／／やう／／に
申されけれどもかなはず／大しやうの入道も此事なため申さむとて
ゐんさんせられ／たりけれ共御かせのけとて御前へもめされざりけ
れはいき(3ウ) とをりふかくて出られけり今日やかて都のうち

をついしゆ／つすへしとておつたてのくわん入りやうそうしら川の御は／うにまいりむかひてこのよしを申ければさすとる物もと／りあへさせ給はすいそき御はうを出させ給ひてあわた口の／ほとり一さいきやうのへつしよへなく／たちそいらせ給ひ／ける山門の大しゆしよせんわれらかかたきはさいくわうほうし／ふし也とてかれらおやこかみやうしをかきてこんほんちう／たうにおはします十二しんしやうのうちこんひら大しやうの／ひたりの御あしの下にふませ奉りねかはくは十二しんしや／う七千夜しやしこくをめぐらさすさいくわうほうしふし」(4才)か命をめしとらせ給へとしゆそしけるこそおそろしけれおな／しき二十三日せんさす又あはたくちのへつしよをいて／させたまひけりさしもほうむの大僧正程の人にかうそめ／の御衣をはきせ奉りなからんむまのうたてけなるにの／せ奉りてりやうそうしらかさきにけたてまいらせけふ／をかきりにせきのひんかしへおもむかせ給御心の中をし／はかれてあはれ也大つのうちいてのはまにもなりしかは／もんしゆるうののきはのしろくとして見えけるを二／めともみたまはすそてのをかほにをしあて、なみたにむせ／ひ給ひけりなかにきめ(きま)のへつたうてうけんほういんのい」(4ウ)またこん大そうつにておはしけるかせんさすのなこりを／おしみまいらせてあはつまでをくり奉りてかへられける／にせんさすこれまでをくりたる心さしのありかたさに年／来御心中にひせられけるてんたいゑんしうのけうほう一し／む三くはんのもむならひにけちみやく相承のしたいをて／うけんになつて

られけりこのひほうと申はしやくそんふ／そくの御てしはらないこのめみやうひくのりうしゆほさ／つよりこのしたいにさうてんきたれりしかるをけふの／なけさけにこれをさつげらるさすかわかてうはそくさんへん／ちのさかひと申なからてうけんこれをふそくせられてまつせと」(5才)いへと有かたきにほうゑのたもとをしほりつ、かへられけるそ／あはれなるこの明雲と申は天皇の第七のわうしくへい／しんわうに六代の御へうゑいこかの大納言あきみちの／きやうの御子なりけんみつけんかくならひなきかうそうに／ておはしましければ天わう寺ならひに六せう寺のへ／つたうをまかねたまへり仁安三年二月十五日にてんた／いさすにならせ給ふあへのやすちかか申けるはめいんはき／やうとくの程はめてたけれどもた、し明雲と申御なこそ／心えね明雲はかみに日月のひかりをならへしにもくもありと／なんし申けるかのちうたうのほうさうにはう一しやくの」(5ウ)はこありしろききぬにてつ、まれたりその中に大(つ)じに／かける文一卷ありてむけうたいし末代のさすのしたいをかね／てあそはしをかれたり代々一しやうふほんのさす御はいたうの時このふみをひらいてわか御なのある所まではよみてそ／をか

きなれさ」(6オ)るほとに山門には三千の大衆大かうたうのには
にくわいかう／してせんきしけるはそも／てんけうしかくの御事
は／中／申をよはすきしんくわしやうより此かた天た／いさす
はしまりていまたるさいのれいをきかぬ物をいら／／事の心をあ
んするにむかし延暦年中にくわんむ天／皇てんけう大師御ちきりを
むすはせ給ひてくわうてい／はていとをうつして九ちうのこうきを
ひらき大しはたう／さんにうちほりて四明のけうほうをひろめ給
ひしより／此かたなく五しやうのによ人あとたえて三千のしやう
りよ／きよをしめたりみねには一しやうとくしゆとしふりてふも
と」(6ウ)には七社のれいけんあらたなり彼くはつしのりやうせ
／むはていととうほくにそはたて大しやうのいうくつ也／このし
ちいきのゑいかくはわうしやうのきもむにあた／りてここのれい
ちたりされは代さのけんわうちしん／みなこの所にたんちやうをし
むこは末代といはんからに／いかてかわれか山のくわんしゆをはた
こくへはうつさるへき心／うしといふほとこそ有けれ三千の大しゆ
一人も残りと、／まらず皆東さかもとにおりたる十せんしこんけ
ん／の御前にしゆゑしてせんきしけるはそも／今度／われらあは
つにゆきむかひてくわんしゆをとりと、め」(7オ)たてまつるへ
した、しりやうそうしらか有なれば事ゆへ／なくとりたてまつらん
事ありかたし今は十せんしこむ／けんの御ちからの外はたのみ奉る
かたなしとかんたんをく／たきて申ところにもとて寺法師にしよう
ゑもんりつ／しかわらははにつるまつとてしやうねん十八さいになり

けるか／五たいにあせをなかしん／をくるしめわれに十せんし
／こんけんのりゑさせ給へりとてにはかにくるひいてたり／大しゆ
あやしとみるにたくせんしていはくしやう／せ、／に心うしまつ
代といはんからにいかてかわか山のくわんしゆを／はたこくへはう
つさるへきさらんにとりては我この」(7ウ)山のふもとにあとを
と、めても何にかはせんとしてさうかん／よりなみたをなかつ大衆こ
れを承りてみな袖をそぬらし／けるまことに十せんしこんけんの御
たくせんにておはしま／さは我らしるしをたてまつらんすいさうを
見せしめ給へと／てめん／にたちならひたる老僧千よ人かて、に
もちたるね／むしゆを大ゆかの上へなけあけたりくたんの物つきは
しり／めぐりこのねんしゆをつかのことくりあつめすこしもたか
へ／すもとのふしにくはりわたすまことに十せんしこんけんらい／
けんあらたにわたらせ給ひけりとてをの／いさみをはし／なして
そむかひけるあるひはへう／たるしかからさきの」(8オ)はま
にあゆみつ、ける大しゆもありあるひはやまたやは／せのこしやう
に舟をし出すしゆとも有大しゆうんかのことく／まいりければさし
もきひしきけなりつるりやうそう／しらせんさすをはあはつのこく
ふん寺の御たうにすてをき／奉りてちり／にそなりにける大しゆ
まいりければせんさ／すのたまひけるはちよくかんのものは月日の
ひかりにた／にもあたらぬとこそうけたまはれいはんやけふをかき
りに／都の内をおい出すへしといふいんせんせんしのしなり／たる
うへすこしもやすらふへきにあらず今はをの／／とう／かへり

のほり給ふへしとてはしちかうる」(8ウ) 出での給ひけるはわれ
三たいくわいもんの家を出て四明／ゆうけいのまどに入しより此か
たひろうゑんしうのけう／ほうをかくしてけんみつりやうしうをつ
たへひとへに我山の／こうりうをのみおもへり国家をいのりたてま
つる事も／をろそかならずもんとをはく、む心さしもふか、りき／
りやうしよ山しやう山わう七社さためてせうらんし給ふら／む身に
あやまる事なしつみなくしてをんるのちうくわ／にをこなはれん事
せんせのしゆくしうと思へは世をも人／をも神をも仏をもうらみた
てまつる事なししゆとの是／までとふらひきたり給へるはうしこそ
申つくしかたけれど」(9オ) てかうそめの御衣の袖しほるはかり
に見え給へは大しゆ／もみななみたをそなかしける御こしさしよせ
てとう／くめさるへう候と申ければ我昔こそ三千のくわんしゆ／
たりしか今は流人の身としていかてかちゑふるかき大／とくやむ事
なきしゆかくしやたちにかきさ、けられてはの／ほるへきたとひ婦
りのほるといふ共おなしくあゆみつ、／きてこそこのほらめとてのり
給はずこ、にさいたうのちう／りよかいしやうはうのあしやりゆう
けいとて其たけ七尺／はかりありけるかくろかはをとしのよろひの
大あらめな／るかかねませたるに三まいかふとのを、しめてしら
え」(9ウ) の大なきなたわきにはさみはるかに立たりけるかか／
ふとをはぬいてうしろへかたとなけのけたれば下人／のほうしより
てこれをとる大しゆの中をおしわけ／／せんさすの御まへにまい
りてめさるましく候やらんその／御心にてこそ山門にもきすをつけ

か、るうきめにあはせ／給ひ候へとてさすをはたとにらみ奉りたり
ければあ／まりのおそろしさにいそぎ御こしにぞめされける大衆／
さすをとりえ奉りたる事をよるひこひていやし／きほうしはらにも
あらず大とくしゆかくしやたちかき／さ、け奉りてそのほりけるや
かてさきこしをはゆう」(10オ) けいかくこちはかはれともせ
んちんはかはらすしよは／よはれともゆうけいはよはらすこしのか
いてもなき／なたのえもくたけよとにきりてさしもさかしき東／さ
かへいちをあゆむかことくにてたいかうたうの庭にかき／すへたり
大しゆこしかきすへて又せんきしけるはそもく／我ら流人をとり
とめたてまつらん事いか、あるへきとせ／むきしけ人をとりるにゆ
うけいさきのことくにす、み／いて、申けるは我山は是日本ふさう
のれいちちんこ国／家のたうちやう也されはしゆとのいしゆよさん
にこえ／いやしきほうしはらにいたるまで世もてこれをか」(10
ウ) ろくせすいはんやちえかうきにして一さむのくわしやうたり／
とくきやうおもしうして三千のくはんしゆたりつみなうし／て遠流
のちうくわにをこなはる、事さんしやうらく／ちうのいきとをりこ
うふくをんしやうのあさけりにあ／らすやわれらこの時にいたりて
けんみつあるしをうし／なひ奉りしゆかくのかくりよけいせつにつ
とめをこた／らん事心うしゆうけい今度三たうのちやうほんにしよ
／せられきんこくるさいにもをこなはれかうへをはねられ／奉らん
事こんしやうのめんほくめいとと思ひ出たるへし／とてさうかんよ
りなみたをはらく／となかしければ大衆」(11オ) もともく／と

てさすをはとうたうのみなみたにめう／くわうはうへ入たてまつる
それよりしてそゆうけいをはいか／めほうとは申ける時のわうさい
をはこんけの人もかなれ／給はさりけるにや大たうの一行あしや
りはけんそうくわう／ていの御ちそう也けんそうのきさきやうきひ
に名たち／給ふ事ありこれあとかたなきむしつなりしかとも／その
つみによりてくわらくへそなかされける仏の国へは／三のみち有
ゆうち道りんち道あむけつ道とそ申ける／ゆうち道は御幸みちりん
ちたうはさう人のかよひち中に／もあんけつたうと申は七日七夜ゆ
け共月日の光をみ」(11ウ)すしてゆく道也一行もちうほんの人
にておはしましければ／かのあむけつ道へそなかされけるみやう
／としてひとり／ゆくきやうふにせんとまとひしん／として山
とをした、かん／こくに鳥の一こゑはかりにてこけのぬれきぬほし
あへす／是道むしちのつみをあはれませ給ひて九ようのかたちを／
せんし一行をてらしたまふ時に一行右のゆひをくいきり／左のたも
とに九ようのかたちをそうつされけるわかんりや／うてうにしんこ
んのほんそむたる九ようのまんたらこれ／なりほうわうは山門の大
衆せんさす取と、め奉りた／るよしきこしめしいよ／やすからす
そおほしめしけ」(12オ)る西光か申けるは山門の大しゆみたれ
かはしきそせう仕事／いまにはしめすと申ながらこれ程のらうせき
いまたうけ／たまはりをよはす今度もしゆるく御さた候は、世は／
よにても候ましあひかまへてよく／御いましめあるへし／とわか
身のた、いまほるひむするをもしらて山王大／師のしんりよにも

は、かりたてまつらすかやうに申ていよ／／しんきむをなやまし
たてまつるそうくむしけから／むとすれとも秋の風これをやふりわ
うしやあきらか／ならんとすれともさんしんこれをくらうすともい
へり／さんしんは国をみたりとふは家をやふるともかやうの」(12
ウ)事をや申へき一あん新大納言なりちかのきやう巳下の／きんし
ゆにおほせて山せめらるへしと聞えしかはわれら／わうとにはらま
れなからさのみしようめいをたいかんすへきにも／あらずとて内々
はあんせんにしたかひたてまつるもありけりせ／むさすは妙光房に
おはしけるか大しゆこ、ろありとき、／給てまたいかなるめにかあ
はんすらんとおほしめしけれとも／いまたるさいの御たはなかりけ
りさる程に新大納言なり／ちかのきやうのわたくしのむほんは山門
のさうとうにより／てしはらくをさへられたりそも／ないきした
くはさま／／なりしかともきせいはかりにてはいかにもかなふへ
くも見」(13オ)えさりければむねとたのまれける／

ゆきつなかへりちうの事

つの国けんした、のくらんとゆきつなこの事むやく／なりと思ふ心
そつきにけるつら／／へいけのはんしやう／をみるにたやすくかた
ふけかたし大なこんかたらわる、所の／くんひやういくほとなしよ
しなき事にくみしたり若／此事のもれなはゆきつなさきにうしなは
れなんす他人／のくちよりもれぬさきにこの事へいけへ申てわか身
／のさいなんをのかれはやと思ひければおなしき五月廿九／日の夜
に入て道相国まへのしゆくしよ西八てうへまいりけるゆ」(13ウ)き

つなこそ申へきこと候てまいりて候へと申ければ／何事そそれきけ
とてしゆめのはんくわんもりくに出さ／れたり人つてにてはかな
ふましきよし申聞入道中もん／に出あはれたりこの夜ははるかにふ
けてこそあるらめなに／ことそとの給へはひるは人めのしけう候あ
ひた夜にまき／れてまいりて候そも院中の人／のひやうくをと、
の／へくんひやうをあつめられ候事をはしろしめされて候やらん／
入道いさ山せめらるへしとこそきけとよに事もなけ／にの給へはゆ
きつないとちかうよりていやそのきにては候／はす新大なこん巳下
のきんしゆの人々の御一門をかた」(14才) ふけまいらせんとこ
そあひたくまれ候へ入道大きにおとろき扱／さやうのことをは君も
しろしめされたるかしさいにやをよ／ひ候しんしのへつたうしん大
納言殿のくんひやうをあつ／められ候もいんせんとてこそもよほさ
れ候しか其外し／しの谷にて人／の申たりし事とも西光かと申て
しゆ／むくわんかと申てなどありのま、にもさしすきて申ちら／し
いとま申てまかり出入道もての外なる大をんにて／さふらひともし
ひの、しり給ふ事おそろしゆきつな／なましるなることいひ出して
わか身もせう人いやひか／れんすらんと大野に火をはなしたる心ち
して人も」(14ウ) をはぬにとりかはかましていそきもん前にはし
りい／ては、のすゑにひかへたる馬にうちのりいそきしゆくし／よ
へはせ帰る入道筑後守さたよしをめしやあさたよし／きやう中にむ
ほんのともからのみち／て有なるそ一家の／人／にもふれ申せ
さふらひとめすへしとの給へはうけ／たまはりてはせめくりても

よほしけるに小松殿はかりこそ／なに事にもさはきたまはぬ人にて
さんせられねその外は／右大しやうむねもりをはしめ奉りて三位の
ちうしやう／とうのちうしやうさまのかみ巳下の人／我も／と
はせ／まいるその外さふらひくんひやう我さきにとそはせまいる」
(15才) 夜のうちに西八てうには四五千きにそなりにけるあくれ
は六月／一日またくらかりけるに入道けひいしあへのすけなりをめ
／してやあすけなりほうちう寺とのへまいりてのふなりをよ／ひ出
してそうせんするやうはよなきんしゆのともから／共あまりにてう
をんにほこりくわふんにてあまさへたう／家をほろほさんとけつこ
う仕り候を一々にめしとてたつ／ね承らんするにて候御せんにはし
ろしめさるましく候と／申せとこそ給ひけれすけなり院の御所へ
参り大せんの／たいふたつね出してこのよし申入れはのふなりい
るを／うしなひてこのよしそうし申ければほうわうおほきに」(15
ウ) あきれさせ給ひてあはやこれらか日比はかりし事のはやも／れ
聞えぬるにこそたかもらしけんとおほしめすよりあさ／ましるに
てもこはなに事そとはかりにてふんみやうの／御返事もなかりけれ
はすけなりかへりまいりてこのよし／を申せは申入道されはこそよ
も御へんしはあらしゆきつ／なまことを云けりつけしらせすはあん
おんにあらましやと／てひたのかみかけ家なんのは二郎つねとをせ
のをの太郎／かねやすなどをめしてからむへきもの共けちせらるこ
の事／のもれきこえぬさきにとてさうしきをもて中御門の／新大納
言なりちかの卿のもとへきと立よりたまへ申」(16才) へき事あ

りとこのたまひつるかはされたりければ大納言／なにごとをの給ひあはせらるへきやらんあはれ山せめらる／へきことを院へそうせんとにやもてのほりかに御きとを／りふかければいかにかなふましき物をとてわか身のうへ／とは露もしりたまはずなきよけなるほいたをやかに／きなし給て八よのくるまのあさやかなるにのり給ふさふら／ひさうしきうしかひにいたるまできよけにてそ出られけるそも是をさいことはのちにこそ思ひあはせけれ西八て／うちかうなるま、にそのへんを見給へは四五ちやう十ち／やうにくんひやうともところもなくみち／てた、今」(16ウ) 事出きたるさま也あなおひた、しやこは何ことの出き／たるやらんとむねうちさはきて門をさし入てみたま／へはうちにもつはものみち／たり中門のときにきひし／けなるおとこ二人大なこんに立むかひてさうのを／ひきはり奉りてにはへひきおとしたてまつるいまし／めたてまつるへく候やらんと申せは入道あるへからすと／給へはつはものす十人中にとりこめ奉りて一まなる所／にをしこめたてまつる大納言た、夢の心ちしてそ／おもはれける御ともにめしくせられたるしよ大夫さふら／ひともいくらもありけれともをしへたてられて物をたに」(17オ) 申さすさうしきかひにいたるまでうしくるまをすて、／にけちりぬその後百き二百きをしよせ／むほんのとも／から一さしたいにからめとる／

さいくわうほうしちうせらる、事

中にもさいくわうは此事あんへ申さんとてほうちう寺に／とのへま

いる程に道にてへいけのつは物ともに行あふた／りやあ御へん西八てう殿へめしの候そきとまいり給へと／いひければこれも御しよにそうすへき事ありやかてかへり／まいるへしといひければにくい入道のなに事かそうす／へきさないはせそとてやかて馬より取てひきおとし」(17ウ) てからめとる日のはしめよりとういよりきものなれば／とてした、かにいましめてにし八てうのつほのうちひ／きすへたり入道中門に出給ひてしやうかいはほろほさ／むとせしやつはらかなれるすかたのおもしろさよしや／つこ、へひきよせよとてひきよせさせまつむちをもて／心のゆく／うてのたまひけるはやれをのれかやうなる／下らうのはてを君のめしつかはせ給ひてなさるましき／くわんしよくをたひふしともにくわふんのふるまひせし／やつと／うしにあはせてあやまらぬてんたいさすをるさい／に申をこなひ天下の大事引出しあまさへたう家を」(18オ) かたふけんとするむほんにこむけんよりきのものとは／みなしりたりすみやかに申せにくいやつとたまへはさい／くわうちともいもへんせするなをりいてさらはの／ち事はなさんとて申けるはいやさもさうすとよ君／にめしつかはる、身にて候へはしんしのへつたうにて／おはします新大納言殿あんせんとてもよほされ候し／かはくみせずとは申ましそれはとうしたりた、し耳／にと、まる事をおほせ候ものかな他人の前にてはしら／す西光などか前にてさやうにくわふんのことなどはえこそつかはるましけれ見さらんことか御へんはこき」(18ウ) やうふきやうとの、子にておはせしかとも十四五

まてはしゆつしもせず中のみかとのかせいのきやうのしゆくし
／よへつねはたちいり給ひしかはきやうわらへはたかへいたとこ
そわらひしか御へんのち、た、もりの朝臣はかりこといみしうし
てさんぬる保元(ママ)の比かとよかいそく／のちやうほん三十よ人からめ
しんせらる、けんしやうに御へ／む十八九にて四ほんして四位のひ
やうゑのすけといはれしをこそ時の人くわふんのつかさと申あひ
たりしか／日比はてんしやうのましはりをたにきはれ給ひし人
のしその太政大臣をきはめ君をも君共せず臣をも」(19才)し
ん共せぬをこそくわふんとはいへさふらひ程のもの、しゆりやう
けひいしになる事せんれいはうれいなきにあらず／されはなにごと
かくわふんなるへき入道とのとは、かると／ころなく申ければ入道
あまりにはらをすへかねてしやつ／こ、にひきふせよとてひきふせ
させてものはきなからし／やつらをむす／とふみてしやつ物ない
はせそよ／ましめよとのたまへはうけたまはりて松うらの太郎
しけと／しちうにく、りて出にけりあしてをはさみかうきにかけ
さん／にいためとふ西光もとよりあらかはさりけるうへ／きうも
んはきひしかりけりことのしさい残りなうこそ」(19ウ)申けれ
はくしやう四五まいにきせられたり其後五てうにし／のしゆしやか
にてしたをぬきくちをさきその後かうへをはね／られたりしなん近
藤はんくわんもろつねきんこくせられたり／しをもとりいたししや
ていさ衛門のせうもろひらとにも／かうへをはねられたりうとう
三人きられぬちやくしか、の／かみもろたかおはりのゐとたへなか

されたりしをもうてを／くたしてほろほさるもろたかさ／くに
た、かひたちに／ひかけてしかいしてこそうせにけれすへていふか
ひなき／ものかひて、あやまらぬてんたいさするさいに申をこ／な
ひ山王大師のしんはちみやうはちをたち所にえてほ」(20才)ろ
ひぬるこそおそろしけれ大納言は一まなるところにを／しこめられ
ていかなるへしとも思ひたまはず日比のあら／まし事共のはやもれ
聞えぬるにこそたれもらしけん／いかさまにもほくめんの下らう共
のなかにこそあるらん／としつ心なくそ思はれけるや、ありて大納
言のおはしけるうしろの程にあしをとたかくて人のきたるを／と
しければた、今うしなはるへきやらんとおもはれけるに入道それ
んの衣のみしかやかなるにしろき大くちふ／みく、みひしりつかの
かたなをしくつろけてさすま、に／大なこんのおはしけるうしろの
しやうしをあら、かにさと」(20ウ)あけもての外にいかれるけ
しきにて大納言にたちむかひ／やあ御へんはわすれてかさむぬるへ
いちにのふよりのきやう／にとうしんによりてすてにちうせられ給
ふへかりしを大夫／かやう／に申てくひをつき給しにあらずやそ
れに何事／のいこんかのこりてこの一門をほろほすへきよしけつこ
う／はし給ひけるそされともよりの共からともをみなめし／い
ましめぬ御へんをかやうにむかへ申たればへちの事あらし／とこ
そおほゆれ日比のむほんけつこうのしたいた、今承／らんとしたま
へは大なこんなましゐにいかさまにも人のさん／けんにてそ候らん
よく／きこしめされ候へしといはれるを」(21才)いはせもは

てすきたよしをめしやあそれ西光かはくしやう／もちてまいれとの
給へは承りて紙四五まいにかきたる物／をもちてまいる入道ひきひ
ろけたからかにさら／とよみき／かせこのうへはいつこを何とあ
らかひたまふへきあらにくや／それよく見給へとて大なこんのかほ
にさとなけかけしやう／しをはたとたて、そかへりられける入道猶
はらをすへかね／てなんはの二郎せのをの太郎をめされければつね
とをか／ねやすまいりたりあのおとこおめかせよとのたまへはかし
／こまりて申けるは小松殿のかへりきこしめされんところ／もい
か、候へかるらんと申せはしやうかいよりもたいふはおそろ「(21
ウ)しきよなうよく／さき、つさらは其むねをこそ心へ／めとの
たまひければこれらかなはしと思ひければ大なこんの／さうのをを
とりてにはへひきおとし奉る御み、にくちを／あて御こゑの出へう
候はとてあけてはとうとをき／二三／とか程あけおろしければ御
こゑ二こゑ三こゑそいたされけ／るなをいましめたてまつるへく候
やらんと申せは入道すこ／しはらゐて今はさまてはなく共との給へ
は又もとのことく／をしこめたてまつるそのていめいとにてさい人
ともかあるひは／こののほかりにかけられあるひはしやうはりの鏡
にひきむけ／られしよさいのこうにまかせてかせきをくわへられけ
いはつ「(22オ)をおこなはるらんもこれにはすきしとそみえし
せうは／むとらはれ／てかんはうにらきすされけりてうそりく／
をうけしうきつみせらるたとへはかせのせうかはんくわいかん／し
んはうゑつこれみなかうそのちうしんたりしかとも小／人のさんけ

んによりてくわはいのはちをかくともかやうの事／をや申へき大な
こん我身のかくなりゆくにつけてもち／やくしたんはのせうしやう
めしやこめられぬらん残りと、／まるあとのありさまこそはある
らめとおもひつ、け／給ふにさしものこくねつにしやうそくをたに
もくつろけ／給はねはあせもなみたまあらそひてこそみえたりけ
れ「(22ウ) おと、はいまたおはせぬやらんさりともおもひすて
たまは／しと思はれけれ共たれしてのたまふへしともおほへね／は
くれをもまたて露のみのきえぬへくこそ思はれけれ／

小松殿にし八てうにまいらるゝ事

こまつとののははるかに日たけて後ゑふ四五人さふらひ二三人召／く
して我身はゑほうしなをしてのとやかけてにまい／り給へり入道
あしけにみられければちくこのかみさたよ／し御前をついたちお
と、にまいりむかひてなどこれ／ほと御大事にくんひやう共をは
めしくせられ候はぬ／やらんと申ければてんかの御大事こそ大事と
は申せ「(23オ)これはわたくし事也何事か有へきとて入道へは
かつちう／をたいしたるくんひやう共もみなそゝろいてそ候ける／
おと、中門におはしてまつ大納言のおはするところ／はいつくやら
んとかしここ、のしやうしのを引あげ／／みたまへはくもてゆい
たる所ありこれやそなるらんとて／ひきあけてみたまへは大納言涙
にむせひてうつふして／そおはしけるいかにやとのたまへはめをも
ちあげおと／とを見奉りてうれしけに思はれたるけしきちこく／に
てこくあくしんちうのさい人共か地さうほさつにあひた／てまつる

うれしきも是にはすきしとそみえし大納」(23ウ)言はなに事に
て候やらん身に一せつあやまりたる事も／そんなつかまつらす候を
けさよりかやうにめしをかれまいら／せて今夜うしなはるへしと承
り候扱わたらせ給ふを／こそたかき山ふかき海ともたのみ入まいら
せて候さんぬるへ／いしにいのちをたすけられまいらせてその御お
んもいまたほ／うしつくしかたく候あはれ今度の命をたすけさせお
は／しまし候へかしかひなきいのちたに候は、やかてもと／とりき
りかうやかかはのふもとにもとちこもり一すちに／こしやうほたい
のいのりをも仕り候はんと申されければ／いかさまにも人のさんけ
んにてそ候らん今度の御いのち」(24オ)をも申てたすけまいら
せ候は、やとこそそんし候へ／とてた、ければ大なこん世にたの
もしけにこそ思／はれければおと、のおはしつる程はいさ、かたのも
しかり／つるにかへり給ひて後はいと、心ほそくそ思はれける／た
いふち、の御まへにまいらせ給ひてさて大なこんをは／うしなはる
へきにてや候やらんしさいにやをよふこのく／れをまつ也とそなた
まひけるおと、申されけるはあの／大納言うしなはれん事いか、候
へかるらむそのゆへに／はかのそふ六てうのしゆりの大夫けんきの
きやうしら川の／院にめしつかはれてより此かた国のでうしんとし
てくら」(24ウ)あ正二位くわん大納言になりあかられしもきみ
のふさ／うの御いとおしみなる物をさうなくうしなはれんこ／とい
か、候へかるらん又かくはきこしめされて候ともし／この事のひ
か事ならはいよ／ふひんのいたりなるへ／しきたの、天神はしへ

いのおと、のさんそうによりて／うき名をさいかいのなみになかし
にしのみやの大臣／はた、のしんほちかさんそうによりてその身を
せんや／うの雲にかくしたまふこれみなゑんきのせいしゆあむ／わ
の御門の御ひか事とこそ承れ上古もてかくのこと／しいはんや末代
をやけんわうなを御あやまりありいは」(25オ)むやほん人にお
ゐてをやよく／御あんも候へしこうくわ／いさきにた、すところ
うけたまはれけいのうたかはしき／をはかるくせよこうのうたかは
しきをはもんせよと／こそ見えて候へおほせあはせらる、大納言を
めしを／かれぬるうへはいそきうしなはれすとでもなにのをそれ
か候へきかやうに申を御せういむなからむにをいてはしけ／もり世
にありてもなにか仕り候へきいつまでか世にも／候へきなればた、
しけもりかくひをめさるへしかやう／に候へはしけもりかのいもう
とにあひくしたりこれもり／又むこなりかた／したしければ申と
やおほしめされ」(25ウ)候らんさらにそのきにては候はずた、
世のため家のため／をそむしてかくは申也むかしさかの天皇の御時
ひやうゑ／のかみふちはらのなかなりかちうせられてより此かた
しぬるもの、かへる事なしこれふひんのいたりなり／とて保元まで
廿五代たえてひさしきしさいをこしんせ／い入道かしつけんの時
あひあたて申をこなひうちのさふ／のしかいをほりをこしてしつけ
んせられし事などあま／りなるまつりこと、こそみえしかされはふ
るき人の／ことはにもあまりにしさいをおこなふときはかいたいに
／むほんのともからたえすと申あはれしにあはせて中二」(26オ)

ねん有て平治に事いてきてせい入道わか身も都の外／にうつまれたりしかいく程なくてほりをこされかうへをは／ね大ちをわたしこくもんにかけられし事などはむくぬ／かとおほておそろしう候しかこれはさせるてうてきにて／も候はず大政大臣をきはめてさせ給ふ御ゑいくわ残る／所は候はねともし、そんな／まてもはんしやうこそあらま／ほしけれふそのせむあくはしそんなにつたへしやくせんの家／によけいありしやくあくの門にてよわうと、まるとこ／そみえて候へなとやう／に申されければ大納言こよひ／うしなわれん事をは思ひと、まりたまひけりおと、」(26ウ) 中門に出たまひてあひかまへて仰せなれはとて大納言さ／うなくうしなはん事有へからす入道との御ふくりうのま、／に物さはかしき事あらはさためて御こうくわいあるへ／しひか事すな又けさつねとをかねやすかけもりかかへり／きかんところをもは、からす大なこんになさけなくあた／りたるこそきくわいなれかたぬなかのものはよろつか、るそ／とよとのたまへは是らをそれ入て候けるおと、はかやう／にけちしつ、こまつとのへそかへりられけるさるほとに／大なこんの御ともにありつるものとも中の御門からすま／ろの御しゆくしよにかへりまいりて申けるはかみは八てう殿に」(27オ) めしこめられさせ給ひて今夜すてにうしなはれさせ給ふ／へしとこそ承りつれ又少しやう殿をはしめ参らせて／きんたちもみなめされさせたまふへしと承り候つる／と申たりければきたのかたをはしめ奉りて男女を／めきさけふ事なめならず女房たちの申あはれけるは／いまはふしと

もむかひさふらふらんいつかたへもしのはせお／はし候へかしと申されければきたのかた今はこれに／なりぬるうへはた、一所にてともかうもなんらん事こそ／ほんいなれさるにてもけさをさいことしらすりつるこ／とよとてふししけみてそなかれけるすてに六はらより」(27ウ) くわん人ともむかふと聞えしかはされはとてかくては／ちかましうたて君をみんよりはたちしのひこそ／せめとてくるまにのり給ふ十さいのわかきみ八さひの／姫君一車にのせ奉りて出たまふ中のみかたとを西へ大宮を／のほりにきた山のほとりうんりんぬんのあたりにあさま／しけなるそうはうにおろしをき奉りて御をくり／のものとも身のすてかたければいとま申てみなちり／／にこそなりにけれいまはきたのかた君たちはかりのこり／と、まりてくれ／／ゆくかけをみ給ふに大納言こよひ／うしなはれさせたまふへきなれは露の御命もいまいく」(28オ) ほとそやとおもひやるにもきえぬへしめしつかはれけ／るつほねの女はうたちめのわらは物をたにもうちかつ／かすかちはたしにていつち共なくはしりいてもんをた／にもをしたてす馬とも馬やにくらもならひたてたれ／とも草かふものもなし夜あくれば馬くるまもんせんに／ひまなくうちにはひんかくさにつらなりあそひたはふれま／ひをとり世をも世ともせさりきちかきあたりの人は物をた／かうも申さす門前をすくるものもおちおそれてこそ／きのふまでもありつるによのまにかはるありさましやう／しやひつすいのことよりはめのまへにこそあらはれられた」(28ウ) のしみつきてかなしみきたるとか、れた

るかうしやうこ／うのふてのあといまこそ思ひしられけれ／

たんはの少将とうむほんの輩るさいの事

丹波のせうしやうなりつねはきのふより院の御所にうへふ／しして
候はれけるかいまたまかりも出られさりけるに人ま／いりてこのよ
し申ければ少将などさらはこれ程の事さ／いしやうのもとよりいけ
られぬやらんとの給ひもあへすし／うとのさいしやうのもとよりつ
かひありにし八条よりく／し奉りてきときたれと候也とう／出た
まへとの給へ／は少将御せんのかんしゆの女はうをよひ出し奉りて
か、」(29才)る事こそ候へゆふへよりせけんもなにとなく物さ
はかし／く候つればはいの山の大しゆくたるらんなどよそに存て／
候へははやなりつねかみのうへにて候けり八さいより御めにか／か
り十二よりこの御所にしこう仕りててうせき御まへに／ちかつき参
らせてなのめならず御いとおしみをかうふり／候つるにいかなるめ
にかあひ候はんすらん大なこんうしなは／れ候は、なりつねもおな
しつみにこそをこなはれ候はん／すれされは今一度御まへにまいり
君をも見まいらせた／く存候へともか、る身とまかりなり候ぬるう
へはよに／おそれてまかり出と申されたりければ女房たち御前に」
(29ウ)まいり此よし申されければ法皇されはこそけさせんもん
／かもとより申するにはや御心えありさるにてもいま／一たひこれ
へまいれと仰せ有ければ少将御前へそ参られ／けるほうわうもおほ
せいたさる、むねもなし少将も／又申いたす事もなしや、ありて少
将いとま申ていて／られはほうわうせうしやうのうしろをはる

／と御／らんしをくらせたまひてまつたいこそ心うけれども御／
覽せられぬ事もやらんすらんとおほせありける／そかたしけなき
せうしやうを日比みなれ給ひし御しよ／中の人／せうしやうのな
こりをおしむとてたもとに」(30才)すかり袖をひかへなみたに
むせひたまひけりせうしやうも／いまをかきりとおもはれければ
ぞ、ろに袖をそぬらさ／れけるしうとのさいしやうのもとにおはし
てまつたのかた／のけいきを見給ふにせんかたなしちかうさんし
たまふ／へき人にて月ころもなにとなくなやましけにし給ひける／
かまたこの事さへうちそへてふししつみてそおはしけるせう／しや
うはけさゐんの御所ほうちう寺とのをせうしける／よりしてなか
る、なみたつきもせずあはれさらは／身みともなりたらんをみてい
かにもならは心やすかり／なんとそいたまひける少将のめのとに六
てうと申女」(30ウ)ほうありせうしやうのたもとにすかりてき
みちの中にわた／らせ給しをいたきそたて参らせてよりこのかたへ
んし／もはなれ奉らすいつか又をとなくならせたまはん／わかみ
のとしのよるをもしらす申あかし申くらし二十／一までそたてまい
らせてゐんへもうちへも御参りありて／をそく御いてあるときはお
ほつかなくこひしくこそ／思ひまいらせつるにいかなる御めにかあ
はせたまはんすらん／となきければいたうなくけきそさいしやうの
さてお／はしませはざりとも命はかりはこひうけられむすらん／と
のたまへとも六てうはた、もたへこかれたふれふしなく」(31才)
よりほかの事そなきさる程にし八てうよりつかひし／きなみ有け

れはさらは出てこそともかうもならめとて／さいしやうくるまにのり給ふ少将もとうしやしてこそ／出られけさいしやうのうちの人によなき人をいたすか／ことくをめきさけふ事なのめならず保元平治よ／りこのかたへいけの人／たのしみさかへてはありしかと／もうれへなけきなりしにこのさいしやうはかりこそよ／しなきむこゆへにかゝるなけきはせられけさいしやう西／八てうにおはしてあんなぬを申されければ少将うちへ／はかなふましとのたまへはそのへんなるさふらひのしゆく」(31ウ) しょにおろし奉りてさいしやうはかり入給ふ少将はた／のみ奉りつるさいしやうにもはなれたまひぬいと、せん／かたなく所思はれけるいつしかさふらひともうちかこみて／しゆこし奉るさいしやうにし八てうの中門におはして入／道出あはるゝかといめんをまたれけれどもみにもいてら／れさりければたいふのはんくわんすゑさたをもて申されけ／るはのりもりよしなきものゝえんにむすほゝれて／今さらくやくしく存候へともちからをよひ候はすあひくせさ／せて候物からちかうさんすへきとやらん承り候かこのほと／もなにとやらんなやみ候つるか又この事さへうちそへて」(32オ) みゝともならずしていのちもたえぬへくみえ候さも／しかるへく候は、少将をはしはらくのりもりにあつ／けさせおはしまし候へかしなしかはひか事せさせ候へ／きと申されければすゑさた参りこのよしを申せは／あはれこのさいしやうのものにも心えぬことを申さるゝるものかなとてしはしは返事もしたまはずやゝ／ありて大納言たうけをほろほさむとけつこう

仕るさ／れとも入道うんつきさるにによりてこの事はやく／あらはれぬもしこのむほんをとけましかは御へんとて／もあんをんにやはおはすへきしたしうもおはせよう」(32ウ) とふもおはせよこそなため申ましけれむこも／身にもまさる事やあるとそのたまひけるさい／しやうかさねて申されけるは保元平治よりこのかた大／小事御いのちにかはりまいらせてあらし風をもまつふせき／参らせんとこそ仕りしかこの後ものりもりこそ年／おひて候とも子とも一兩人候へはなとか一はうの御かために／なりまいらせて候へき少将をしはらくあつけさせおはし／ますか猶御ゆるされもなきはよくのりもりをも二心／あるものにこそ思召れ候これほとにうしろめた／きもの思はれまいらせて世に有てもなにかし候へき」(33オ) さらすは出家のいとまを給てかた山里にもとちこもり／ひとへに後世ほたいのいとなみをもつかまつり候はんよしなき／うきよのましはりなり世にあればこそそのそみもあれの／そみかなはねはこそうらみもあれしかしよをいとひまこと／の道に入なんにはとそつふやかれけるすゑさた又事の／よしを申さいしやうとはおほしめしきりたけに候よく／御はからひ候へかしと申ければ入道ことの外におとろきた／まひてさやうにさいしやうさいしやうの出家入道などまて／申さるなるこそけしからねさらは少将をはしはらく御宿／所にもをかれ候へとしふ／にこそたまひけれさいしやう」(33ウ) あはれわか子にむすほゝれさらんにはなににこれ程心の／をくたくへきたゝ人のみに女子ほとよしなかりける物あら／しとてなみた

を、さへていられけり少将まちうけ／奉りてなのめならずよろこひたまひてさていかにと申／されければされはこそ入道なのめならすいかてのりもり／にはつゐにたいめんもしたまはずしきりにかなふまし／きよしのたまひつれともしゆつけどんせいせんなどまで／申たれはにやしはらくしゆくしよにもき奉れとのた／まひつれともゆくすゑたのもしかるへしともおほはすと／のたまふ少将さては御せんをもてしはらくの命をたす」(34才) からんするにてこそ候なれさて大納言との、事をはなに／とかきこしめし候つるいさとよそこの事をこそいかにも／して申さんとはしつれ大なこん殿の御事までは思ひもよ／らすとの給へは少将大なこんうしなはれ候は、なりつね／もおなしつみにこそをこなはれ候はんすれた、一みちに／申させ給てと申されければさいしやうよに心くるしけにて／まことやそれも小松とののやう／くに申さるなるかしはら／くの御いのちのはひさせたまふとこそうけたまはりつれと／の給へは少将てをあはせてよろこはれるまことにのなら／さらん人はわかみのおへをさしをきてたれかはかやうによる」(34ウ) こふへきまことの契りは親子の中にそありけるされは子／にすきたるたからなしとやかて思ひそかへされけるせう／しやうは又けさのやうにとうしやしてこそかへられけれ人さ／さきに参りてせうしやうとのこそへちの御事なくいらせ／おはし候へと申ければきたのかたをはしめ奉りて上下／男女皆くるまよせまてはしり出てし、たる人のいきて／帰りたることくによるこひなきをせせられける／

ち、けうくんの事

入道新大納言なりちかのきやう以下きんしゆの人々その外ほ／くめののともからともにいたるまていましめをきてもな」(35才) をこ、ろゆかすや思はれけんあかちのにしきのひた、れにくろいと／をとしのはらまきのむないたせめそのかみいまたあきのかみ／たりし時いつくしまの明神よりれいむをかうふりてたまは／られたりけるしらえのなきなたつねのまくらをはな／たすたてられたりけるをわきにはさみつ、ちうもんにそい／てられけるそのけしきゆ、しくそみえし入道さたよしと／めされければちくこのかみもくらんちのひた、れにひをと／しよろひきて御前にかしこまる入道さたよしとか、思／ふさんぬる保元におちへいむまのすけた、まさをさ／きとして一門なかはにすきしん院の御かたへまいりた」(35ウ) りき中にも一宮の御ことはこきやうふきやう殿のやうく／むにてわたせたまひしあひたかた／見はなち参ら／せかたくは思ひしかともこゐんの御ゆいかにまかせてこの御／かたにまいりさきをかけたりきこれ一のほうこうにあらす／や又平治元年十二月にのふよりよしともかむほんの時／ゐんうちをしこめたてまつりて天下くらやみになりた／りしを入道命をすてすてはいかにもかなふまじかり／し間御かたにてそくとをうちたいらけのふよりよしともを／ちうりくしつねむねこれかた等をめしめしに／たるまて君の御ためにいのちをすてんとせし事と、にをよ」(36才) へりされはたとひ人いかに申共いかてかこの一もんをは思召／すてられへきた

う家ついたうの御けつこそこうこそしかる／へからね猶もさんそう
するものあらはついたうのゐんせんを／くたされぬとおほゆるそて
うてきとなりなんのちいか／にくゆともゑきあるまししはらく世を
しつめん程法皇／をとほとのにをしこめ奉るかしからすは御幸をこ
れへな／りともなしまいらせはやと思ふはいかにさあらんにとて／
はほくめんのとよからのなかにやをも一いつとおほゆるそ／さふら
ひともにそのよういせよとふるへしおほかた入道ぬ／むちうのほう
こうにをいては思ひきりたり馬にくらを」(36ウ)かせよきせな
かとりいたせとそひしめかれけるおほかたそ／のけしきゆ、しくそ
みえしほうわうをは鳥羽とのへと／ひろうしてない／はさいこく
の方へうつしてまつる^{＊た}へしと／そきせられけるしゆめの判官もりく
に小松とのへ参り／て申けるはすてに世はかうとこそみえて候へそ
のゆへはかみに／御きせなかをめされ候うへはつはものともうつた
てすてに／ほうちうしとのへよせ候なり法皇をは鳥羽殿へとひろう
／してない／はちんせいのかたへなかしだてまつるへ／しと申と
こそきせられ候なりと申せはおと、よも／さる事あらしとは思はれ
けれともけさのせんもんのふる」(37オ)まひさる物くるひので
なりつれはもしさやうの事も／やおはすらんとていそき御車にめし
西八条におはして門／をさし入て見給へはけにも入道はらまきをき
給ふうへは一も／むのけいしやううんかくおもひ／のひた、れに
色さのよろ／ひきてちうもんらうに二きやうにちやくし給へりそ
の／外諸国のしゆりやうゑふしよしえんにもゐこほれつ、に^(マ)／もひ

しとなみいたりつは物ともはたさほひきそはめ／馬のはるひを
かためかふとのを、しめてた、いま打／た、んするけしきなるにお
と、は又けさ^(マ)のやうにゑほ／しなをしに大もんのさしぬきのそはと
てさやめき入」(37ウ)給ふことの外にそみえられける入道あは
れ又れいのたいふか／世をへうするやうにふるまふ物かなおほきに
いさめはやと／思はれければなきなたひさのしたにをきあけたか
に／なりておはしけるかさすかこなからもうちには五かいを／たも
ちてしひをさきとしほかには五しやうをみたらすれ／いきをた、し
くしたまふ人也あのですかたにははらまきを／ちやくしてむかはれん事
さすかはつかしくおもはゆくや／思はれけんしやうしをすこしひき
たて、そけん^(マ)の比衣と／てはらまきのうへにあはてきにきられる
かむないたのかな／物のすこしはつれてみえけるをかくさんとしき
りにこ」(38オ)るものむねをひきちかへ／せせられけるおと、
はおとと／むねもりのきやうのさしやうにちやくし給へり入道しや
う／こくもの給ひ出さる、むねもなしおと、も又申いたさ／せたま
ふ事もなしや、有て入道の給ひけるはなりちか／のきやうかむほん
は事のかすにもあらざりけり一かうほうわう／の御けつこうにてあ
るなるそそも／入道かくわたいは／かいふんにくわんとをす、み
たるはかりにてこそあるなれそ／れは弓矢とるならひせんれいもな
きにあらすたむら／まろはきやうふきやうさかのうへのかりたまろ
かこなりし／か共とういをたいらけしけんしやうに大納言にてさこ
んの」(38ウ)大将をけんしきせたい上こにもつわつかにとう

いへんとを／しつめてせんこうかくのこしいはんや入道わうゐ
をう／は、れ給はんとせし二かとのくんこうたにことなりしかの／
みならずこうしんちやく／の身としててうていと、／のはちをき
よめきそれになりちかのきやうと云むよ／うのいたつらものさいく
わうといふけせんのおたうしんか申／事につかせおはしまして当家
ついたうの御けつこうこそ／むねんなれ猶もさんそうするものあら
はかさねてゐむせ／むくたされん事うたかひなしてうてきとなりな
ん後／はいかにくゆともせんあらしさらはしはらく世をしつめんほ
と」(39才) ほうわうをととはとの、きたとのへ入参らするかしか
らすは御／かうをこれへなりともなし参らせはやと思ふはいか、あ
る／へきとの給へはおと、き、もあへ給はすさめ／と／そなけれ
ける入道いかに／とあきれ給へはおと、涙を／おさへて申されけ
るはこのおほせを承るに御うんは／はやすゑになりぬとおほえてふ
かくのなみたのさき／たち候也かならず人のうんめいつきむとては
か、るあく／きやうをは思ひたつならひにて候也さすか我てうは／
てんせう太神の御しそむ国のあるしとしてあまつこや／ねの御こと
の御へうゑいてうのまつりことをつかさとり」(39ウ) 給ひしよ
りこのかた太政大臣のくわんにいたりたまふ／ほとの人のかつちう
をよるひまします事これいきを／そむくにあらすやなかんつくに
出家の御身なりけたつと／うさうのほうえをぬきすて、たちにまち
にさうせん／をたいします事うちにははかいむさんのつみをま
／ねかせ給ふのみならず外にはまたしんきれいちしん／のほうにも

すてにそんむきぬらんとこそみえさせおは／しまし候へかた／を
それ有申事にて候へ共しはらく／御心をしつめてしけもりか申しや
うをつふさにきこ／しめさるへくや候らんかつはさいこの申しやう
なり」(40才) とは申せともしんちくわんきやうのものにはとか
れて候／かてんちのおんこくわうのおんふものおんししやうのお
むこれなりを^(ママ)しるをもてしんりんとすしらさるを／もてきちくとす
その中にもつともおもきはてう／をん也ふてんの下わうとにあらす
といふことなしさ／れはゑいせんの水に耳をあらひしゆやうさむに
わらひを／おりしけんしんもちよくめいのかれかたきれいきをは
存すところ承れせんそにもいまたきかさりし太政大／臣をきはめさ
せたまひいはゆるしけもりなとかむ／さいくあんの身をもてれんふ
くわいものくらるに」(40ウ) いたるしかのみならずこくくむ
申半は一家のしより／やうたりてんおんこと／く一門のしんした
りこれき／たいのてうおんにあらずや今はくたいの御をむをわす
れてみたりかはしく君をなみし参らせ給はん事／しんりよの程もは
かりかたしそれ我てうはしんこく也／しんはひれいをうけさせたま
はすてうてきとなり／ぬるものはとをくわ三年ちかくは百日をすく
さすと／こそ承れ君の思召たけ^(ママ)所たうりなりさなきにあら／すこの
一門は代さのてうてきををたいらけ四かいのけき／らうをしつむる事
ふさうのちうとは申なからそのし」(41才) やうにほこることか
へてはうしやくふしんなり共申つ／へし家のめいをもてはきみのめ
いをしせされわうしつ／のめいをしてはち、のめいをしせよこそ

みえて候へお／ほせあはせらるゝ所の大納言めしをかれそれ已下のよ／たうのともからにしようのさいくわをこなはれなん／うへは今ほしりそいてことのよしをもちんし申させ給／ひきみの御ためにははいよ／／ほうこうのちうきんをいたし／たみのためにはます／／むいくのあいれんをほとこさせお／はしまさはしんめいのかこにあつかりふつたのみやう／りよにもそむくへからすしんめいふつたのかんおうあらは」(41ウ) きみもなとかは思召なをさせ給ふ事もわたらせ給は／さるへきされはしやうとくたいしの十七かてうのけんは／うにも皆人心まぢ／／なり心のをの／／しゆありかれをせ／しわれをひすわれを(マ)おしかれをひすせひのことはり／たれかよくさたむへきあひともにけんくなりたまき／のはしなきかことしこ、をもてかの人がいと云とも／かへてわかしつをおさめよきみにつき奉るはちうしん／のはうなりたうりとひとをくらへんにいかてかたうり／につかさるへきあひともにけんく是はきみの御ことはり／にて候へはしけもりは一人なり共院の御しよに参りてきみ」(42オ)をしゆこし参らせはやとこそ存候へ其ゆへはしけもり／しよしやくのはしめよりいま大しんのくらるにいたるまで／一としてはんくはの玉にもこえそのふかき色をろむすれ／は一しうさいしうのくれなるにもすきたるらんしけもり／か身にかはらん命にかはらんとちきりて候さふらひと／二三百人はらん(マ)かれらをめしくしてほうちう寺とのに／参りもん／／をかためてふせき参らせ候はんにはゆ、し／き御大事にてこそ候はんすれ保元の昔さまのかみよし

／ともか父ためよしほうしかかうへをはねし事はちよく／ちやうのかたしけなきとは申なからむたうの心たり口」(42ウ) おしき事とこそみしにけふはしけもりか身のうへ／になりぬとおほえ候そやかなしきかなやきみの御た／めにほうこうのちうきんをいたさんとすれはめいろ八まん／のいた、きよりもなをたかきち、のおんたちまちに／わすれなんとすいたましきかなやふかうのつみをのかれん／とすれはきみの御ためにふちうのきやくしんとなりぬ／へししんたいこれきはまれりせひいかにわきまへかたし／しよせんきみをもしゆこしまいらすまし又ぬんさむの／御ともをも仕るへからすた、申うくるとはしけもりかかう／へをめさるへしらうしのことこそ思ひいたされ候へこう」(43オ) めいかなひとけて身をしりうけ(マ)すくらゐをさらされはか／いにあふともありかのせうかほたいこうかたへにこえたりし／によりてくわん大しやうこくにあかりけんをたいしくつをは／きながら天上へのほる事をゆるされたりしかともゑいり／よにそむく事ありしかはかうこれをいましておもく／つみせられきかやうの事を思ふにゑいくわといひふつきと云／てうをんといひくわんしよくといひかた／／きはめさせ給ひ／ぬるうへは今ほ御うんのつきさせ給はん事もかたかるへし／ともおほえすふつきの家にはろくゐてう／／せり／なをし二たひみなる木はそのねうけてか、るうきことにあ／ひ候しけもりかくわほうの程こそつたなく候へいつま／てかなからへてかくみたれん世をも見候へきた、

さふらひ／一人に仰てしけもりを御つほのうちめしいたしかう／
へをはねさせおはしまさん事はいとやすき御事／にてこそ候はんす
れこれき、給へ人／とてなをしの袖／しほる斗にみえられければ
入道しやうこくをはしめ／奉りて一門のけいしやううんかくみな袖
をそぬらされける／入道たのみきりたるたいふはかくのたまふよろ
つち／からなけてそおはしけるいや／それまでの事は」(44
オ) おもひもよらすあくたうともの申事にきみのつかせお／はしま
して御ひか事などもやあらんすらんと思ふ斗／にてこそあれとのた
まへはたとひいかなる御ひか事／候とも君を／もはなにとかし参らさ
せ給ひ候へきとて／ついたてそあゆみいてられける中門に出たまひ
てさふらひ／ともにむかふてのたまひけるはた、今御せんにて申つ
る／事ともなんちらうけたまはらすやんさんの御ともに／をいて
は重盛かかうへのめされんをみて申へしとて小／松とのへそかへり
られけるこれともからかはといふよろひ／こからすと云たちをしの
ひつ、御車に入られけるとそ」(44ウ) うけたまはるよういの程
こそおそろしけれおと、小松殿／にかへり給ひてしゆめの判官もり
くにももてもよ／ほされけるはしけもりをしけもりと思はんすると
／もからはいそき物のくしてはせ参るへしとてふれ／られたりけれ
は日比はおほろけにてもさはきたま／はぬ人のかやうにおほせのあ
るはへちのしさいあるらん／いさや参らんとてあるひは淀はつかし
宇治をかの屋たい／こをくるすひのくわんしゆ寺大原しつはらせれ
うのさと／むめつかつらにあふれたるさふらひともあるひはよろ

ひ／きてかふときぬもありやをいて弓取ぬもあり我さきに」(45
オ) とこまつとのへそはせたりける西八条にすき有つる／くんひ
やうとも小松とのにこといってきたりと聞てけ／れは入道とのに此よ
しかくとも申さすみな／さ、めき／つれて小松とのへそまいりけ
るにし八条にはちくこのかみ／さたよしか外には弓やにたつさはり
ぬへき人一人も／なし女房共おひたるあまふてとりなとそ候ける入
道／さたよしを召てなにとてたいふはこれらをはかやうによ／ひと
るやらん是にていひつるやうに入道かもとへもしうて／なともや
むけんすらんなどの給へはいかてかざる御事／候へきあまさへ御前
にて申させ給ひつる御事ともをも」(45ウ) 御こうくわいそ候ら
んと申せはいや／たいふとなかたかひ／てはゆ、しき大事そとて
ほうわうをとほのとのへ入参／らせん事をも思ひと、まり大納言う
しなはれん事をも／うちわすれてはらまきぬきをきそけんの衣にけ
さ／打かけなかつ、つまくりて心もこらぬねんしゆしてこ／そお
はしけれど、物くるひのくるひさめたるけしき也／こまつとのには
しゆめの判官もりくに承てちやくたうつけ／けり参りあつまるさふ
らひ共一万よきとしるし申ちやくたう／ひけんの後さふらひひとも
たいめんし給ひて日比のけい／やくたかへすしんへうにもまいりし
こんいこも是より」(46オ) めさんにはかくのことくにまいるへ
しこ、にさるためしのあるそとよ昔しうのゆうのわうほうしとて
さいあいのみ／さきをもち給ひたりけり天下第一のひしん也されと
も／このきさきいさ、かわらふ事をし給はすゆうわうほ／いなきこ

とにおほしけるほどに彼国のならひとして天／下にことのいてきたる時ははうくわとて都よりはしめ／てたかき所に火をあけたいことをちてくに／のつは／ものをめさるゝはかりことありある時ひをあけたいことを／うつきさきあなふしきやひもされはあれ程たかうあか／る事かやとてはしめてわらひ給ひけりこのきさき一度〔46ウ〕ゑめはも、のこひありとかやゆうわうこのきさきはは／うくわをあいたまひけりとてつねは其事となく火／をあけ太山トイをうつしよこうきたるにあたなしあたなけれ／はほとなくさるかやうにする事と、にをよふ有と隣／こくよりけうそくをこりてゆうわうの都をかたふけんと／せしときひをあけ太こをうちけれともれいのきさき／のひにならひてまいりちかつくものもなしみやこすなは／ちかたふきてゆうわうたれ給ひけりその後このきさ／きはやかんとなりてかきけすやうにうせられけりかゝるふし／きありけりしけりもりてんかの大事をへつしてきゝいたし〔47オ〕たりつるか又ひか事にきゝなをしたりさらはをの／かへれとてさふらひ共みなかへされけりまことにおとゝてん／かのふしきは聞出されさりけれ共我身にせいのかつや／つかぬをもみかならずちゝとあひてかつせんをせんとに／はあらねともかやうにして入道しやうこくのあくしんをもや／はらけんかためのはかりこととぞ承る君きみたらすと云／ともしんもてしんたらすはあるへからす父ちゝたらすと／いふとも子もて子たらすはあるへからすまことにこのおと／とは君の御ためにはちうありてちゝのためにかかうありこ／れふんせんわうのこと

はにたかはすほうわうも此よしき〔47ウ〕こしめして今にはしめぬ事なれはともたいふか心の／うちこそはつかしけれあたをははやをんをもてほうせら／れぬとぞおほせられけるくわほうこそめてたうて大しんの／大しやうにいたりたまはめようきたいはい人にこえさ／いちさいかく世にすくるへきやと時の人かんせられける国／にいさむるしんあればその国かならずやすし家にいさ／むる子あればその家かならずたゝしともいへりしやうこ／にもまつたいにもありかたかりし大しんなり／

（しん大なこんせいきよの事）

おなしき六月二日なりちかのきやうを西八てうのくきやうの／さいたし奉りて物参らせたりけれとも御てをたにもか〔48オ〕けられす車さしよせてとう／めさるへしと申せは／大納言心ならすのり給ふせんこをみ給へはつはもの共みち／てわかかたさまのものは一人もみえさりけりたゝ身／にそふ物とてはかひなき涙はかり也しゆしやかをみなみ／へゆけはおほうち山もよそにそ見給ひける大なこんを／日比みなれ奉りし京中の上下みな袖をそぬらし／ける鳥羽殿をすきられけるに日比の御所へ御幸のなりし／には一度も御ともにははつれさりし物をとてわかさんさう／すはまののをもよそにみてこそとをられけれとはのみな／おほちにて舟をゝそしといそかすれば大納言こはいつちへ〔48ウ〕とてゆくやらんとてもうしなはるへくは都ちかきこのへ／むにてもあらはやとの給ひけるそいとおしきちかう候ふし／はたうとゝはれければなんはの二郎つ

ねとをと申わ／かかたさまのものやある舟にのらぬさきにいひをくへき／事ありとの給へは承てはせめてたつねさせれと／もなし候はずと申ければ大なこんあなむさむやな世／にありしときはきのふまでもしたかひつきたるも／のとも一二十人もありつらんものをけふはよそにてた／にもとふらふものゝなきよとのたまひけるそことはり／なりる日比天皇寺まうてくまのまうてのありし時は「(49オ)二かはらの三むねにつくりたる舟つきの舟二十そう／こきつ、けてこそありしに今はけしかるともへあれた／るかきすへやかたふねにおほまくひきまはしみもな／らはぬつはもの共にのりくして今日をかきり都の内／を出られける心のうちこそあはれなれよとの入江をこきす／きてこつとのとはしらもときんやかたのなきさ／のゐん入江／をこきすきて其日はつの国大もつのうら／に付給ふ寿保元年の冬のころこのきやういまた中納言／にてみのゝ国をちきやうせられけるにもくたいゑもん／のせうまさともさん門のしよりやうひらのゝしやうの」(49ウ)しん人と事をいたしたりしによりて山門大きに／いきとをりこくしなりちかのきやうるさいにしょ／せられもくたいまさともきんこくせらるへきよしそ／うもんすその時このきやうびちうツのくにへなかさる／へきにて西のきやうまていてられたりけるを君いか、思召／けん申五日ありてめしかへさる大しゆいよく／いきとを／りてなりちかのきやうをさま／にしゆそしけるとそ／うけたまはるされともおなしき二年正月五日ひやうゑの／かみにてけひいしのへつたうになり給ふ又承安二年七

月廿一日にしゆ二位し給ひけりその時は花山院のちう」(50オ)なこんかねまさのきやうあせちの大納言すけかたのきやう／こえられ給ふ是は三条とのさうしんのしやうとそ聞え／けるかねまさの卿はゑいくわの花のいへのけちやく也／すけかたの卿はゑいくわの花のいへのけちふるき人をと／なにてこえられたまふそのいこんなる同しき三年／四月十三日正二位し給ひけりそのときは中の御かとの／中納言むねいへのきやうこえられたまふあんけん元年／十月廿七日けひいしの別当よりこん大納言にあかられ／けりかくのみさかへ給ひければ人あさけりて山もんの大衆／にはのろはるへかりけるものとそ申あひけるされ」(50ウ)ともみやうけんしんはつはときもありをそきもあ／りし事なればつゐにはかゝるうきめにあはれる／こそおそろしけれ同六月三日都より御つかひありと／てひしめきけり大納言これにてうしなへとにやとき／き給へはひせんこのしまへなかし奉れとの御つかひ／なり小松もとのよりも御文ありみやちちかきかた／山里にもをき奉らんとやう／に申候つれともかなはぬ／事こそ世にあるかひも候はねざりながら御いのちをは／よきやうに申うけて候そ御心やすくおほしめされ候御／心やすくおほしめされ候へとたひのそらの事共こまやか」(51オ)にこそあそはされたれなんのは二郎かもとへあひかまへて／御心にたかはてよくみやつかへとおほせられたりかたしけ／なくおほしめしし君にもはなれ参らせつかのまもは／なれかたう思はれつる北のかたきんたちすてをきた／てまつりていつくをさして行やらん一とせもさむも

ん／＼のせうによりてひちう^{キツ}へなかさるへきにてにしのきや／＼うま
ていたりしかともやかてめしこそかへされしに今／度は二たひ都
にのほりこひしきもの共をあひみん事／も有かたしと心ほそくそ思
はれるあければふね／＼のりて出られけりみちすからなみに
むせひなからふ」(51ウ) へしとはおほえねとも露のいのちはき
えやらすあと／＼のしらなみへたつれば都はしたいにとをさかりひか
す／やう／＼かさなれば多むこは又ちかくなる去程にひ／＼せん
こしまにつきたまふたいのうらと申所にあさま／しけなるしはのい
ほりにをき奉るかた山さとのしつ／かすむはにふのこやく^ヤこれなら
んしまのならひうしろは／山まへはいそなればきしうつなみのをと
松吹かせのこゑあ／はれはいつれもつきせさりけりおなしき五日む
ほん／＼のともから共くに／＼へわかちつかはされけりあふみの／中
将入道れんせいちくせんのかにやましろのかみもとかぬ」(52オ)
をきの国しきふのたいふまさつないつもの国そう判官の／ふふさと
さのくにしんへい判官すけゆきみまさかのくに／とぞ聞えけるかや
うにさん／＼にしちらして入道ふく／はらへこそくた^{マヤ}されければおな
しき廿日つのさゑもんせう／もりすみをししやにてかとわきと
の、もとへの給ひを／＼くられけるはいまは少将とう／＼くたされ候
へと有ければさ／いしやうさらはありし時いかにもなり給て又うき
事を／きかせ給ふ事よとの給へは女はうたち猶もさいしやう／のよ
きやうに申させ給へかしと申あはれはさいしやう／そむする程の事
は申ぬ今は世をいとふより外のこと」(52ウ) をは何事か申へき

しさいまでのことはよもあらしいつ／＼のうらにもおはせよのりも
りかひのちのあらんかき／りはとふらふへしとそのたまひけるさい
しやう今度は／世のうらめしさにともなはれす少将はかりそいでら
／＼れる御つかひ今夜とはまでと申せはせうしやういま／一夜も
かなはぬ物ゆへにいまはこれにありてあかつきとく／いてんとた
まへとも御つかひゆるし奉らすせうしやう若／君三さいになりたま
ふおはしけり日比は若き人にて／いとこまやかなることもおはせさ
りしかいまはの時に／なりしかはさすか心にかゝりてや思はれけん
おさなきも」(53オ) のをいま一め見はやとの給へはめのといた
き奉りて参／りたりせうしやうひさにをきあなむさんやなんち七
／さいにならばけんふくせさせて院へまいらせんとこそ思ひ／しに
今はかひなしあひかまへていのちなからへておとな／しくなりたら
は法師になりてなりつねか後世とふ／らひてえさせよとおとなしき
人への給ふやうにかきく／ときなかれけるにそ女房たちもみないよ
／＼袖をぬ／らされけるおなしき廿三日につのさゑもんせうもり
す／み福原に帰参りて此由を申せはやかてひちうの国の住／人せの
をの太郎かねやすに仰せてひちうへくたし奉る」(53ウ) かとわ
き殿のかへり聞召されん所をもは、かり思ひければ／やう／＼にな
くさめたてまつりけれ共少将はいさ、か／なくさまん心ちもしたま
はすよるひるほとけの御な／をとなへてた、ち、の事をその給ひけ
るさる程に大／なこんはたいのうらにおはしけるかこ、はなをふな
つ／きにてひんきあしかりなんとてこなたのちへわたし奉／るひち

うひせんりやうこくのさかひなんはにうせのかう／ほそたに川をおひにせるきひのなか山のふもとありき／のへつしよにと云所にをき奉るそれより少将のおは／しけるひちうのせのをへはわつかにみち三里の間也せう」(54才) しゃうかねやすをめしてこれより大納言との、おはし／ますひせんのありきのへつしよへはいか程のみちそと／とひ給へはちかきよしを申てはあしかりなるとや思ひ／けんかた道十二三日に行みちにて候と申少将こは／いかに日本は共三十三か国にてありしを天ち天皇の／御時に六十余州にわかたれたりされはあつまにきこゆる／てわあふしうもむかしはこくなりけるをもんむ天皇／の御宇慶雲のころ十二くんをさきわけて出羽の国／とは名つけられたりされはなか比さねかたのちうしやうの／あつまへななされたりしにむろの国にあこやの松といふ」(54ウ) めい所ありちうしやうかれをみんとて国のうちをめぐりて／たつねらるれ共なかりけり道にてらうおう一人ゆきあひた／り中将やあ御へんはふるき人とこそみれあこやの松／と云めいしよやあるとはれければたうこくのうちには／候はずと申ちうしやうあなふしきや世のすゑになれば／めいしよをもはやよひうしなへるにこそとて帰られければ／らうおうたち帰り申けるはあはれ君は／

みちのくのあこやの松にこかくれていつへき月のい／てもやらぬか

とよめるうたのころをもて東国(マ)のうち／とはしろしめして候かそれはいまたこのてはむつり」(55才) やうこくかむかしこく

りし時よめる歌也されは／てはの国にもや候らんと申せはその時中将けにもとて／出羽の国にこえてこそあこやの松をもみたりしかすて／に十二三日はほとむと都よりちんせいけかうの程こさ／むなれたさいふよりはらかのつかひ都へのほりしこそか／ち、十五日とはきけなかんづくにせんやうたうにそれ程／の大国有とはきかぬ物をひせんひつ中備後もむかし／は一国にてありしをなかころより三かこくにはわかれ／たりひせんひつちうりやうこくのさかひいかにとをしと／云とも一日二日にはよもすきしちかきをしと」(55ウ) 申なすはしらせしと思ふにこそとてその後はこひし／けれ共とひたまはず去程にほつせう寺のしゆきやう／しゆんくわんそうつへい判官やすよりはきかいかしま／へそななされけるたんはのせうしやうをもともにあひそ／へてそくたされけるやすよりはななされけるとき／にすわうのむろつといふ所にて出家入道してほうみ／やうしやうせうとそなのりけるしゆつけはもとよりのそ／みなりければ／

つゐにかくそむきはてける世のなかとくすてさ／りし事そくやしき

きかいか島と申は都を出てはる／」(56才) と海をわたり行しま也舟なともたやすくかよふ事／なし島にも人まれ也たま／あるものもこのとの人／にはにさりけり男はゑほしをきす女はかみもさ／けす身にはしきりにけおひつ、いろくろくしてう／しのことくいふこと葉をも聞しらすいしやうのなければ／人にはにすしよくする

物もなければた、せつしやうを／もてさきとすしつか山たをうたさ
れはへいこくのたく／ひもなくその、くはをもとらされはけんはく
のたくひ／もさらになしさつまかたとはそうみやうなり昔はおに／
かすみければきかいか島とも申也しまのなかにはたかき山有〔56
ウ〕山のいた、きにいわうと申物みち／てとこしなへ／に火もえ
つ、つねはいかつちなりあかりなりさかり／山ふきふもとの里に雨
しけし一日へんしも露の命／なからふへしともみえさりけりさる程
に大納言はあ／りきのへつしよにおはしけるかめしかへさる、事も
／やす^とたのもしう思はれけるにちやくしたむはの少／将もきかい
かしまへ^そなど聞えしかは心ほそくそおほ／されける小松殿に出家
のいとま申給て年四十三と申／にはうき世をよそにすみそめの袖と
そなられける／きたのかたはうんりんにおはしけるかさらてた
にす〔57オ〕みなれぬかた山里は物うきにいと、しく人めをし
のは／れければすき行月日もあかしかねくらしわつらふさま／なり
大納言のめしつかはれける女房たち侍いくらも有／けれども世にを
それ平家には、かりて参りちかつくもの／もなし其中にけんさゑも
んのせうのふとしはかりこそ／つねは参りて事とひ参らせけれ北の
かた有ときのふ／としをめしてあはれや殿はひせんのありきのへつ
しよと／かやにわたらせ給なるせめては文を奉りて返事をみて也と
／もなくさまはやと思ふはいか、あるへきとのたまへはのふと／し
申けるはようせうより御をん身にあまりてまかりかう〔57ウ〕
ふり候きいさめられまいらせられし御ことはもきもに／めいしうの^{（マ）}

こまでめされ候し御こゑも耳のそこにと、／まりてへんしもわすれ
まいらせ候はす御くたりの時も御／とも仕るへきよししきりに申候
しかともへいけゆるされ／候はねはちからをよひ候はずたとひ今度
いかなるめにもあ／ひ候へまいらはやとこそ存候へさらは御ふみあ
そさはされ／候へと申せは北のかたさらはとてやかて御文あそはし
て／そたひたりけるのふとし御ふみ給て備前の国ありき／のへつし
よにたつねまいりしゆこのふしに申けるは是／は大納言との、年来
つかはれ候しけんさゑもんのせうのふ〔58オ〕としと申ものに
て候かこれまでまかりくたりて候御ゆる／されをかうふりて一め見
まいらせ候ははやと申せはしゆこ／のふしこれまでたつねまいりた
る心さしのほをかんで／大納言とのに此由を申大納言人道との
はおりふし都／の事を思ひ出たまひてなきみたまひけるにのふとし
か／まいりたるよしを聞たまひなのめならずよこひてこ／れへと
の給へはのふとし御前に参りて見参らせけるに／おはします所のあ
さましけなるもさる事にてはや／御さまかへておはしけるとみ奉り
けるにこそいと、め／もくれ心もきえておほ^もはるれ扱みやこの事は
いかに〔58ウ〕とのたまへはた、思召やらせ給ふへし御ふみの
候とて／まいらせたりければ大納言これをひらきてみ給ふにみつ／
くきのあとはなみたにかきくれてそこはかとは覚え／ねともおさな
き人／つねは御行をこひしかり参／らせ候なとかき給ひたりけ
るをみたまふにそ日比の思ひ／なけきは事のかすならずとてなきか
なしみ給ひけるか／くて中五日有てのふとし申けるは北の御かたあ

ひかまへて／御返事給ていそきのほれと仰せの候しにあとかたへも
 ／なく候はん事をそれ入て候へは今度はいとま申てまかり／のほり
 又こそ参り候はめと申せは大納言入道殿なん」(59才) ちか今度
 くらん程なからふへしとおほえすとて／そなきたまふの給ひぬ
 へきことはみなかねてより御文に／つきぬれともせめてのしたはし
 さにはる／といて／たりけるをしはし／との給ひたひ／めし
 そかへされ／けるのふとしみやこにのほり御返事を参らせけり北の
 ／かためつらしさ^(ママ)ふみをもみるかなとてあけてみ給へは／ひんのか
 みを一むらまきくせられたりけるをみ給ふにそさて／ははやさまか
 へおはしけりかたみこそ中さうけれとてふし／しつみてそなき給ふ
 おなしき八月十六日かいかん有て／治承元年とそ申おなしき十七日
 大納言入道つるに」(59才) うせられけりそのさいこのありさま
 さま／に申まつさけ／にとくをたて、す、め奉りたりけれともそ
 のしるしも／なかりければ二ちやうはかりなるたかきさしのした／
 にあなをほりひしをうへておとし入奉りてうしなひ／奉りたりとそ
 きこえけるこれも入道しやうこく／小松殿にしらせたてまつらてひ
 そかにうしなひたてまつ／れとなんはの二郎かもとへのたまひくた
 されたりし／よてなりきたのかたは都にてこのよしをき、た／ま
 ひてさてははや大納言は此世にはなき人と也給ひたる／にこそざり
 とも今一とかはらぬすかたをも見奉るか」と(60才) 思ふてこそ
 あげつるにいまはかみをつけても何かはせんとて／ほたいあん云
 寺にてさまかへかたのことくの仏事をこ／なはれけりこの北のかた

と申は山しろのかみあつかたの／むすめわかきみ姫君きたのかた
 野へに出てははな／をたりをりさはへにおりては水をむすひ仏せん
 にそな／へて大納言との、こしやうせんしよとそいのられける事／
 ざりとさうつりて世のかはりゆくありさまた、天人の五／すいとう^(ママ)
 みえしおなしき十一月廿七日のあかつきせいせい／とうほうにいつ
 又せききありしゆうきとも申うちには／大ひやうらんあるのみなら
 すほかにはおほきなるみ」(60才) たれと申けるさる程に年くれ
 て治承二ねんに／なりにけりとなり／

(以下、八行分空白)

(空白)

平家物語卷三目録

- 一 ほうわう御くはんちやうの事
- 一 山門のかくしやうとたうしゆかつせんの事
- 一 たんはの少将とうしまにをいてくまの山そうきやうの事
- 一 はんくわんやすより入道うたの事
- 一 そふか事
- 一 中宮御くわいにんの事
- 一 たんはの少将平のやすより入道きらくの事
- 一 せうしやうみやこかへりの事
- 一 ありわうきかいかしまへたつねくたる事
- 一 しゆんくわんそうつたかひの事

「(61才)

「(61才)

「(1才)

一つしかせの事

一こまつとのくまのさんけいの事

一たちをひかる、事

一法皇御つかひを西八てうへたてらる、事

一けくはんならひにるさいの事

(以下、四行分空白)

「(1ウ)

平家物語巻第三

ほうわう御くはんちやうの事

治承二年正月一日たいりにはてうはいをこなはれ四日てう／きん
きやうかうありてなに事もれいにかはりたること／はなけれどとも
年のなつしん大なこんにちかのきやう巳下／きんしゆの人／そ
の外ほくめんのともからともいたるまで／おほくうしなはれしこ
とほうわう御いきとをり猶やませ／たまはす是によりて世の御まつ
りことをものうくおほし／めされて御心よからすぞ聞えけるたい
しやうの入道もゆきつ／なつけしらせしのちは君をうしろめたき御
事におもひま(2オ)いらせうへにはことなきやうなれともした
には心よういつねに／してにかわらひにのみそおはしけるさる程に
法皇はその／ころ三井てらのこうけん僧正を御しはんとしてしんこ
むのひ／ほう御てんしゆあるへきよしそのきこえありことし大日経
そ／しつちきやうこんかうちやうきやうこの三ふのひきやうを御／
てんしゆありておなしき五日やかて三井寺にて御くわんちやう／あ

るへしと聞えしかは山門の大衆おほきにいきとをりて／たい／御
しゆかいくはんちやうを是我山にてとけさせた／まふことこれせん
きなり中にも山王のけたうはしゆかいく／はんちやうのため也しか
るを今度三井寺にてとけさせたまひ(2ウ)候は、おんしやうし
をやきはらふへしとそ申ける法皇さま／／にこしらへおほせけれ
ともれいの山の大しゆゑん／せんにもか、はらすいよ／ほうきす
ときこえしかは法皇／これむやくなりとて御けきやうけちくはんし
て御くはん／ちやうの事いまは思召と、まらせ給ひけりされ共御ほ
んいな／りければこうけんそうしやうをめて天王寺へ御幸なり五
ちく／わう院をたてさせ給ひてかめゑの水をもて五ひやうのすい／
とさため仏法さいしよのれいちにてそてんほうくはんちやう／はと
けさせ給ひけるほうわうはさんもんさうとうをしつ／めさせたま
はんかために三井てらにてのくはんちやうの御(3オ)事をはお
ほしめしと、まらせ給ひたりけれども／

山門のかくしやうとたうしゆかつせんの事

山門にはかくしやうたうしゆのあひたにふくはいの事出／きてかつ
せんどゞにをよふまいとにかくりようちおとされ／て山門のめつは
うてうかの御大事とそみえしたうしゆと申／はかくしやうのめしつ
かひけるわらはへのほうしになりた／るやもしはちうけん法師はら
ともなりこんかうしゆ院のさす／かくしんこむそうしやうちさんの
とき三たうにふちはんして／けしゆとかうしほとけに花かう奉りし
ともからなり去年より／けのきやう人とかうして大しゆをこと共す＊せ

かくと、のいくさ」(3ウ)にかちにけるたうしゆらししゆのめい
をそむきてかつ／せんすかとにをよへりすみやかにちうはつをくは
へらるへき／よし公家へそうし武家へふれうたふたいしやうの入道
もあん／せんを承りてきの国の住人ゆあさの七郎ひやうゑむねみ／
つをさきとしてきないのつはもの二千よき大しゆにあひそへ／てた
うしゆをふせかせらるたうしゆ日ころはどうやうはうに／候けるか
あふみのくに三かのしやうにけかうして国中のあ／くたうをかたら
ひすたの人せいをいんそつして今度はさ／ういさかのしやうにたて
こもる大しゆくわんくんつかう五千／よきにてさういさかのしやう
にをしよせたり大しゆ今度は」(4オ)さりともと思ひけれども大
しゆはくわんくむをさきたてんと／す又くわんくんは大しゆをさき
たてむとせし程に皆思ひ／／心／／になりてこんどのいくさもは
か／／しくもなかりけり／たうしゆかかたらふ所のあくたうと申は
しよこく七たうの／せつたうかうたうさんそくかいそくら也よくし
んししやうに／してししやうふちのやつはらなれは命もおしますせ
めた、か／ふに大しゆくはんくむかすをつくしてうたれにけり世末
に／なれはあく人はます／こはくなりせん人はいよ／よはく／
なるこそかなしけれその、ちは山もんいよ／あれはて、十／二せ
んしゆのほかはしちうのそりよまれなりたに／／のか」(4ウ)
うえんまめつしてたう／／の行法もたいてんすしゆかく／のまを
とちさせんのゆかをむなし／せり四けう五時の／春の花もにほはす
三たいそくせの秋の月もくもれり／三百よさいのほつとうをか、く

る人もなく六時ふたんのかうのけふ／りもたえやしけんたうしやた
かくそひへて三ちうのかま／へをせい／かんのうちにしはさみたう
りやうはるかにひて、四／めん(ママ)のたかき(ママ)をはくふの間にかけたりき
され共いまはくふつをみ／ねのあらしにまかせてきんようをこうへ
きにうるほし夜の月／ともし火をか、けてのきのひまよりもりあか
つきの露玉を／たててれんさのよそほひを(ママ)こふとかやとをくちちく
の仏せき」(5オ)をとふらふに昔ほとけののりをとき給ひしき(ママ)
んしやうしや／竹りんしやうしやきつことくおんわしのたかねもこ
のころはこ／ちう(ママ)のすみかとあれはて、いしすへのみやのころらん
はくろちに／水たえて草のみふかくしけれり大ほん下せうのそとは
／もこけのみむしてかたふきぬしんたんにもてんたいさん五／たい
山はくは寺玉せん寺もこの比はちうりよあとなくあれは／て、大小
せうのほうもんもはこのそこにやくちぬらん我て／うあて(ママ)こたかを
のたうたうもむかしはのきをならへてありし／か共一夜の内にほろ
ひはて天くのすミきかとなりにけりなんと／の七大寺もこの比は東大
こうふくりやうじの外はのこれる」(5ウ)たうたうまれなり八し
う九しうもあとたえてほつさう三ろ／む二しうのほかはのこれる法
門まれ也されともさしもやむこと／なかりつる天たいの仏法も治承
の今にをよひてみなほろ／ひぬるにこそと心ある人はかなしますと
云事なしりさんしける／その中(ママ)にやよめたりけんふるきはうのは
しらにかくそ／かきつけたる／

いのりこしわかたつそまのひきかへて人なきみねとあれ／やは

てなん

てんけう大師たうさむさうさうのむかしあのく／たら三みやく三ほ
たいの仏たちにいのり申されけん事を／おもひ出てやよみたりけん
いとやさしくそ承る八日はやくし(6才)の日なれ共なむと、な
ふるこゑもせず卯月はすいしやく／の月なれともへいはくをさ、く
る人もなしあけのたまかき／かみさひてしめなはのみぞ残りけるさ
れはふるき人さの申／あわれけるはわうほうのかたふかんとては仏
法さきたてはう／すといへりしなの、せん光寺もさんぬる三月十三
日にゑんしやう／の聞へありこの如来と申は昔中てんちくひしやり
こくに／五しゆのあくひやうおこりて人みんこと／くほろひしと
き／ひしやりこくの月かいちやうしやくそんもくれん御心を／
ひとつにしてゑんふたんこんにしていうつし一ちやくしゆ／はんの
みたの三そんゑむふたい第一のれいさう也されはふ(6ウ)つほ
うとうせんのことほりにこたへて中てんちくにて五百／さいはくさ
い国にて一千よねんその後我てうようめい天皇の／御宇につのくに
なんはのほりえにしてはらくやすらひ給し／をおほみのあつま人
ほんたよしみつこれをとり奉りてしなの／のくにみのちのこほりに
あんちし奉る治承のころまではす／てに五百十よねんなりかくめて
たかりしれいふつれいしやも／この時にあたりてこと／くほろひ
させおはしましけるこそ／あさましけれ／

たんはの少将とう島をいてくまの山そうきやうの事

さる程にきかいかしまのる人共くさはのすゑにすかれる露の(7

オ)命さえやらんことをおしむへきにはあらねともたんはの少／将
のしうとへいさいしやうのりもりのしよりやうひせんの／国かせの
しやうよりいしよくをつねにをくられるにそしゆ／むくはんもや
すよりもいのちいきてはすくしけるなかにも／せうしやうやすより
入道はもとよりくまのしんしんの人にて／おはしければいかにもし
てたうしまの内にくまの三所こん／けんをくわんしやうし奉りてき
らくの事をいのらはやと／申あはれけるにしゅんくわんはもとさん
そうなりけるう／へふしむの人にて山わうならばさもありなんとて
これにとう／しんせさりけり二人はおなし心にてしまのうちをまは
りくま(7ウ)のに、たる所やあるとたつねたてまつるに有とこ
ろりんたう／のたえなるありこうきんしうのよそほひしなく／にあ
るひは／うんかのあやしきありへきられうのいることむなし山のけ
し／き木のこた外よりもなをすくれたりみなみをのそめはかい／
まん／としてくものなみけふりのなみいとふかしみつは／へきた
んをた、へたれはかのちやうあんしやうかのむすめ／のけんのとく
をあらはしてしんやうのえのほとりもいまこそ／おもひしらけれ
きたをかへりみればまたさんかくのか／かたるなかりはくせきの
れうすいみなきりおちたりたきの／をとことにすさましく松風かみ
さひたるところはひれうこん(8才)けんのおはしますなちの御
山にさもにたりけり扱こそやかて／そこをはなちさんとこそなづけ
けれ彼みねはしんくうこのみ／ねはほんくうこれはそのわうしかの
わうしとわうし／の／なをつけてそ参られけるねかはくはこむけ

んこむかうとうし／われら今度みやこへかへし入させ給へこひしき
もの共をみせ／給へととの二とせかあひたそいのられけるこんけ
んもいかにあ／はれとおほしめされけん日かすつもりてたちかふへ
きしやう／ゑなければあさのころもを身にまとひきりめのわうしの
／なきの葉いなりのやしろのすきのはをたむけつ、くろめに／つく
とそくはんしけるから(マ)はしき心有時はさはへのみつを(8ウ)こ
りにかきいはたかはのきよきなかれと思ひなしたかきとこ／ろにの
ほりてはほつしんもんみこしかたけとそくわんしけ／る六十六と参
りてその後かみもなければ花をたはりてへ／いとさ、けつ、判官入
道せうしやうてんの御まへにてつねに／のとをこそ申けれ／

これあたりきたれるとしのつゐては治承二年つちの(マ)はいぬ／月
のならひは十二月日の数は三百五十四日吉日(マ)りやうしん／を
えらひてかけまくもかたしけなく日本たい一大りやうこん／け
んゆや三しよこむけんならひにひれうたいほさつたのけ／うり
やうたつ(マ)のひろまへにしてしんしんの大せしゆうりん(9オ)こ
ふちはらの朝臣なりつねしやみしやうせうら一しんしやう／し
やうのまことをいたし三こうさうおうの心さしをぬきん／てて
つしん(マ)てもてうやまて申それせうしやう大ほさつはさ／いとく
かいのけうしゆ三しんゑんまんのかくわうなりやう／しよこ
んけんあるひはどうはうしやうるりいわうのかんしゆ／ひやう
しつちよのによらいなりあるひはゑんはうふたらくの／うけの
あるし入ちうけんもむの大しなりにやくわうし／はしやはせか

いのほんしゆせむいしやのけけん也ちやうしや／うのふつめん
をあらはししゆしやうのしよくはんをみてしめ／給ふこれもも
て上一人をはしめ奉り下万みんなにいたるまで(9ウ)けんせ
あんおむのためこしやうせんしよのためにあしたにし／やうす
いをむすむてほんなうのあかをす、きゆふへにはしん／さんに
むかひて大ひのほうかうをとなへ奉るかんおううたかひ／なし
あいみんあやまらすか、たるみねのたかきをはしんと／くのた
かきにたとへれい／たるたにのふかきをはくせい／のふかき
になぞらふくもをわけてのほり露をしのきてくたるわ／れらり
やくのけもんをたのますむはいかんかあゆみをす(マ)る／なんのみ
ちにはこはんこんけんのいとくをあふかすむはなむ／そかなら
す身をゆうえんのさかひにくるしめんあをきねか／はくはせう
しやう大こんけんひれう大ほさつしやうれんし(10オ)ひ
の御まなしりをめくらしさをしかの御みみをふりたてわれ／ら
か無二のたんせいをちけんし日さのさんけいをあひみん／し一
さのこむしをなうしゆし給へそも／／むすふはやたまの／りや
うしよこむけんは又をの／／きにしたかひてうはむの／しゆし
やうをみちひきかつはむえんのくむるいをすくはん／ため七ほ
うしやうこんのすみかをいて八万四千のひかりをや／はらけか
りにりやうしよすいしやくのちをしめひさしく六た／う三の
ちりにとうし給へりよてちやうこうやくのうてん／くちやうし
ゆとくちやうしゆのらいはいそてをつらねへいは／くをさ、く

ることれてんひまなしにんにくのころもをかき」(10ウ) ね
はなをかきたうにさ、けてはしんでんのゆかをうこかし／しん
しんの水をすましてりもつのいけにた、へたりしんめい／みや
うけんをたれたまは、かくはんなんそしやうせさらんか／さね
てこひねかはくは十二しよこむけんをのく／りしやうの／つは
さをならへはるかにくかいのそらにかけりはやくさせん／のふ
かきうれへをやすめていそききらくのほんくわいと／けんさ
いはい

とそ申けるある夜せうしやうてんの御前につう／やしてねんしゆせ
られけるにおきのあらしことにはけしくて／いつかたよりともしら
ぬ木の葉一つ、二人の袖のうへにふり／か、れり何となくそれをと
りてみればたのみをかけ奉る三く」(11オ) まの、なきのはにそ
有けるこの木のはに一しゆのうたをむし／くいにこそしたりけれ／
ちはやふるかみにいのりのしけれはなとかみやこへ／かへら
さるへき

こんけん御なうしゆうたかひなしとそおほ／えたるある夜にし御
せん御前につうやせられたりける／にゆめうつ、ともわかさりけ
るにおきのかたよりよにつくしけ／なる女はうたち十よ人こ舟に
とりのりつ、みてひやうしを／うたせつ、にし御せん御まへに
ていまやうをこそう／たはれよろつのほとけのくわんよりも千しゆ
のちかひそたの／もしきかれたる草木もたちまちに花さきみのなる
とこそきけ」(11ウ) とこれを二三へんうたふかとおほしくてか

きけつやうにそう／せにけるそれにしの御せん御ほんちは千しゆ
せんけんにて／おはしますりうしんは二十八ふしゆのその一なれば
さためて／御やうかうも有らんとたのもしかりし事ともなり／

はんくわんやすより入道歌の事

判官入道はあまりに都のこひしさのせつなるま、に千ほん／のそと
はをつくりあしのほんしをかきけみやうねんかうし／ちみやう月日
をしるししたには二首の歌をそかきつけける／

さつまかたおきのこしまにわれありとおやにはつけよ／八への
しほかせ」(12オ)

おもひやれしはしと思ふたひたにもなをふるさとはこひし／き
ものを

これをうらにもちていて日本のかたをふしをか／みなむきみやうち
やうらいほんでんたいしやくけんらう地／神わうしやうちんしゆし
よ大明神ことにはたのみをかけ奉／るゆや三しよこんけんかいりう
わうとうにてもあはれみ／をたれ給ひ此中に一本なりともこきやう
へつたへさせ／給へときせいしておきつしらなみのよせてはかへる
たひことにそと／はをうみにそうかへけるそとは、つくりいたすに
したかひて／入けるに日かすつもれはそとはのかすもつもりけるそ
の思ふ心や／たよりのかせ共なりにけん又しんめいふつたややく
ら」(12ウ) せおはしましけん千本のそとはのなかなにはるく／と
／八へのしほちをゆられきてあきのいつくしまの／やしろの御せん
のなきさへうちよせたりそのころはん／くわん入道のゆかりありけ

るそう都をいてせんやうしゆ／きやうしけるかある時いつくしまに
参りしやたんのやう／をおかみたてまつるに心もことはもおよはれ
す八社の御／てんはいらかをならへ百八十間のくわいらうありしや
とう／はうみにのそめる所にてしほのみちひに月そすむしほの／さ
すときはおきのとりあうちのくわいらうあけのたまかき／にいたる
までことごとくるりのことししほのひくときは夏〔13オ〕の夜
なれと御せんのなきさにしもそをくそのわくわうとう／ちんのすい
しやくはいつれも／とりに／なりと申せともいかな／れはこの御
かみはことにかいはんのいろくつにえんをはむすはせ／給ふらんと
て御ほんちをみや人にたつね奉れはしやから龍王の／第三の御むす
めたいそうかひのすいしやくとそ申けるこのそよい／よ／たどく
思ひ参らせひねもすにほつせ参らせ夜に入月さし／出てのちまん
／たる海上を見わたせはそこはかとなくうち／よせられたるもく
つの中にそとはのかたちの見えけるをなにと／なくこれをとりに見
ければおきのこしまとかきなかせることの／は、判官入道のしわざ
なりもんしをはゑりいれきさみつけ〔13ウ〕たれはなみにもい
そにもあらはれずあさやかに見えたりけれこ／の僧あはれにおもひ
ておひのかたはらにさし都にもちてのほ／り判官入道かは、一条の
北むらさきの、へんにしのひて候ける／にとらせたりければらうほ
このそとはをとりてさらはこのそ／とはのもろこしのかたへもゆら
れゆかてなにしに是までつ／たはりきて二度ものをおもはする事よ
とてなみたにむせひ／ければさいしともなかされしときのわかれも

今さらこのそとは／を見けるにそいと、思ひはまさりけるはるかに
ゑいふむにを／よひてほうわうこのそとはをめてゑいらんありあ
なむさんや／これらはいまたきかひか島にあるにこそとてれうかん
に御な〔14オ〕みたせきあへさせ給はす其後うちのおと、のも
とへをくらせおは／しましたりければおと、せんもんに見せ奉られ
けり入道しや／うこくもさすかいはきならねはあはれけにこそおも
はれけれそ／の比京中の上下あやしのしつのをしつのにいたるま
てやす／より入道か二しゆの歌とてくちすさまぬはなかりけりかき
の／もとの人まろはしまかくれゆく舟をおもひ山のへのあか人は
あしのへのたつをなかくめけりすみよしの明神はかたそきのおも／ひ
をなし三輪の明神はすきたてるかとをさす昔そさのお／のみこと三
十一しをゑいしはしめ給ひしよりこのかたもろ／のしん／めいふ
つたこのゑいきんをもて百千万の思ひをのふ千ほんまで〔14ウ〕
のそとはなればさこそはちいさくもありけめさつまかたより都／ま
てつたはりけるこそふしきなれあまりそ思ふ事はかやうに／しるし
あるにや／

そふか事

むかしかんでうの御門こ、くをせめられし時はしめはりれうと／申
しやうくむ十方よきをゐてこ、くへむかふたりけるにこ、／くのい
くさこはくかんわうのいくさよはくしてほとなくをひ／おとされに
けりつきにそふと申しやうくん十六さいになりけるか／かんわうの
はたをたひて三十万きをあひそへてこ、くへむけら／れたりしか今

度もこゝくのいくさかつにのりかんわうのいく」(15才)さまけにけりそふをはしめとしてむねとのつはもの千よ人をいけとるその中に六百よ人をほらにこめて三年といへはとりいたし六百よ人か一そくをうちきりてひろき野へにをひはなつやかてしするもあり程へてしぬるものもありその中にそふ一人のこりと、まりて野へにいて、はくさのみをと山田をおりてはおちほをひろいさへの水をえんとしてかひなき命をそたすかりけるさるま、にはたものかりはしめはそふにをそれけるかしたひに見なるま、におそる、事こそなかりけれある時そふかりをひとらへて一かうのしよをかりのつはさにむすひつけつ、はなちけりかひしくもむつひのかりあき」(15ウ)はかならずこしちより都へわたるものなれはおりふしかん／のせうてい上りんえむに御ゆきなりて御あそひありゆふ／されのうらうすくもりてもあはれなりけるおりふし一つら／のかりとひきたるその中にかり一とひさかりてつはさにむすひ付たるたまつさをくひきりてこそおとしけれくわん人これを取てきいのおもひをなし御門に奉るひらきてゑいらん／あれはそふかしゆせきそしるかりけるむかしはかんくつ／の中にこめられたつらに三しゆんのしうたむをくりき／いまはくわうてんのうねにはなたれてむなしくこてきの／一そくとなれりたとひかはねはこのちにちらすといふとも」(16才)たましいは帰て二たひむへんにつかへんそしけいとそかき／たりけるみかとははれにおほしめしそふといひしものをこゝく／へつかはされたりしかはいまたこの

世に有にこそとて今度／はたのしやうくん百万きをあひそへてこくへむけられけり／今度はここのいくさよはくかむのいくさこはくしてこゝく／程なくやふれにけりそふをはくわうやの中よりたつね出／すあしはきられなから十九年のせいさうを、くりてとし／三十四と申にはかんきう万里の雲の外より二たひきう／りにかへりけりそれよりしてふみをはかんしよとなつけつ／かひをはかむし共申けるかんかのそふはしよをかりにつけて」(16ウ)きうりにをくりほんてうのやすよりは歌をなみのたよ／にまかせてこきやうへつたふかれはかりのつはさの一はうのし／よこれは是はそのおもての二しゆのうたかれはかんでう／これはほんてうかれは上代是は末代さかひはへたゝりて／世はかれともふせいはいつれもたかはずあはれなりし事／ともなり／

中宮御くわいにんの事

さる程にたいしやうの入道の二のむすめ中宮にてわたらせ／給ひけるか治承二年の春の比より御なうとてくものうへ／あめかしたのさはきなるうへ平家の人ことにおとろきあ」(17才)はれけりいけくすりをつくしおんやうしゆつをきはめしよ／寺に御しゆきやうをこなはれしよしやくわんへいを奉る／されとも御なうた、にもあらず御くわひにんときこえさせ給／ひしかはいつしか又ひきかへたる御よろこひにてそ有けるし／ゆ上十八ちうくう二十二にならせ給ふわうしもいまた出きさ／せ給はすわうしにてましまさはいかはかりめてたからましなと／た、いまわうし御たんしやうなどのあるや

うにあらまし事を／そ申あはれけるへいけはんしやうおりをえたり
わうし／たんしやううたかひなしとぞみえたりけるしやうしゆくふ
つほさ／つにつけては御さむへひあんきそうかうそうにおほせて
は」(17ウ) わうしたむしやうとぞ申させ給ひけるおなしき六月
二日中／宮の御ちやくたいありさきの右大将むねもりのきたのかた
ぞ御／かいしやくには参られける仁和寺のみや御かちありさすのみ
や／七ふつやくしのほうならひにへんしやうなんしのほうをしゆ／
せられけりきさきは月のかさなるにしたかひて御身をの／みくるし
くせさせおはしましてくこもつや／きこしめし／も入させ給はず
御しんもうちとけならずひすいのかんさしは／御目のうへにとろ
せくおもやせさせ給ひたる御けしき猶／らうたくそみえさせ給ふか
んのりふしんのせうやうてんのや／まひのゆかにふしたうのやうき
ひのりくわ一しの春あめを」(18オ) おひふようの風にしほれち
よらうくわの露おもけなる／けしきよりもなをいたはしき御さまな
りか、りけるおりふし／御物のけともとり入参らせて御けんしやし
きりなりみやう／わうよりましのはくにかけてりやうともあまたあ
らはれた／りまつさぬきのゐんのをんりやううちのおくさふのおん
ねん／なりちかのきやうさいくわう法師かしりやうへつしてはきか
い／かしまのしやうりやうなど、そうらなひ申けるきんねんふ／り
よの事共ありて世上らつきよせさることこれをんりやう／のゆへな
りとして同じき七月にさぬきのゐんの御つかうあ／りてしゆとく天
皇とぞ申けるうちのおくさうもそうくわん」(18ウ) そうゐおく

られて大政大臣正一位とぞ聞えしちよくしは／せうないきこれなか
なりくたんのむしや^(マ)はやまとの国そうの／かみのこほり川かみのむ
らはんにやの、五三まいなりしを保／元の秋ほりをこしてすてられ
し後はしかひみちのほとりのつ／ちとなりて年／くに春の草のみし
けれり今ちよくしたつ／ねきたりてせんみやうをさつければはう
こんいか、思は／れけんおほつかなしとぞ申けるくわさんの法皇の
御世をいと／はせ給ひれいせん院の御ものくるはしかりしはもとか
たのみ／むふきやうかりやうなりまた三てうの院の御めも御覽せさ
／りしはくはんさむ^(マ)ふかりやう也されは昔もおんりやうは」(19
オ) おそろしき事なるにやされはさうらのはいたいしをはしゆ／た
う天皇とかうしるかみのないしんわうをはくわうこうのしき／にふ
すこれひとへにをんりやうをしつめられしはかり事と／こそうけた
まはる／

たんはの少将平のやすよりきらくの事

か、りけるおりをえて門わきのさいしやうのりもりの卿う／ちのお
と、の御ともにおはして申されけるは中宮御さむの／御ためにさま
／の御いのりとも候なるいつれと申共大／社^(マ)にすきたる事は候
ましさらんにとりてはきいかしま／に候なりつねのあそむをめし
帰されたらんほとんせんこん」(19ウ) くどくはいかてか候へき
と申されければおと、そのきそくを／こそよきやうにうか、ひ候は
めとて入道の御まへに参りて／申されけるはたんはの少将かことを
さいしやうのあなち／なけき申され候はげにもふひんに思ひ候ま

ことになりち／かのきやうかしりやうをなためられ候はんにつけて
もいき／て候なりつねをめしかへされたらん程の御きたうはいかて
か候／へき人のなけきをやめさせたまは、御くわんもかならず／し
やうしゆし人のうれへをかなへさせたまは、御さんへいあん／わう
し御たんしやうありてかものゑいくわいよ／ひらけ候へ／しなと
さま／に申されたりければ入道さしも日比は」(20才)よこか
みをやられるか事の外にやはらきゐてさて少／将をはめしかへす
へきござんなれそれにつゐてはし／ゆんくはんやすよりほうしかこ
とはいかにとのたまひければそ／れもとうさいにておなしいしよ
に候へはともめしこそ／かへされ候はめ一人もしまに残されん事
中ささいこのの／いんへんたるへしと申されたりければはいや
／やすより／法師かことはさもありなんしゆむくわんはすいふん
入道か／こうしうによりて人と成たるそかししかれともさんそう
し、のたににしやうくわくをかまへて入道かことをのみしゆ／
／に申けると聞えしきくはいなれはしゆんくわんにきて」(20
ウ)は思ひもよらすとの給ひけるおと、さいしやうにあひてた／む
はのせうしやうをはめしかへさるへきにさたまりて候なり／との給
へはさいしやう申されけるはなかされ候し時もの／りもりの御一家
のかたはしにて候しかはよきやうに申さる／へきとのみたのみそん
し候しむすめにて候もの、のり盛／をうち見候たひにはなみたをな
かし候あひたあなちにか／く申候なりおと、子はたれとてもかな
しければさこそおほ／しめされ候らめなりちかのきやうかことをも

すいふむとり申／候しか共きらくをまたてはい所にてはかなくなり
ぬる／うへはちからおよひ候はす少将のことにをきては御心や」
(21才)すくおほしめされ候へしとのたまひければてをあはせて
そよる／こはれけるきかいかしまの流人もすてにめしかへさるへ
／きにさたまりければ入道しやうこくよりはゆるしふみさい／しや
うのもとよりはへつしてよろこひのつかひをそあひ／そへられける
入道のつかひはけんさゑもんのせうもとやす／とそきこえし七月下
しゆんより都をたちてあひかまへて／夜を日につきてきたるへしと
のたまひけれども心にま／かせぬ舟路なれば舟の中にて日かすをお
くりな月二十比／にそさつまかたきかひかしまにはつきにける御
つかひ舟より／あかり是にきよねんなかされたりしたんはの少将殿
ほつ」(21ウ)せう寺のしゆきやう僧都の御房へい判官入道との
な／とおはしますところはいつくそとこゑ／にたつねけ／れとも
二人の人さはいのくまのまふてしてなかりけり／そうつ一人しは
のいほりにおはしけるかき、あへ給はすはし／るともなく又たふ
る、共なくいそき舟のもとにおはして／我こそ去年なかされたりし
しゆむくわんにてあれそ／もなに事そとの給へはみやこより御ゆる
しふみの候／とてくひにか、りたるふくろよりゆるしふみをとりに
し／て奉るそうつなのめならずよろこひていほりに帰り／ひらき
見たまへはしやうこくせんもんのめんしやうにいはいく」(22才)
ちうくわはをんるにめんすはやくきらくのおもひをなすへ／し中宮
御さんの御いのりにひしやうの大しやををこなはる／きかいかしま

の流人なりつねのあそんならひにたいらのやす／より二人しやめん
する所也七月二十日とはか、れたれともし／ゆんくわんと云なも見
えずそうつといふしもなかりけるこ／そかなしけれそうつむねうち
さはきもしうらにもやある／らんとてうらを見たまへともなかりけ
りもしらいしにもや有／らんとてらいしをみ給へともなかりけりさ
る程に人さげかう／せられたりせうしやうのよまれるにも又判官
入道かよみ／けるにも二人をはか、れたれ共三人とは入られすそ
うつ」(22ウ) 給ひけるは御みもおなしつみはいしよもおなしと
ころそ／かしうきもしつみもおなくこそおこなはるへきにしゆ／
むくわん一人のこさるへきか是は平家のおほしめしわすれか又し／
ひつのあやまりかみやうけんこはいかにし給ひつる事そや／とてふ
みをはしよりおくへひろけおくよりはしへまき返しむねに／あてか
ほにあてかなしみ給へとかひそなき二人の人さのものと／へはえんに
つけゆかりにつけたるたよりのふみも有けれ／ともそうつのもとへ
は一さつをつくるものもなし扱こそ我えん／ヤかりのものは一人も
都にあとをと、めすともしられけれ／二人の人さは御よろこひ申の
くまのまうてそせられけるぞ」(23オ) うつ少将のたもとにすか
りか、るうきめを見るもこ大なこ／んと、よしなきむほんのゆへ
そかしあいかまへて人のうへとお／もひ給ふへからすつみおもきも
のにて一人しまにのこさる、／とも都までもと申さはこそかたから
め舟にのせてせめて／九こくの地まてくし給へをれ／のまし
／つる程こそ春は／つはくらめ秋はたのもののかりのおとつれつる

やうにこきや／うの事をもつたへき、つれ今よりのちはいつの世に
かはきく／へきなればかひなきいのちのなからへてうきめを見むよ
／りはなみのしたにもしつまはやとなき給へはせうしやう／さそ思
召され候らんめしかへさる、うれしさもさる事にて」(23ウ) 候
へとも一にんしまにと、まらせ給ひ候いたはしさ申はかりも候は
すされは舟にのせ奉り九国の地まてくし参らせん事は／いとやすき
ことにて候へ共御つかいもかなふましましよしを申／候うへゆるされ
もなきに三人ながら鳥をいてたるなときこ／え候ては中／あしく
候なんなりつねみやこにのほりて人／／にもよきやうに申入道相
国の心をもうか、ひそれよ／り人をむかへに奉るへしたとへ今こそ
のそかれさせ給ひ候共／ついにしやめんなくてしもや候へきあひか
まへてよしなきこ／とも思召た、て都のつてをもまたせたまへな
とやう／／にこしらへ給へともそうつはなをたへしのふへき心ち
も」(24オ) し給はすさる程にしゆんふういてきければ舟をいた
す／に少将のかたみには夜のふすまを残り判官入道のかたみ／には
一部の法花経をと、めけれともそうつはなくさ／む心地もしたまは
す舟にのりてはおりおりてはのりあらまし／ことをせせられる御
つかひ御ゆるされも候にママならんには／いかてかめさるへきとてあら
／かママにをひおろし奉りてやかて／船をは出しけり僧都はなをふね
のともつなにとりつき／給ひてこしになりわきになりちからのをよ
ふ程はひかれて／おはしたれ共たけさへた、すなりしかはつゐに舟
をははなれ／にけりなきさへかへりておさなきもの、は、やめのと

を」(24ウ) したふやうに是くしてゆけやこれのせて行とてをめぐささ／けひ給へ共こき行舟のならひにてあととはしらはかりなりい／く程こきへた、らねともなみたにくれて見えされは沖／のかたをそまねぎけるかのまつらさよひめかもろこし舟をした／ひつ、ひれふしたりけるわかれも是にはすきしとそ見えし／さりともせうしやうのなさけおはする人なればよきやう／に申されむすらんとたのみつ、そのせに身をもなけ／さりし心の程こそうたてけれその夜はあやしのふしとへもか／へりたまはずなみにあしうちあらはれてむなしくそこにてあ／かされける天にあふひてかなしめは松ふくかせそこたへける地」(25オ) にふしてなけくはきしうつなみそおとつれける少将う／らつたひしまつたひしてのほり給ふ程に十月二十日ころには／ひせんの国かせのしやうにそつき給ふさいしやうのもとより／人をくたしてとしのうちは風もはけしければ身をもいたはり春／になりてのほり給へとのたまへはせうしやうことしはかせの庄／にそおはしけるおなしき十一月十二日のとらのこくはかりに都に／は中宮の御さんのけおはしますとて京中六はらひしめき／けりきよ月二十七日よりおり／そのけわたらせ給ひけるかけ／さのとらのこくはかりよりこととりしきらせ給ひけり御さん／所は六はらなりければ法皇も御かうなる関白太政大臣」(25ウ) 以下くきやう殿上のしくわんをんやうのかみをんやうのは／かせやくるんしてんやくのかみ我も／とはせまいる入／道とのも二位とのもむねにてををき人の参りてもの／申時はた、なにともよきやうに／との

みそあきれ給／へりさりともしやうかひかつせんのはにうちいてたらんには／是程にはおくせし物をとそ後にはの給ひける小松との／は何事にもさはき給はぬ人にてはるかに日たけて後御／馬十二ひきひかせつ、ちやくしこんのすけせうしやうこれも／りゑちせんのせうしやうすけもりきんたちの車やりつ、け／させのとやかけにてまいりりやう百御い四十給はすしやき」(26オ) む千里やう百御い四十りやうきんけん七こしひろふたにを／きてしんせられたりまことにきら／しくそみえられける／五条の大なこんくにつなの卿も御馬二ひきまひらせらるうち／おと、の御馬を参らせ給ひけるはかつはきさいのみやの／御せうとなるうへふしの御けいやくあれはことほりなり／くにつなのきやうの御馬参らせやうは心さしのいたりかと／くのあまりかとそかたふきあへりけるたいふはいにしへくわんこう／に一てうの院のきさき上とうもんゐんの御さんの時御たう／との御馬を参らせさせ給ひたりし今度そのれいをけん／せられたりけるとそ承るまた大しやをこなはれける事」(26ウ) は大治二年九月七日たいけんもんゐん御さんのときゆるし／ものをこなはれてちうくわのもの三百よ人くわんゆうせられ／き其れいとそ聞えししんしやはいせいはいしみつをはしめ奉／りて二十二しやくわんへいありしんめをまいらせられる／事は賀茂をはしめ奉りてあきのいつくしまにいたるまで／二十三社とそ聞えける仏寺には東大こうふくゑんりやく／をんしやうをはしめとして四十二か所に御しゆきやうあり御し／ゆきやうもつの御つかひにはみやのさふらひとも

の中／＼くわんのともから承てひやうもんのひた、れにたいけんしたるもの、東の中門よりいて、にしの中門にいる色々の御」(27オ) しゆきやうもつ御けん御いもちつ、きたりしありさまめつ／＼らしかりしけんふつしよのほうけんにおほせて御とうし／＼の七ふつやくしのさうならひに五たいそむのさうをつくり／＼はしめらるにんわ寺の宮しうかくほさつしんわうくしやく経／＼のほうしもちやうりゑんけいほさつしんわうこんかうとう／＼のほうさすのみやかつくわいほつしんわう七ふつやくしのほう／＼の外一しきんりん五たいこくさう五たんのほう六しかり／＼ん八しもんしゆふけんえんめひのほうに至まですへて／＼大ほうひほうのこる所なくしゆせられけりこまけふりは御しよ／＼ちうにみち／＼れいのこゑは雲をひ、かししゆほうのこゑには」(27ウ) 身のけはよたつばかりなり御けんしやには房覚しやううん／＼りやうそうしやうしゆんけう法印かうせんしちせんしやう／＼そうつ已下の御けんしやたちねんらいしよちのほんそん本／＼寺本山の三ほうねんらい日ころのきやうこうをもてをの／＼／＼そうかのくともをあけあせをなかしくろけふりをたて、も／＼みあはれたるけしきいかなる御もの、けなり共おもてをむ／＼くへし共みえさりけりあらはる、所の御もの、けともをはみやう／＼わうのよりましのはくにかけてせめふせ／＼をとりくるふ有さま／＼おそろしなともをろかなり法皇はいまくまへ御幸ならせ給ふ／＼へきにて御しやうしんのつゐてなりければ御きちやうちかく」(28オ) 御さありてせんしゆきやうをうちあけ／＼あそはされけるに／

そさしもをとりくるふ御よりましとも、はくをしつめてちやう／＼もんしける法皇おほせられる御ことはこそかたしけなくは／＼承れたとひいかなる御物のけなりともこのおい法師かかくて候／＼はん程はいかてかたやすくちかつき奉るへきた、しさぬきの／＼あんのをんりやうはかりにやそれもついかうの後は御うらみある／＼へしともおほへすその外のもののみなてうをんによりて人／＼となりたりしものそかしたとひほうしやの心をこそそんせさ／＼らめあにしやうけをなさんやとく／＼まかりしりそき候へとて／＼によんしやうさんしかたからん時にのそみてしやましやしやう」(28ウ) してくしのひかたからんにも心をいたして大ひしゆをせうしゆせは／＼きしんたいさむしてあんらくにしやうせんとうちあけさせた／＼まひて御しゆすさら／＼ともませもはてさせ給はぬに御さん／＼へいあんのみならず王子にてこそおはしましけれしけひらの卿／＼いまた中宮のすけにて御前に候はれけるか五れんのうちよ／＼りつといて、御さんへいあん王子御たんしやうそやとたからかに／＼申されたりければほうわうをはしめまいらせてうちにはをの／＼のしよしゆすはいの御けんしやたちいをむりやうたうの／＼ともからほかには三こうきやう殿上人しよたいふさふらいに／＼至までたうしやうたうかこゑ／＼門くわいまでもあとの、め」(29オ) くこゑしはしつまりもやらざりけり入道とのも二位とのも／＼こゑをあけてなけれける杜いま／＼しけれよるこひなき／＼とは是を申へきにや法皇いまくまのへ御かうならせたまふへ／＼きにてもんせんに御くるまをたてさせ給ひたりければ

いそぎ御／しゆつなりけり入道あまりのめてたさにふしのわた千り
やう／をいさまにほうちう寺とのへしん上せらる法皇これしかるへ
から／すとて御けんしやの中へそ下されける其後小松との御さん所
／へ参らせ給ひてきんせん九十九文をわうしの御まくらにおき／く
わの弓よもきの矢をもて天地四方をい天をもて父と／し地をもて
は、とししやうとくわ天せう大神御心に入かはら」(29ウ) せ給
へ御しゆみやうはあまの川のほしのかすうみはまのいさ／このかす
はうしとうはうさくかよはひをたもたせ給へとい／はい参らせさせ
給ひて御ほそのをきりまいらせさせたまひけり／平大なこんとき
た、の卿の北のかたそつのすけとのそ御ちつけ／に参られけるこの
北のかたと申はこなか山の中なこんあき／時の御むすめ也さきの右
大しやうむねもりのきたの方こそ／まいらせ給ふへかりけれどもさ
んぬる七日にせいきよの間むね／もり大しやう大納言りやうくわん
をし、申てろうきよとそ／聞えける今度しゆつしあらはきやうたい
あひならひていか／はかりかめてたからましむねもりのきやうのろ
うきよほいなかりし」(30オ) 事共なりふるき人さや女はうたち
などの申されけるは／こによいんのわたらせおはしまさんには是程
御かろく／しき御事／のわたらせたまふへきかたいしやう法皇の御
けんしや上こにも／きかす末代にも有へしとおもはずきたいの事
なりとそ／申されける法皇いまくまのに御さんろうのあひた御あん
し／ちの前にかなるものかしたりけん法皇一日の御しやうよ／う
ほこりあるへかんなると云らくしよをこそしたりけれ御さん／所に

まひらせ給ふ人さくわんはく松殿もとふさめうおん／院の大政大臣
もろなかおほいのみかとのさ大臣つねむね月／輪の大臣かねさね小
松の内大臣しけもりとく大寺さ大将し」(30ウ) つてのけん大な
こんさたふさ三てうの大納言さねふさと／大なこんさねくに五条
の大なこんくにつな中のみかとの中／なこんむねいへ花山院の中な
こんかねまさいけの中納言／よりもりへつとうた、ちかあせちすけ
かたとう中納言すけ／なかけん中なこんからいこん中納言さねふな
さゑもんのかみ／ときた、さひやうゑのかみしけのりひやうゑのか
みみつよし／くわうたいこくうのたいふあさかたへいさいしやうの
りもり／さのさいしやうの中将さねいへ右のさいしやうの中将さね
むね／新さいしやうのちうしやうみち、かさ大へんのさいしやう／
なかかたう大へんのさいしやうつねふさ六かくのさいしや」(31
オ) ういへみちほり川のさいしやうよりさたさきやうの大夫なか
のり三位の中将とももり新三位さねきよ已下三十三人う／大へんの
外はちよくいなりふさむのくきやうはさききの右大／将むねもり大み
やの大なこんたかすへのきやうをはしめ奉り／て十三人なりこの人
さはあるひは北のかたせいきよあるひは／御むすめなんさんにより
てなりこの人／は御さんなりて／後ほいにて入道相国のもとへ御
賀申にさんせられけると／そ承る今度の御さんにかたしけなかりし
御事は大し／やうほうわうの御けんしやめてたかりし御さんへいあ
ん王子／御たんしやういうなりしはうちのおと、のふるまひほい」
(31ウ) なかりしはむねもりの卿のろうきよおもはずなりしは入

道／相国のよろこひなき又あやしかりし御事は王子たん／しやうの時こしきを御てんのむねより南へおとすことのある／をひめ宮たんしやうのやうに北へむけてころはかし人々にあ／れはいかにとよまれてからけなをして南へおとしたりけ／るそきたいのあやまりとは申ける又おかしかりしことは／かもんのかみときはると申おんやうし千度の御はらへの／やくにめされて参りけるかしよしうなどもほくせうにて／まいるほとに人のおほきことたうまちくいのことしひさを／よこたふるにおよはねは人のまいり候あけられ候へ／くとて」(32才) 参る程に右のくつをふみぬかれうつふしてとらん／ととし／けるにかうふりをさへつきおとされてさはかりのはれの／さしきへそくたいた、しくしたるらうしやのもと、りはなち／にてゆるきはてたりければわかききやうてん上人はかゝる／おりふしともいはず皆はらのわたをそきられるあまりにたえか／ねたる人はかんしよへにけ出てそわらはれけるをんやう／しはへんはいとてあしをたにもあらくふまぬとこそ申／にそのときはなにもおもはざりりけれ共のちにこそおもひ／あはする事共おほかりけれ去程に御けんしやの人々にけん／しやうをこなはれけり仁和寺の宮はとうししゆさうならひ」(32ウ) に五七日御しゆほう大けんのほうくはんちやうのこうきやう／あるへしとて御てしゑんりやうほうけんをほうひんになさる／さすのみやは二ほんならひにきつしやを申させ給ひける／を御むろしきりにさ、へ申させ給ひければ御てしかくせいそう／つを法印にきよせらる代さのよきささきの御さんお

ほ／しといへともきさきはらの王子のいきさせ給ふ事せんれ／いもまれ也白川院のきさきは京こくの大多の、御むすめ也／しゆ上きさきはらにわうしあらまほしくおほしめされければ／そのころ三井寺にうけんと聞えししつさうはうのあしや／りらいかうをめしてなんちささきはらにわうしいのりいたし」(33才) て参らせよ御くわんしやうしゆせはけんしやうはこうによるへ／しとおほせければかしまりて承り三井寺に帰りてたんを／たて百日かんたんをくたきいのり奉るきささき程なく御／くわいにんありて承保元年七月九日おほしめすまゝに御さん／へいあんわうし御たんしやうありしゆ上らいかうをめしてけんしやう／はいかにと仰ければ三井寺にかいたんこんりう仕るへきよし／を申主上こはいかに一かいのそうしやうをものそみ申さんす／るかとおほしめしたればそんくわいの申しやうかななんちかしよ／もふたつせは山門おほきにいきとをりて世上をたしかるまし／われ王子をまうけてわうそをつかしめんとおほしめすも」(33ウ) かいといふいを思ふゆへなりなんちしよもうたつすといふとも／りやうもんかつせんしてんたいの仏法こと／くくにめつし／なんす思ひもよらすとおほせければらいかう大にいられるけ／しきにて三井寺に帰り持仏たうにとちこもりひとへにひ／しに、せんとそしけるその比かうそつまさふさのきやうの／いまたみまさかのかみにて候けるをめされてなんちからいかう／としたむのけいやくあんなりゆきむかひてこしらへてみよか／しとおほせければまさふさのきやう承て三井寺へゆき／むかひちよくちやうのおも

むきいひふくめんとしけれ共とみに／もいてあはずや、ありてもての外にふすほりたるけうちやう」(34才)のうちよりおそろしけなるこゑして天子にたわふれのこと／はなしりんけんあせのことしとこそうけたまはれ申むねを／御せういんなからんにおきてはわかいのり出したるわうしなれば／とり奉りてまたうへこそはゆかんとてその、ちは物を申／にをよはすきやうはうのあそむきさんしてこのよしをそう／し申されければきん中おとろかせ給ふほとこそ有けれその／後王子らいかうかりやうとており／なやませ給ふけれ有／ときはみつかめもちたるらう僧わうしの御そはちかくまいり／ある時はれいもちたる僧わうしの御まくらの上にちかう参る／とおほしきときは御なふいと、おもらせ給ひしか承暦元年(34ウ)八月六日御年四さいにてつゐにかくれさせ給ひけりあつふんのし／むわうの御事也しゆ上なのめならず御なけきありてその比／さい京のさすりやうしん大そうしやうのいまたゑんゆう房の／そうつといはれけるをめされたま／まうけ参らせさせ給ひ／たる王子うしなひまいらせたる事の御なけきおほせあり／ければなに事も御くわんは山門よりこそしやうしゆする御／ことにて候へされは九てうのいうせうしやうもしえそうしや／うとしたんのけいやく候てこそれいせんのゐんの御さんも／へいあんにおはしませ山王の御ゐくわう今にはしめぬことな／りとて百日かんたんをくたきていのり奉るきさき又御くわい」(35才)にんありて承暦三年十一月廿八日御たむしやうありけり／八さいより御くらいつかせ給ひしか御宇二

十一年けんわうせいしゆ／のほまれものめならずわたらせ給ひしか是もらいかうかれ／うとており／なやませ給ひしか嘉承二年七月十九日御年／二十九にてつゐにほうきよならせ給ふほり川のてんわうの御／ことは是なりされは昔もをんりやうはおそろしきことなるに今／のしゆんくわんをもともにめしこそかへさるへけれどそ皆人申あ／はれける大しやうの入道との御むすめ中宮にてわたらせ給ひし／かはあはれきさきはらに王子のいきさせ給へかしとわれくわい／そうといはれて天下をわかま、にせんと思はれければ日吉の」(35ウ)やしろへ百日まうて申されけれどもそのしるしもなかりけりさ／らは我いつくしまへ申さんとて三ねん月まうてなとして申さ／れたりければにやおほしめすさまにわうし御たんしやう有そも／／いつくしまのやしろをしんしはしめられけることをいかに／と申にきよもりあきのかみたりし時とはのゐんの御くわん／かうやの大たうこんりうすへしとてあきすわう長門三か／国を給て六年に大たうこんりうししゆさう事をへて／おくのゐんに参りねんしゆしておはしけるにひたひにはな／みをた、みまゆにはしもたれ二またなるかせつえにすか／りたる老僧一人出き給てきよもりに御たいめんあり大たう」(36才)たうこんりうことをえたり天下に又も候ましき大せんこんなり／さては越前のけいの社あきのいつくしまのやしろりやうかいの／すいしやくにておはします中にもこんかうかいのすいしやくけいの／やしろはめてたくさかへておはしますたいさうかいのすいしやくい／つくしまのやしろのはゑしてなきかこと

くに候をこれおも／申てしゆさうせられ候へかしらんととりて御
へんのくわんかい／天下にならふ人もあるましとてかへられるに
たち給ひて／のちもいきやうくんしてつきさりけりあやしみて人を
つ／けて見せられければ一ちやうはかりは見えさせ給ひけるかそ／
の後はかきけすやうにそうせられけるきよもりあな」(36ウ)た
うとやまことの大師にておしましけるにこそとてたんの上／にかへ
りきよもしやはやせかいをものいて一せんとてりやう／かいのまん
たらをすみゑにうつされけるかとうまんたらを／はしやうめうほう
いと申ゑしにうつさせられけりさいまん／たらをはきよもりか、
んとてしひつにか、れるるか八ようの中／そのほうくわんをはか
うへよりちをいたしてか、れるとそ／承るきよもりやかてみやこ
にかへりあんの御所にまいり此／よしを申されければ又あきすわう
なかと三か国のにんをのへ／られけりきよもり承て鳥ゑをたてそへ
やしろ／をつくり／あらため百十八けんのくわいらうにいたるま
て事ゆへなくしゆ」(37オ)さうして後みやうしんの御前にまい
り給ひてかくらをまい／らせさせ給ひけるにみやうしんないしにう
つらせおはし／まして御たくせんありなんちしれはやこうほうをも
ていはせ／し事をはた、しあくきやうあらはしそんまてはかなふま
し／とてみやうしんあからせ給ひけりふしきなりし事共なり／

せうしやう都かへりの事

治承三年正月十日ころにたんはの少将なりつねひせんのかせの／し
やうをたちて都へとはいそかれけれどもよかん猶はけ／しくして海

上もいたくあれければ二十日ころにひせんのごゑ／まにつきたまふ
それより地へわたりありきのへつしよに」(37ウ) たつね入てこ
大なこんのすみ給ひし所をみ給ふにあやし／しつか家なれはむく
らしけりてかきをとちまつの葉つも／りてのきをうつしはひきむす
ふいへのうち木のはかたしく／やとなれやあけて見給へはふるきし
やうしたけのはしら／にかきをき給へるふてのすさみを見給へはな
みたませき／あへ給はす安元三年七月二十日出家同じき廿五日のふ
としけ／かうとそか、れたるさてこそけんさへもんのせうかまいり
たり／けるともしれぬれそはなるかへには三ぞんらいかうたより／
あり九ほんわうしやううたかひなしともか、れたりさすかこん／く
しやうとのそみもおはしけるにやとかきりなきな」(38オ)け
きの中にもいさ、かたのもしくそおもはれるあはれ人の／後の世
まてのかたみにはしゆせきにすきたる物はなし主／はおはせねとも
はかなきあとはうせさりけりかきおき給は／すはいかてかこれをし
るへきとてやすより入道と二人よみ／てはなきなきてはよみそせら
れるそれよりはかを尋／奉る東へちやうゆきて松の一むら有中
にかい／しく／たんをつきたることもなしそとは一本も見えさり
けるか／つちのすこしたかき所に少将袖かきあはせいきたる人に／
申やうにかやうにこの世にもおはしまさすとをきまもりと／ならせ
給ひぬる御事をはしまにてかすかに承て候しか」(38ウ) 共に
まかせぬうきなれはいそきてまいる事も候す／なりつね都を出はる
／とやへのしほちをしの／きつ、か、るうき鳥になかされて露の

命のきえ／やらてめしかへさるゝうれしさもさる事にては候へとも
／この世にかわらてわたらせ給ふを見参らせても候／は、こそ命の
いきたるかひもあらめこれまでこそ／いそかれつれ今より後はいそ
くへしともおほえすと／かきくときてそなかれけるまことにそんなし
やうの時／ならばたかひにいかはかりかはうれしくもあはれにも／
おほさるへきしやうをへたつるならひ程くちおしかり」(39オ)
ける事はなしこけの下にはたれかはこたふへきたゝ／嵐にさはく松
のひゝきはかりなりその夜はやすより／入道と二人よもすからはか
のまはりをきやうたうして念仏／申明ければはかにたんつきくきぬ
きしまはさせはかのみ／へにかりやうちてそうともしやうして七日
七夜ふたん念／仏申させ我身はきやうをそかゝれけりけちくわんの
日は／大なるそとはを立くわこしやうりやうしゆつりしやうしせ／
う大ほたひと書給ひねんかう月日のしたにはかうしな／りつねとそ
かゝれたる三世十方のふつたのしやうしゆもあはれ／みたまひほう
こんゆうれいもいかにうれしと思ひはれけんとし去」(39ウ)年
きたれ共わすれかたきはふいくの昔のをん夢のこと／くまほろしの
ことくつきかたきはれんほのいまのなみた／なりしつ山かつの心な
きものまでもこれを見てあはれの／のすへ山のおくにも子はもつへ
かりけるものかなとて袖を／しほらぬはなかりけり少将はかの前に
立よりいましはらくも／候て念仏のこうをもつむへく候えとも都に
まつ人もおほつ／かなく候はん又こそ参り候はめとまうしやにいと
ま申て泣々／そこをそたゝれける草のかけにてもなこりおしくやお

／もはれけん三月十六日に少将鳥羽にそつきたまふこ大納／言のさ
んさうすはまとのとて鳥羽に有すみあらして」(40オ)としへに
ければついちはあれともおほひもなくもんはあれとも／とひらなし
にはに立入見給へはしんせきたえてこけふかく池の／ほとりをみま
はせはあきの山の春風にしら波しきりにお／りかけてしえんは、を
うせうゑうすけうせし人のこひしさに／つきせぬものは泪なりやか
すはあれともらんもんやふれ／てしとみかうしもたえてなしこゝは
大なこんのすみ給ひし／所こゝをこそいて給ひしかかしこをはかく
社いり給ひしかこのう／ゑ木をはみつからこそうへ給ひたりしかな
とちゝの事をこと／にふれて恋ひしのひ給ひけるこそことほりなれ
やよいなかの六／日なれば花はいまたなこりありやうはいたうりの
こすへこそ」(40ウ) おりしりかほなる色にてくれ行春の形見な
れ昔のあるしわな／けれ共春をわすれぬ花なれや少将花のもとに立
より

た／うりものいはねははるいくはくくれぬるえんかあとなし
／むかしたれかすみし／
ふるさとの花の物いふ世なりせはいかにむかしのことを／とは
まし
とこのふるきしいかを詠せられけるにてやすよ／り入道もそゝろに
あはれにおもひて／

あるしをは花のかすみにかくへつゝ、こゝろのまゝに／匂ふむめ
かえ

なとなかめつ、袖をそしほりけるくる、ほ／と、は思はれけれども
せめてなこりのおしければ夜ふくるまで」(41オ)こそおはしけ
れあれたるやとのならひにてふるきの板／間よりも月かけそ
おほるなるけいろうの山あけなん／とすれとも家ちはなをもいそか
れすさてしも有へきに／あらねは涙をおさへて出られけりめん
／乗物よういし／たれはをの／のりて出られけるにやすより入
道少将のなこ／りをおしみ奉りてひとつ車にのり七条河原にて行わ
かれけ／るかたかひに名残をおしみてしはしはなれもやらさり／
けりまことにおしかるへし旅人の一むらさめのすき行とき／一木の
かけに立やとりてゆきわかる、たにもわかればしたふ／ならひ也花
の下のはん日のかく月のまへの一夜のとも名残は」(41ウ)おし
きものそかしいはんやこの人まは三とせかあひたうきしま／なみの
上舟の中のともしなれは一こうしよかんのちきりにて／前世のはうえ
んあさからすやおもはれけんやすより入道は東／山さうりん寺へと
てゆき御れは少将六はら入給ふ少将の母上／りやうせんへんにおは
しけるか昨日よりさいしやうのもとにお／はしてまたれけりせうし
やうの入給ふをた、一目見給ひて命／たにあればとはかりにてひき
かつきてそなかけけるさいし／やうのなんによ皆よろこひのなみた
おそなかしけるいはん／やきたのかためとの六条か心の中おしは
かられてあはれな／り六てうはこの三とせか間つきせぬもの思ひに
やそのく」(42オ)ろかみしろくなり北のかたのさしもはなやか
なりし御すかたも／やせおとろへその人共見え給はずなされたま

ひしとき三さいに／なり給ひけるわか君ことしは五さいになられけ
るかいとおとなしく／なりてかみゆふはかりにて見えられけるか又
三つはかりなるを／さなき人の北のかたのかたはらにおはしけるを
たれそとのたまへは／六てうこれこそとはかり申て袖をかほにおし
あてければせう／しやうまことやそのとき心くるしかりしを見す
て、わりなくおも／ひしにへちの事なくむまれそたちたることのお
しきさよと／てそなかけけるかくて其後二度君につかへさいしやう
の中／将まであかりけるとそ承るはんくわん入道東山さうりん」
(42ウ)寺のあんしちにおちつきてまつと、めをきしは、の行／
ゑをたつねければ人こたへて申けるはその御事はこそ春ま／ては
これに御わた候りしか其後一てうのきたむらさき野に／うつりわたら
せ給ひぬしまより御かへりあるへきよしきこ／しめしてなのめなら
す御よろこひ候しかすきにしきさらき／のすへより風の御心地とや
らん承り候しかつるにはかなくなら／せ給ひてけふは五日になると
そ申けるやすより入道このよしを／きキて我ひせんのかせのしやう
ひせんのありきのへつしよに日かす／をたにもをくらすはなとか今
一度見奉らざるへきさためな／き世のならひなりしやうはこれ夢
のことしたれか百年」(43オ)のよはひをこせん万事はみなむな
しいかてかしやうちうのおも／ひをなさんとくわんしつ、のきはの
月のおほるなるを見て／よみたりけるとかや／

ふるさとののきのいた間はにこけむしておもひしほとは／もらぬ
月かな

とくちすさみつ、やかてそこをろうきよして／うかりし昔をおもひ
すてほうふつしうと申物かたりをつくり／けるとそうけたまはる／

ありわうきかひかしまへたつねくたる事

さる程にほつせう寺(マ)のきやうしゆんくわん僧都のわらはにあり／わ
うかめわうとて二人候ひけるかともにしうの事をかなしみ(43
ウ)けるかかめわうはそのおもひのつもりにや程なくうせにけりあ
／りわうはあはたくちの辺にしひて候ひしか二人の人まは都に／
婦りのほり給へとも我しうのそうつは一人鳥にと、まり給ふと／か
ねてよりき、つれとももしやと鳥羽へんに行むかひて見／ければけ
にも二人のひとくはをはすれと僧都は見え給は／す人にとへは鳥
にと、まり給へりとそ申けるわらはやすよ／り入道かそはちかくた
ちよりてとひければやすより入道しまに／てありし事共をありの
ま、に語りけりわらはいと、せんかたな／くかなしくてなみたもさ
らにせきあへすわらは思ひけるは我／都にておもはんよりもかなへ
ぬまでもしまにたつね参りて(44オ)かはらぬ御ありさまをも
見奉らはやとおもひ又この世になき人／ともなり給ひた、は御こつ
をもとり奉りたつとき所におさめ／て御ほたひをとふらひ奉らはや
と思ひければ人にはいはずして／心ひとつに出立ける僧都の御むす
めならのおはのもとにお／はしければわらはならにくたりて申ける
は二人のひとくは都／へのほらせ給ひて候へともかみの一人しま
にと、まらせおはしまして／候かあまりに御心もとなくそんし候か
なはぬまでも尋参／らんとこそそんし候へ御ふみや候へきと申けれ

はやかてふみ／をかきてそたひたりけるわらは是を給はつていきな
からめい／とおもむく心地しておもひければよもゆるさしとてお
や(44ウ)にもきやうたいにもしらせすしのひつ、みやこをい
てさつまか／たへそおもむきけるもろこし舟のともつなは卯月さ月
に／とくなればなつ衣たつをおそしと待かねてやよひのすへに／み
やこをいてはる／くと八へのしほちをしのきつ、さつ／地マにおちつ
きてそれよりひんせんを尋しまへわたらんとしけ／るを人あやしみ
ていしやうをはきとりなとしけれともわらは／すこしもこうくわひ
せずひめきみの御ふみはかりを人にしらせし／ともとゆいの中には
入たりけるとかくしてあき人の舟に／ひんせんしてしまへわたりて
見けるかみやこにてつたへき、／しはことのかすならす田もなくは
たけもなく村なく里も(45オ)なしたま／あるものもこのと
の人ににさりけりわらはい／るもの、そはちかく立よりて是に一
とせ三人なかされたりし／か二人はめしかへされぬ一人しまにと、
まらせ給ひたるほつしやう／寺のしゆきやうそうつの御(マ)のゆくゑ
しり給ひたるととひ／けれとも僧都もしゆきやうともしりたらは
こそ返事／もせめしらすとてかしらをふりてそのきにけるその中に
す／こし心へたるもの、申けるはいさとよさる人はこのへんに／あ
りしかこのちかきほとよりはいつちへ行ぬるやらんゆきか／たもし
らすとそ申けるわらはさてはこの世になき人にこそと／おもひけれ
はいと、せんかたなくかなしくてつきせぬものは(45ウ)なみ
た也もし山のかたにもやおはすらんとていまたしらぬしん／さんへ

こそ尋入れ谷よりみねにのほりみねより谷へくたれとも／せいらん
たもとをほらひて音する人もさらになし白雲あと／をうつつみてゆ
き、のみちもさたかならすなをもはまのかたの／おほつかなさにあ
るあしたはまのかたへと行ほとになきさの／かたよりかけろふなど
のこくとくによせおとろへたるもの、もとは／ほうしなりけるとおほ
えてかみはうらさまにおひのほりよ／ろつのもくつをとりつきてむ
はらをいたけるかことしつき／めあらはれかはゆたひ身にきたるも
のはけんふのわきも見え／ぬかかたてにはあらめいそのものをもち
かたてにはなましきうを」(46才)をもちあゆむ共なくた、一と
ころよろ／として出きたる／わらはおもひけるは我みやこにて
おほくのこつしきをもみつれ／ともかやうのものをはいまたみす地
こくかきちくしやうしゆら／三あく四しゆはしんさん大かいのほと
りにありとほとけのとき／給ふなれはしらす我いきなからかきたう
にきたれけるやらん／とおもひてやう／あゆみ行ほとにさすか人
のすかたに見な／してやあもの申さんといへはいきのしたにて何事
そとこた／うふしきやな是こそ我かいふ事をもき、しりたるよとお
／もひてこれに一とせ三人なかされ給ひしなかに一人しまにと、／
まり給へるほつせう寺のしゆきやう僧都の御名のゆくゑやし」(46
ウ)り給ひたるとひければわらはこそ見わすれたりけれとも僧／
都はなしかはたとるへき身のありさまはつかしけれとも恋し／き
かたのものを二たひ見るかうれしさに思ひもあへすいかにあり／わ
うわれこそそよとのたまひて手にもつところのあらめいその／もの

をなけすていさこのうへにたふれふしてやかてきえ入／給ひけりわ
らはそうつをか、へ奉りてみやこよりはる／と尋／まいりたるか
ひもなくいかてかやうにうきめを見せ給ふぞ／やたとひちやうこ
うにておはしますとも今一度かはらぬ御／こゑをきかせ給へとやう
／／かなしみければそうつさすか／ちやうこうならねは又いきか
へり給へりわらは参りて候あり」(47才)わうまいりて候と申け
れはそうつ我このしまになかされての／ちは恋しきもの共をはゆめ
に見る時もありされともこのちか／くなりてはみもよりはり心もつき
はて、ゆめうつ、をも思／わかすされはなんしかた、いまきたりた
るをもた、ゆめにの／みこそ思へもしこの事のゆめならばさめての
後をいかにせん／わらは申けるはさな思召れ候これはうつ、にて
候也され／はこの御ありさまにても御命いままでのひさせたまひけ
る事／のふしきさよと申ければそうつの給ひけるはされはこそ／二
人の人々のありし程はたんはの少将のしゆうと平さいしや／うのし
よりやうひせんのかせのしやうよりいしよくをつねにを」(47ウ)
くりし程にそのはく、みにてありしか二人の人々にすてら／れて後
やかていかにもなるへかりし身の少将のあひかまへて／よしなき事
ともおもひた、て都のつてをもまてかしなとやう／／／にこしらへ
しをもしやとおろかにたのみつ、このしまには／人のしよくしたえ
てなき所なれば山に入いくらもあるい／わうと云ものをとりてあき
人にあひものにかへてすき／しかそれもこの程は身のちからもつき
はて、さやうのわ／さもかなはぬなよりかやうに日ののとかなる時は

なきさ／にいてたま／こえたるつり人にあひひさをかゝめてをあ
わ／せなましきうほゝこいかひをひろひいくらもうちよせられた」
(48才)るあらめいそものをとりて露の命をいそのこけちにか
たる／なりさらてはうき世をわたるよすかをもちかにしつるとか思
ふ／これにてなに事をもいふへけれ共いさ我いほりへとの給ひ／け
れはこの御ありさまにても我御すみかとてもち給ひたることの／ふ
しきさよとおもひてやう／あゆみ行そうつあゆみもやり／給はね
はわらはかたにひきかけ奉りておしへにつきて行／程にある山のふ
もとに二人の人さのおはせしときつくりをかれ／たりけるあしやの
まつのをたをはしらしたり竹をけた／うつはりにわたし松のおち
葉あしのかれはをうへにもした／にもひしと取かけたりこれこそわ
かもとよとて立入てふ」(48ウ)されたりけれ共雨風たまるへし
とも見えさりわらはこの人／みやこにおはせしときはほつせう寺の
しんしきにて／八十余かしよのしやうえんをつかさとり給ひしかは
むね／かとひらかとのうちにしておほくのしよしうけんそくにい／
ねうかつかうせられてこそおはせしに今はかゝるうきめに／あはれ
けるこそふしきなれこうにさま／有しゆんしやう／しゆんけんし
ゆんここうといへりこの人／この間もちる給ふ／ところのさいほう
ひとへに大からんの寺物仏物にあらずと云／事なしされはしんせん
さんのことほりにこたへてそのこ／うをこんしやうにかんし給へる
かとおほえたり」(49才)

しゆんくわんそうつたかひの事／

僧都うつゝなりけるとおもひさためての給ひけるは／いかに二人の
ひと／のむかへの時も一さつをこつくるものも／なかりしそ又
なんちかきたれ共なにもおとつれのなきは人／／にこのよしいは
さりけるかとの給へはわらは申けるはさ候／きみ西八条とのの御出
の後やかてつゐふくのくわん人ともま／いりむかひ候てん／の
御えんしやたちこゝかしこにてみな／うしなはれさせたまひ候ぬ北
の御かたはかりこそわかきみ姫君／かくし参らせ給はんとてくらま
にしのはせおはしまして候しかは／つねにまいり候しにわかきみは
いかにありわうよちゝのわたら」(49ウ)せ給ふなるきかひかし
まとかやに我くしてゆけとてむつから／せおはしまし候しかすきに
し春せけんにはわらはへのし候なるも／かさと申事をせさせおはしま
し候しか二月九日につるにか／くれさせ給ひぬきたの御かたは日比
の御おもひに又この事さ／へうちそひてなめならす御なけき候し
かそれもおなし／き三月二日つるにうせさせ給ひ候ぬ今はひめ君は
かり／こそならに御わたり候へその御文は候とてもとゆひの中／よ
りとり出して奉る僧都ひらきて見給へはけにとわらはか／申にたか
はすかゝれたり若君にもくれ候ぬまたは、うへに／さへはなれ参
らせてたうしはならのをは御前の御もとに」(50才)むかへられ
てこそ候へさて御わたりをこそたかき山ふかき海／もたのみ参ら
せ候へなどや二人のひと／はかへりのほらせ／給ふに一人しまし
はとゝまらせ給ひ候そあはれ女子程かな／しかりけるものはあらし
おのこゝならはこのわらはにくせら／れてなとかまひらては候へき

このわらはを御ともにていそ／きのほらせおはしませとそか、れたる僧都是をかほにをしあ／て、しはらくはものたまはずや、ありてのたまひけるは／みしよりもいとよくかきたりことはつ、きもおとなしけれ／共た、しはかなき事をもかきたるものかなこのわらは／をともにてのほれなとかきたることのあはれさよ心にまかせた」(50ウ)る我か身ならは何しに一人のこりと、まりてかくうき／めをみると思ふへきひめはことし十二か三かになるとこそ／おほゆれかくいふかひなくてはいかてかひとにも見ゆへき／と我身のうへをはさしおきて心くるしけにの給ふそあはれなる／いかにこのふみの所々文字きえのしたるはとの給へはさそ御わた／り候らんあの御ふみあそはされ候し時一筆あそはしては打ふ／しむつからせおはしまし候しか御なみたのか、らせ給ひたるにて／そ候らんと申ければ僧都もなみたにむせはれけり僧都／の給ひけるは我この島になかされて後は春秋をしりあ／つきをもちて夏とさためさむきもちて冬としりひや」(51オ)く月こく月のかはり行をもちて一月三十日をわきまふし／つかにゆひをおりてかそふれはこのしまにてはや三とせに／なるとこそおもへむさんや我西八条へいてし時我もゆかん／と云しをやかて帰らんするそとてと、めおきたりし事／のた、今のやうにおほゆるそやそのときわかか七にな／りしかはことしは九にこそならんすれおやとなり子とな／りふうふのちきりをむすふもみな是世一の事なら／すされはそれらかさやうなりけるはなとかゆめにても／見えさりけん人のおやの心はやみにあらね共子を

思ふみ／ちにまよふとも今こそ思ひしられたれた、しそれらを見ん」(51ウ)と思ふ心にこそ命もおしく今一度都へのほらはやともお／もひつれいまはた、ひめか事はかり也それも人の身なれば／ともかくもすくさんすらんす、りすみ筆もなければ返／事にもおやはぬなり島のありさま我か事をはなんちか／みるやうにかたるへし又人こそおほかりしになんしか是ま／てたつねきたりたる心さしのほとこそしんひやうなれい／つまでなからへてなんちにうきめをもみすへきとてを／のつからのしよくしをもと、めて一かうこせほたひの事を／のみのり給ひければわらはしまにわたりて三十日／と申に僧都ねふれるかことくにてつゐにおわり給ふわ」(52オ)らはあとにふし枕にたふれなきかなしみけれともかいそな／きおなしくはこせの御とも仕りたくそんし候へともひめき／みにもこのよしかくと申候ひわらはともに御ほたいをこそ／とふらひまひらせ候はめと心のゆく／なきあきて松の／おち葉あしのかれはをとりおほひもしほのけふりとた／きあけてけふりきゆればこつをひろひくひにかけあき／人の舟にひんせんして九こくの地にこそつきにけれそ／れより都にのほりならにたりて僧都のこつひめ／きみにまいらせけり姫君僧都のこつをむねにあて／かほにあてしはしきえ入給ひけりわらは申けるはず」(52ウ)すりすみ筆も候はねは思召さる、御事はむなしく御む／ねのあひたにと、まらせおはしまし候ぬしまのありさま我こ／とをはなんしか見るやうにかたり申せとこそ仰候ひしか／いまはくわうこうををくるともこんしやうにて見え

まいら／せさせたまひ候はんことも候まし御ほたひをこそとふらひ
ま／いらせさせ給ひ候はめと申ければ姫君ふしまろひてそなかれ／
ける年十三にてさまをかへならの法花寺にをこなひ／てふものこせ
をそののられるわらはもそうつのゆいこつ／くひにかけ高野にの
ほりおくのあんにおさめれんけ谷に／て法師になり山まてら／し
ゆきやうしてしうの後世」(53才)をそとふらひけるありわうか
心の中こそやさしけれかや／うに人のおもひのつもりけるへひけの
すゑこそおそろしけれ／

つしかせの事

おなしき五月十二日のむまのこくはかりに京中にはつし風お／ひ
た、しく吹て屋おほくてんたうすむねかとひらかと吹／ぬき／四
五ちやう十町になけすてなとしけるうへはけ／たなけしはしらなと
はこくうにあかりひわたふきいたのたく／ひは冬の木のほの風にみ
たる、かことし人もおほく命を／うしなひきうは六ちくのたくひか
すをつくしうちこそさる是／た、ことにあらずとてしんきくわんに
て御うらありてんかのさは」(53ウ)きとうらなひ申た、してう
かの御大事にはあらず臣つ、／しみとそ申ことにはろくおもき大臣
百日のうちつ、しみ／へつしてはひやうかくさうそくしてきらんゑ
きれいのつ、／しみとそしんきくわんをんやうれうともにうらなひ
申ける／

小松殿くまのさんけいの事

小松のない大しんしけもりはかやうの事共をき、給ひてよ／ろつ心

ほそくやおもはれけん其比やかてくまのさんけいとそ／きこえける
本宮せうしやうてんの御前にて夜もすからけい／ひやくせられける
か谷入道しやうこくのていを見るにあくきや／くふたうにしてや、
ともすればきみをなやまし奉る」(54才)しけもりちやうしとし
てしきりにいさめをいたすいへとも／身ふせうなるにやかれもて
ふくいせすそのうんめひをは／かるにいちこのゑひくわなをあや
うししやうれむそくししんを／あらはしなをあけん事かたししけも
りこの時にいたりて世／にふちんせん事あへてりやうしんかうしの
はうにあらすしか／しなをのかれ身をしりそけてこんしやうのめい
はうをなけす／てひとへにらいせのほたひをもとめんにはた、しほ
んふはくちの／せひにまよひつるかゆへに心さしをほしいま、にせ
すねかかは／こんけんこんかうとうししそんはんゑいたえずして
つかへて／てうていにましはるへくは入道のあくしんをやはらけて
天」(54ウ)下のあんせんをえしめ給へもし又ゑいよう一こをか
きりてこう／こんはちにをよふへくはまつしけもりかうんめいを
つ、めて／らいせのくけんをたすけ給へりやうかのくくわんひとへ
にみやうし／よをあふくとかんだむをくたきていのり申されけれと
も人／是をしり奉らす夜はんはかりにおと、の御身よりとうろう／
のひかりのやうなるもの、いて、はときえけるをけんしよ／のもの
とも見奉りけれともをそれて是を申さす御けかふ／のときいはた川
をわたられけるにちやくしこんのすけ少／將これもりそのこそ都に
はしめていてきたりけるこんの／かたひらをき給ひたりしか一村雨

にぬれてしやうえにう」(55才) つりたりけるひとへにいろのこ
としちくこのかみさたよしか是／を見とかめ奉りてあのきんたちの
めされて候御しやうをめし／かへらるへく候やらんと申たりけれ
はおと、しけもりしよ／くわんはやくしやうしゆしぬとおもはれけ
れはあへてそのしやう／ゑあらたむへからすとていはた川よりへつ
してよろこひのほう／へいをほんくうへそたてられける人あやしみ
奉りけれとも其／心をえすされはにや此きんたち程なくすみそめの
色にな／られけるこそふしきなれ御けかうの後いくはく日かすもへ
す／しておと、やまひつかれければこんけんすてに御なふしう／あ
るにこそとてれうちをもくわへられすきたうをもいたされ」(55
ウ) す入道相国ふくはらにおはしけるかいそき上らしく給ひてゑつ
／ちうのせんしもりとしをししやにて小松殿への給ひをくら／れけ
るは御しよらうの事日にそへておもきよし承るの間／そうてうよ
りすぐれたるめいほんでうにわたりたるよしを聞／おりふし是を
さわいとすかれをめししやうしていれうをくわ／へしめ給へとなり
おと、さしもくるしけにおはしけるかたす／けおこされもりとしを
ちかくめしての給ひけるはまついれう／の事かしこまで承候ぬと申
へしなんちもきけゑんきのせ／いたいはさはかりのけんわうにて渡
らせ給ひしか共いこくのさ／う人をわうしやうのうちへ入させ給ひ
たりしをはけんわうの御あや」(56才) まり我朝のはしとこそ申
つたへたれいはんやしけもりか身とし／ていこくのいしを都の中へ
いれん事てうかにつけていかてか／そのは、かりあらざるへきかん

のかうそは三しやくのつるきを／ひさけてあなから天下をおさめ給
ひしか共くわいなんけいほを／さ、けし時りうしにあたりやすすを
かうふるきさきりよ／大こうりやういをむかへて是を見せしむるに
いのいはくこのきす／ちしつへした、し五十こんのかねを給はつて
ちせんと申かうそ／のたまはく我むかしまりのつよかりし時はお
ほくのやにあたり／しか共しする事なしいまはうんすてにつきぬ命
はすなはち／天にありへんしやくといふともなにのゑきかあらん然
はすな」(56ウ) はちかねをおしむにたりとて五十こんのかね
をいしに給てつゐに／ちせられすせんけんみ、にありいまもてかん
しんとすしけもり／いやしくもきうけいにれつし三こうにのほるそ
のうんめいをは／かるにもて天心にありなんそ天しんをさつせずし
てをろかに／いれうをいたはしうせんやしよらうもしちやうこうな
らはい／れうをくはふともゑきながらんか又ひたうたらはれうちを
くわへ／すともたすかる事をうへしちやうこうのやまひちするにな
を／たえざるむねあきらけしかのきはかいしゆつをよはすして大か
／くせせんめつとをはつたいかのほとりにとなへ給ひき是ひとへ／
にちやうこうのやまひをちするにいやさ、る事をしめさん」(57
オ) かためなりちするはふつたいなりれうするはきはなりし／かる
にしもりか身ふつたいにあらずめいまたきはにおよふへから／す
たとひ四ふのしよをか、みてはくれうにちやうすとといふとも／いか
てかうたいのゑしんをくれうせんとひ五きやうのせつを／つまひ
らかにしてしゆちやうをはいやすと云ともあにせんせの／こうひや

うをちせんや若いしゆつによりてそんめいせはほん朝のいたうなきにたりいしゆつ又かうけんなくはたいめんな／のせんかあらんなかんつくにほんてうていしんのけそうをもて／いてうふゆうのらいかくにまみえんことかつは国のはちかつは／みちのれうちなりたとひしけもりか命ははうすといふ共」(57ウ) いかてか国のはちを思ふ心をそんせざるへきしよせんこのよ／しを申へしとの給ひければもりとしかへり参りてこのよしを／申けり入道これ程に国のはちをおもふ大臣はいまたきかす国／にさうたうせぬしんかにてこのたひさためてうせなんすこはい／か、はせんとそなけかれけるおなしき七月廿日おと、出家し／給ひてほうみやうしやうれんとそなのり給ひける同じき八／月一日おと、つゐにこうし給ひけり御とし四十三りんしう正／ねんとそ聞えしをよそのおと、のうせられぬる事は一／かう平家のうんめいのすゑになるのみならず世のためもか／ならずあしかるへし入道しやうこくのさしもよこかみをやら(58オ) れつるをもこのおと、こそやう／になをしなためられつるに／こはいか、はせんとそたけの人／もなけきあはれけるおと、右／大将むねもりのかたさまの人まは御世ははや大将とのへ参り／なんすとして内さよろこひあへるもありをよそ親の子をおもふならひをろかなるかさきたつたにもをんあいのわかれば／かなしきそかしいはんやこのおと、は当家のとうりやうたうせい／のけん人にておはしければをんあいのわかれとい、家のすひひ／といひかなしみてもなをあまり有此おと、はふんしやううる／はしくして

心にちうをそむしこと葉にとくをかね給へりされは世／にはりやうしんをうしなへることをなけきいへにはふりやく」(58ウ) のすたれぬる事をかなしめり入道相国はせめてのおもひの／あまりにやふくはらへくたりてへいもんしてこそおはしけれおと、／はみらいの事ともかねてさとり給ひけるには我朝にはいか／なる大せんこんをしたりともしそんさうなくしてとふらはんこ／とありかたしされはいこくにいかならん事をもして我かこせをも／とふらはれはやとおもはれければすきにし安元の比ほひちんせい／のはかたよりめてんと申せんとうをめし三千五百りやうのこか／ねを給て五百両をはなんちにあたふ三千りやうをはそうてう／にもちてわたり千りやうをはいわうさんのそうにひき二千両／をは御門に奉りてんたいをいわうさんへ申よせ我こせとふ」(59オ) らはせよとてたひたりければめうてんかけまくもかたしけなく／もあはれにもおもひ奉りければかしこまで承りちんせいはかたよ／りもろこし舟のともつなをとく程こそありけれ万里のえん／らうをしのきつ、大そうこくにそつきにけるいわうさんのち／やうらうふつせうせむしとくくわうにあひ奉りこのよしを申けれ／はおほきにすいきかんとんして千りやうをはてらのそうにひき／二千両を御門に奉りて日本のたいふの申されつるやうを一／にそうし申されければみかとも大きに御かんありてさうな／く五百ちやうのすいてむをなかくいわうさんへそよせらける日本／の大臣たいらの朝臣しけもりこしやうせんしよととふらふこ」(59ウ) といまにたえずとそうけたまはる／

たちをひかる、事

小松とはたうけのうんめいのすゑになる事をかねてさと／＼りたまへる事ありおと、ある時ゆめにへう／＼たるひろきは／＼まをひんかしへむきてゆけはとりあり三しまの大明神／＼のとりいとおほへたととりゐの東のわきに人いく千万と云かす／＼をしらすひしめきける中に入道のくひのた、今きれたるとお／＼ほしきをもてあつかふおと、あれはいかにとの給へは是は平家大／＼しやうの入道との、くひを三しまの大明神のめしせとらせ給ひ／＼ていつの国のる人よりとものに給ひぬるなりとそ申けるさては」(60才)ち、の御事にこそとてたちより見給へはまことに父の御首也／＼あなあさましやこはいかにしつる事そやとて鳥ゐのもとへい／＼つるとおもひたまへはその御ゆめさめにけるその、ちはよろつ／＼心ほそくあんしつ、けてうちもまとろみ給はさりけるに／＼しんでんのひんかしのつまとをほと／＼とた、くをとのしければ／＼たれそとはせらるればせのをの太郎かねやすか申へきこ／＼候とて参りて候と申せはなに事そそれきけとて人を出／＼されたり人つてにはかなふましきよしを申あいたおと、中も／＼むにいてあはれたりかねやす御前ちかく参りてさ、やき申／＼けるはかねやす今夜西八条とのに御しゆくちき仕りて候つ」(60ウ)るかうちまとろみて候つるにか、る夢を見て候かあまりのあ／＼さましさにこのよしを申さんとて参り候とておと、の見給ひつる／＼ゆめを少もたかへすかたり申ければおと、あなふしきやしけも／＼りもた、いまか、るゆめを見たりつるそよされはかねやすは臣^{ミヤ}

／＼にとうせるものにこそとおほきにかんし給ひけりおと、ある／＼時又よろつ心ほそく思ひておはしけるにこんのすけ少将^{ミヤマ}是／＼もりゐんの御所よりいつるとて参られけるおと、たいめん／＼してつねよりもこまや^カに物かたりし給ふおやにてみればやらん／＼人の子にも御へん程なるはまれにこそあれ家をもつくへ／＼きうつはものなりとのたまひて少将もてなし申せとの給へ」(61才)は侍とも承て御かはらけ御さかな共もて参るこのさかつき／＼おはまつ申たけれどもおやよりさきにはよも給しなればのみ／＼てこそ申さめとておと、三度の後せうしやうとのにさし給ふ／＼せうしやうとの給てさかつきさしをき給へはおと、今一度／＼とのたまふ承りて又うけられけるときおと、さたよしを／＼めしてさ、やきたまひせうしやうにひきいて物申せとのたまへは／＼さたよし承てしやうしのうちよりにしきのふくろに入たる太／＼刀を一ふり取出しせうしやうとの、まへにさしをきたり少将／＼このたちは当家ちやく／＼につたはれることからすにてや有らん／＼とおほしてあけて見給へはさにはあらず大しんさうのときその」(61ウ)いへをつくぬしのはきてともするむもんのたちなりけりこは／＼いかにこれ程たうけ世さかりなるにこのたちをひくはしかな／＼からたいふをしゆそし奉るにこそとさたよしか方をあしけに／＼見給へはおと、心え給ひてあしくなおもひ給ひそそのたちは入道／＼とのこうし給はんときしけもりはきてともせんとてよういし／＼たれとも入道とのにさきたち奉りぬとそんなるあひたさてそ／＼れ／＼ゆつり奉るなりあいかまへてしけもりなからんのち／＼侍ともにくまれ

たまふなさふらひ共をもふひんにし給ふ／へしかう申やさいこのこと
とはにてもあらんすらんとてなみた／にむせひ給へはせうしやうと
のみなかれけりまたさたよしを」(62オ) はしめとして御前に候
ける侍共もみな袖をそぬらしけるされ／ともた、いつとなきかね事
とこそおもはれけるに程なく／おと、こうし給ひしかは少将とのこ
の太刀をはきてともせら／れたりける時にこそされはや御りんしゆ
うをはかねてより／思召さためられけるといと、なけきもふか、り
けれおなし／き十一月七日のいぬのこくはかりに大地おひた、しく
うこひ／てや、ひさしをんやうのかみあへのやすちかいそきたいに
／はせさんしてそうもんしけるは今度の大ちしんせんもん／のさ
すところそのつ、しみかろからすたうたう三きやう／のなかこんき
経のせつを見候にとしをえてはとしをい」(62ウ) てす月をえて
は月をいてす日をえては日いてすもてのほ／かにくわきうに候とて
はら／となきければてんそうの人もいろ／をうしなひきみもゑい
りよをおとろかせおはします若きき／やうてん上人女はうたちな
とはけしからぬやすちか、た、今／のなきやうかな何事があるへ
きとてわらひあはれけり／されともこのやすちかはせいめい六代の
あとをうけ天もんえ／んけんをきはめすいてうたな心をさすかこと
し一事もた／かへさりければ世にはさすのみことそ申けるされはこ
んのは／はにしていかつちのおちか、りたりしにもかりきぬの袖は
／やけなからその身はつ、かもなかりけり上こにもまつ」(63オ)
たいにもありかたかりしものなりけり／

ほうわう御つかひを西八条へたてらる、事

さる程に入道しやうこくふくはらにおはしけるかいか、思は／れけ
んおなしき十四日にすせんきのくんひやうをたなひ／きて上らくせ
らると聞えしかは京中の上下あはやなに事／のいてこんすらんとて
さはきの、しることなのめならず何／ものか申いたしたりけん入道
てんかをうらみ奉るへしといひ／しかは天下の人皆しくわいのこと
しくわんはくとのもない／聞召すこともやありけんいそきさん
たいありて今度入／道しやうこくしやうらくのことはひとへにもと
ふさをかたふ」(63ウ) くへきけつこうと承り候へはいかなるめ
をか見候はんす／らんと申させ給ひければしゆ上仰せのありけるは
くわんはく／いかなることもあらんは我身のうへにてこそあらめと
てれう／かん御泪にむせはせ給ふまことに天下の御まつり事は／し
ゆ上しつへいの御はからひなるにこはいかにしつる事ぞ／やと天照
大神かすかの大明神のしんりよの程もはかり／かたしおなしき十五
日入道てうかをうらみ奉らん事すてにひ／つちやうときこそゑしかは
法皇ご少納言入たうしんせい／のしそくしやうけんほうゐんを御つ
かひにて入道しやう／こくのものとへつかはさるきんねんてうていし
つかならず」(64オ) して人の心もと、のほらすせけんもいまた
らつきよせず／なりゆく事もさてそこにはれは万事たのみおほしめ
／すに天下をしつむる事までこそなからめかへりて是／をうらむへ
しなときこしめす事ことにおとろきおほ／しめさる、よしをおほせ
らる法印入道しやうこくのしゆ／くしよにし八条にゆきむかいて源

大夫判官すゑさた／をもておほせのおもむきいひ入れつ、御返事またれ／けれ共あしたよりゆふへにをよふまでふいんなりけ／れはされはこそとむやくに思ひてきさんの由いひ入つ、出／られけるに入道いか、おもはれけんしやうけんよへとてよ（64ウ）ひかへさす入道中門に出あひたいめんし給ひて法印の御はう／き、給へしやうかいか申ところはひか事かたいふみまかり候ぬ／るうへは入道すいふんひるいををさへてこそまかりすき候へけふ／あすともしならぬおひのなみにのそみてか、るうきめにあ／ひ候しんちうをはいかはかりとかおもひたまう御への心に／もしあんし給へ保元いこはらんけきうちつ、ききみや／すき御心もわたらせ給はさりしを入たうと、のてうて／きをたいらけてけきりんをやすめ参らせきその時／も入道はた、大かたをとりをこなひしはかりなりまさし／くはたいふこそてをおろし身をくたきたるものにて」（65オ）候へされは万事（マヤ）を出て一しやうにきする事もと、なりき／その外も又りんしの御大事（マヤ）でうてきのせいむたいふ程の／こうしんはありかたふこそ候らめ今をもていにしへを思ふ／にかのたうのたいそうはきてうにをくれてかなしひのあ／まりに昔のいんそうりやうひつのゆめのうちにえ今の／ちんはけんしんをさめての後にうしなふと云ひのもんを身／つからかきてへうにたて、たちこそかなしみ給ひけるなれ我朝／にもまのあたりみし事そかしあきよりのみんふきやうかせ／いきよしたりしをはこゑんことになけきありて八はたの御／幸をと、められて御ゆうもなかりきすへてしんかのそつす」（65ウ）るをは

代々の君なけき思召る、事にてこそ候へされはお／やよりもむつましく子よりもなつかしきはきみと臣との御／中とは申候らめそれにたいふか中いんに八はたへ御幸なりあま／さへほうちう寺殿にて御ゆうありき御なけきの色一事／もこれ見すたといたいいふかちうをこそおほしめしわすれさせ給ふ／ともなとか入道かなけきをはあはれませ給はさるへきたとひ／入道かなけきをこそあはれませ給はずともたいうかちうを／はいかてか思召わすれさせ給ふふしともいゑいりよにそむきは／て候ぬ事（マヤ）いまをいて面目をうしなふたりまつ是一つきに／越前の国をはし、そん／／までも御へんかいあるまじきよし」（66オ）御やくそくありてたいふ給て候しをこうせいのおちいくはくの／日かすをへすして是をめしはなちて他人にたふは何のくわた／いそやつきに中納言のけつの候しに近衛の二位の中將殿し／よまうの候しを入道すいふんとり申候しかともつゐにきこ／しめし入させ給はて関白のそくをなされ候し事はいかにたと／いひきよのことを申とも一度はなとか御もちいなるへきいはんや／ゐかといひけちやくといひりうんさうなき事をひきちか／へられし事はいこんの次第（マヤ）也ちかしゆむくわん巳下のむよう／のいたつらものか東山し、のたに、しやうくわくをかまへ当家を／かたけん（マヤ）とけつこう仕り候しこと是又わたくしのけいりや」（66ウ）くにあらす君御きよようあるによりてなりいまめかし／き申事にては候へ共七代までもいかてかこの一門をはおほしめし／すてさせ給ふへきそれに入道はや七しゆむにをよひてよめい／いくはくならぬ一この中にた

にや、もすれはほろほさるへき／よしの御意ありいはんやしそんなさ
うそくして一日へんし／もてうかにつかへんことありかたしをそ老
て子をうしなふは／こほくのえたなきにことならずたいふにをくれ
かぬるをも／て当家のうんめいははや思ひしられ候ぬたとひこの後
いか／なる奉公をいたし候ともえりよにおうする事よも候はしこ
の世今いくはくならず心をついやしても何にかはしるへ」(67
オ)きされはいかてもありなと思ひなりてこそ候へとてかつはふ
／くりうしかつはらくるいしてとかれければ法印おそろ／しくも
又あはれにもおほえてあせみつにこそなられけれ／ほうあん我が身
もきんしゆのしんなりそのうへし、の谷に／て人々のきせられし事
共をもまさしく見きかれし身な／れはわかみもその人しゆとてた、
今めしやこめられんすらん／とりうのひけをなてとらのを、ふむ心
地しておもはれけれ／共さる人にてまことと、の御奉公あさから
さりしによてく／わんぬといひほうろくといひ御身にとてはこと
／く満足／すされはこのはくたいなる事をはきみの御かんある
にこそ」(67ウ)候らめつきにきんしん事をみたりきみ御きよよ
うありと／云ことはいかさまにもほうしんのけうかいとおほえ候を
よそ耳／をしんしてめをうたかふはせそくのつねのへいなりせう人
のふ／けんをもててうをんのたにことなるを忘てみたりかはし／き
みをなみしまいらせさせ給はん事しんりよの程はかりか／たしをよ
そ天心はさう／くとしてはかりかたしといへ共えい／りよさため
そのきにてそ候らん下として上にさかふあに／人臣のれいならんや

せんする所このやうをこそひろう仕／り候はめとてた、ければ平
家の侍共らうせうなみぬ／たりけるかあなおそろしあれ入道との、
いかり給ふにすこ」(68オ)しもさはかす返事うちしてた、れつ
ることのゆ、しさよとて／ほめぬものこそなかりけれ法印きさんし
てこのよしをそう／し申されければ法皇たうりしくくしておほせい
たされたる／かたもなし／

けくわんならひにるさいの事

おなしき十二日入道おもひたち給へる事なれはくわんはくとの／を
はしめ奉りてけいしやううんかく四十三人のくわんしよくを／と、
めてをしこめらるくわんはくとのをはたさいのこんのそつ／になし
てつくしへなかし奉るか、らん世にはとてもかくても／ありなんと
て鳥羽のふるかはといふ所にて御出家あり」(68ウ)御年三十五
にそならせ給ふれいきよくしろしめされて／くもりなきか、みにて
わたらせ給へる物をとて世のおしみ／奉る事なめならずはいしよ
へおもむく人のみちにて／しゆつけしたるをはやくそくの国へつか
はさぬ事なれははし／めはひうかの国とさためられたりしかひせん
の国にとくめた／てまつる大臣るさいのれいは左大臣そかのあかゑ
右大臣と／よなりさ大しんうをなう大しんすかはらかたしけなくも
北／野の天神の御事也さ大しんかうめいこう内大臣いしうこうに
いたるまでそのれい六人なりされ共せつしやう関白流／罪のれいは
これはしめとそ承る六条のせつしやう殿の御」(69オ)子近衛の
二位の中將殿をは入道むこにとり参らせられた／りければ大しんく

わんはく一とにせさせ奉るふけんしとの、御事也はんゆう院の御
宇さんぬる天禄三年十一月一日／一条のせつしやうけんとつこうに
はかにかくれさせ給ひしかは御おと、ほり川のくわんはくちうき
こうその時はいまた従／二位の中納言にておはしきその御おと、ほ
こ院の大入道／殿かねいへこう其時はいまた大納言右大しやうにて
ましまし／ければちうきこうは御おと、にか、いこえられさせ給ひ
／たりしか今さらこえかへし奉りてしゆ二位の中納言／より内大し
ん正二位してないらんのせんしをかふらせ給(69ウ)ひたりし
をこそ人しほくをおとろかしたる御せうしんとは申／しかこれはそ
れにてうくわせりひさんきの二位の中將より大／中納言をへすして
大しん関白のもれいめつらしかりし御／事なり大けきのたいふしひ
つのさいしやうに至まで皆／あきれたるさまなりめうおんるんの大
政大臣のおと、は／つかさをとめてあつめまへをひくたし奉る是は
さんぬる／保元にも、あくさふのえんさによりてきやうたい四人る
／さいせられ給ひしか右大將かねなかさ中將たかなかはんちやう／
せんし三人はきらくをまたすしてはいしよにてうせられぬ／是はと
さのはたにして九かへりのせいさうを、くり長寛二(70オ)年
八月にめしかへされほんるにふしつきのとし正二して仁安／三年十
月にさきの中納言よりもと大納言にあかられるを／りふし大納言
あかさりければかすの外にそくは、られける／大納言六人のれいは
これをはしめとそ承る又さきのちうな／こんより大なこんになる事
は山しなのさ大臣みもりこう／うちの大なこんたかくにのきやうの

外は承りをよはすくわん／けんのみちにたつしさいけいすくれてお
はしましければ君／も臣もおもくし奉りて次第のせうしんと、こほ
らす太／政大臣まできはめさせ給ひて又いかなるつみのむくひにか
る／さいせられ給ひけん保元の昔はなんかいとしようつされ(70ウ)
(70ウ) 治承のいまはくわんとうおはりの国とかやつみなくして
は／いしよの月見んと云事は心ある人のねかう事なればおと／と事
共し給はすかのたいしのひんかくはくらくてん九かう／きんのしは
にさせんせられてしんやうのえのほとりにさす／らへ給ひしそのい
にしへを思ひやりなるみかたしほちはるか／にゑんけんしてゐる風
にうそ吹つねはかう月をのそみひは／をたんしわかを詠してなをさ
りかてらに月日をほくら／せ給ひけり有ときおと、たうこく第三のや
しろあつたの明／神にさんけいありてしんめいほうらくのためにひ
はをひき／らうゑいせられけるに所もとよりむちのそくなれはな
さ(71オ) けをしれるものもなしいうらうそむちよきよ人やそ
／うかうへをうなたれ耳をそはたつともさらにせいたくをわ／かち
りよりつをしれるものなしされはこはきをたん／せしかはきより
んをとりほとはしりくこううたをはつせ／しかはりやうちんうこき
く／けり物のたえなる事をきかむ／るにはしせんにかんをもよほ
すことはりにまんさ涙をなかし／けりしよ人きいの思ひをなすはる
かに夜ふけしんかうにを／よひておと、心よくすきよくをつくされ
けりふかうてうの中／にははなふんふくのきをふくみりうせんのみ
よくの間には／こんしやうせそくのもんしのけうきやうけんききよ

のあ」(71ウ) やまりをもてといふらうゑいをしつゝ、ひはをかき
ならし／給へはしんめいかんおうにたへすしてほうてんおほきにし
んと／うすへいけのあくきやうなかりせはいかてか今かゝるすいさ
／うをおかむへきとておとゝ、かんるいをそなかされるさんき／く
わうたいこくうのこんのたいふけんひやう衛のかみふちはら／のみ
つよし大藏卿けん右京の大夫いよのかみたかしなのやす／つねくら
んとの左少へんけん中宮のこんの大しんふちはらの／もとちか三
わんともにとゝ、めらるあせちの大なこんすけかた中／納言の中將も
ろいへうこんゑのこんのせうしやうけんさぬ／きのかみすけとき二
のくわんをとゝ、めらるなるにもあせちの」(72オ) 大納言すけか
たしそくうこんゑのこんのせうしやうまこせう／しなうまさかたを
は夜のうちに都ををひ出すへしとて／上げいとう大なこんさねくに
のきやうにてはかせの判官中／原のりさた行むかふてこのよしを
申ければ大納言と／るものもとりあへ給はすさんやひろしといへ共
五しやくの身を／き所なし夜のうちに九ちうのうちをまきれ出へた
つくも／の外へそおもむき給ひける彼大江山やいくのゝ、みちにかゝ
／りはしめは丹波の国むらくものさとに聞えしか後にはは／いしよ
をさためてしなのゝ、こうとそきこえけるこの大な／こんはいまやう
らうゑいの上手にておはしけるうへたうしの」(72ウ) てうしん
にてほうわうしよ事なひけなくおほせあはせ／られければかやうに
あたをむすはれるにや今度四十四人／人さの事にあはれし事をい
かにと申にさきのとのゝ、御子ち／うなこんの中將とたゝ、今の関白殿

と中納言御さうろんの／故とぞ承るさらは中納言の中將殿こそいか
なる御めにも／あはせ給ふへきに四十余人の人さの事にあふへしや
は去／年さぬきの院の御ついかううちあくさふのそうくわんそ
／ゐのきこえありしか共をんりやうはしつまりやらさりけ／るにや
入道なをはらすへかね給へりと聞えしかは又何／事の出こんすら
んとさはきのゝ、しる事なのめならずそ」(73オ) の比さきのさせ
うへんゆきたかか聞えしは中山の中／納言あきとききやうのちや
うなんにて二条院の御とき／はへんくわんにてさしもゆゝしきかり
しかゐんほうきよ／の後つかさをとゝ、められせんとをうしなひてこ
の十余年は／あるかなきかのていにておはしけるを入道いか、おも
はれけん／ししやをたてゝ、きと立より給へとの給ひつりはされたり
け／れはゆきたかこの十余年はなに事にもまはらさりつ／るもの
をいかさまにもさんけんしたるものゝ、有にこそとのた／まひければ
きたのかたもきんうちもおほきにさはき給ひけり／入道かさねての
給ひければやかて参へきのよしの返事はせら」(73ウ) れけれ共
きつしやしゆつしのしやうそくもなかりければおと／とさゑもんの
すけみつ時のもとへこのよしをの給ひおく／られたりけるにかひ
／くしくきつしやしゆつしのしやうそく／ともにきら／くしくおく
りつかはされたりゆきたか西八条へ／そ参られける入道思ふにはに
す中門に出合給ひてこの中納／言殿はしよしないけなく申承候しか
は御へんをもをろ／かにはおもひ奉らすねんらいろうきよの事もい
たはしく思ひ／奉りしか共ほうわう御せいむのあひたはちからをよ

はすい／まはとう／出仕し給ふへしをよそくわんどのことも入道と／り申へきなりへちのやうはなしこのよしを申さんとて」(74オ)なりいまはとくかへり給へとの給へはゆきたかなのめなら／すよろこひてかへられけるに入道さこそはあるらめとて／けんたいふの判官かくるまに入道のうしかけさせて出仕しやう／そくともにをくりつかはされけりゆきたかてのまひあしの／ふみ事もおほえずこは夢かとてあきれ給ひけりおなし／き十七日にさせうへんちかむねのをひこめられたるかはりに／なりかへり給ひけりしやうねん五十いまさらわかやき給／ふそあはれなるこれ^レもた、へんしのゑいくわとそみえしおなしき／二十日院の御所ほうちう寺とのをはくんひやう四めんをうちか」(74ウ)こむ其勢二三千きもあるらんとぞ見えし一とせのふよ／りのきやうか三条とのをしたりしやうに御しよにも火をかけ／人をもやきころすへしなど聞えしかはつほねの女房た／ちめのわらはあはてさはきてはしりいつさきの右大将むねも／り御車さしよせてとくとくめさるへく候と申せは法皇お／ほきにあきれさせ給ひたるさまにてこはいかにしつる事そや／主上さておはしませはせいむにこうしゆするはかり也もしそのゆへかそれもさるましくはしこんいこはさうてこそはあらめ／いかにかくうきめを見せ参らせんとはつかまつるそなりちか／しゆんくわんかやうにとをき国はるかのしまゑもなかし」(75オ)やらんするにこそとおほせければむねもりいかてさる事／の候へきはらく世をしつめ

んほと鳥羽のきたとのへいれ／参らせよと入道申候也さらはやかてなんちも御ともつかまつ／れかしとおほせけれ共ち、のめいにおそれてさんせられ／すこれにつけても小松のたいふの事をのみこそしのひ／おほしめされければれこたいふには事の外におとりたるもの／かな一とせもか、る御めにあはせたまはんとせしをこたいふ／かやう／に申てこそ今まであんをんにありつるに今は／いさむるものなければかく心のま、につかまつるにこそゆく／すへこそたのもしからねとてれうかんに御なみたせきあへさ」(75ウ)せたまはず扱しもあるへきならねはなく／御くるまにそめさ／れける御きやうはこはかりそ御くるまには入られけるくふ／のくきやう^(ママ)天上人一人もさんせられすほうわうの御めのと／きの二位のさまかへてあませとめされけるはかりそ御くるまに／はまいられける御りきしやこんきやうそけらうなりければ／人の中にまきれまいりける七条をにしへしゆしやかを南へ御／幸なし奉る京中の上下あはや院のなかされさせたまふはと／てみななみゐて袖をそぬらしけるさんぬる七日の夜の／大ちしんはか、るへきせんへうにて十六らくしやのそこまで／もこたへけんらうちしんもおとろきさはき給ひけんことはり」(76オ)かなとそおほえたるほうわう鳥羽とのゑいらせ給ひて後^レはてう／せきの御つとめふたんの御きやうはうをこたらせたまふそあさま／しき大せんの大夫のふなり何としてかまされて参りたり／けん御せんちかく候けるをめされて今夜すてにうしなはれぬと／思召すそ御きやうすいをめさははやと思召すはいか、あるへ／き

とおほせければさらてたにのふなりけさよきもたま／しゐも身に
そはず思ひけるに又おほせうけたまはりかたし／けなさにたます
きあけこしはかきこほち大ゆかのつかは／しらわりなとしてこんき
やうに水あけさせかたのこく御／ゆしいたして参らせたりほうわ
う是をめされて御経はこよ」(76ウ)り御きやうとりいたさせ給
ひてうちあけ／あそはされけるは／さいこの御きやうとそおほし
めされけるしやうけん法印にし八／てうにおはして申されけるは鳥
羽とのに一人も候はぬよし承／り候かあまりにあさましくそんし候
しやうけんはかりは御ゆ／るされをまかりかうふりてまいり候はは
やと申されければ／入道御へんは事すくすましき人なれはとう
／とてそゆる／されけるしやうけんなのめならずよろこひてとは
とのに参／りくるまよりおり門のうちをさし入てまいり給へは鳥羽
とのには／あきの山の嵐のをとのみはけしくて物ことにさひしきに
ほ／うわうの御きやううちあけ／あそはされける御こゑまこと」
(77オ)にすこくそ聞えさせ給ひける法印つと参られければ法皇
／是を御覽してあそはされける御きやうに御なみたのはら／と／
か、らせ給ひければ法印もしのひかたさにきうたいの袖を／かほに
をしあて、なく／御前へ参られけりあませの申／されけるはやあ
法印君は昨日のあした七てうとのにてく／こきこしめされたりし外
はよるもけさもきこしめしも入させ給は／すなかき夜すから御しん
もうちとけならず御命もあやう／くこそみえさせおはしませと申さ
れければ法印なみたををさへ／てなときこしめし候はぬやらんなに

事もかきりある事とも／にて候へいけのあくきやうつもりて年ひさ
しされは天照大神」(77ウ)正八幡宮もさためてきみをこそまも
り参らせさせたまひ候はめ／君のことにしつしおほしめす日吉の山
王七社一しようしゆこの／御ちかひあらためたまはずは法花の八ち
くにたちかけりてこそま／ほりまいらせ給ふらめさらんにとりては
せいむは君の御代とな／りけふとはみつのはときえうせ候はんす
れと申されければ／ほうわうこのこと葉にやなくさませ給ひけんそ
の後はくこを／も少きこしめし入させ給ひけりさる程に主上関白の
なかさ／れ臣下のおほくうしなはれし事共御なけきありけるに／又
ほうわうの鳥羽殿にわたらせ給ふときこしめしけるより／つねは御
なうとて夜のおと、に入せおはしましければ中宮を」(78オ)は
しめまいらせて御前にさふらわれける女はうたちもいかなる／へし
ともおほしめされす法皇鳥羽との、おしこめられてわたらせ／給ひ
し日より大りにはりんしの御神事有てせいりやうてん／のいしはい
のたんにしてしゆ上夜ことに大神宮を御はいありこれ／ひとへに法
皇の御ためそとおほえたるさしもけんわうと聞えさ／せ給ひし二条
院も天子にふほなしとてつねは院のおほせをも／申かへさせおはし
ますされはにやけいていのみみにてもわたらせ／給はず御ゆつりを
うけさせ給ひし六条院も御とし十三と／申し安元二年七月につゐに
かくれさせおはします此きみおな／しふしの御あひたとは申なから
御心さしことにふか、りければよ」(78ウ)そのたもとをさへか
たし百かうの中にはかう／をもてさきとすめ／いわうをもて天下

をおさむと見えたりされはたうけうはおひおと／ろへたる母をたのみくしゆんはかたくなゝるちゝをうやまふとも／いへり彼けんわうせいしゆのせんきを、はせおはしますゑいりよ／の程こそめてたけれ有ときたいりより鳥羽とのへしのひ／つ、御しよ有かゝらん世には雲ぬにあとをとゝむへしともそんし／候はすくわん平の昔をもとふらひ花山のいにしへをもたつねてさ／むりんるらうの身ともなりぬへくこそ候へと申させ給ひたり／ければ法皇の御返事にはさな思召れ候そさてわたらせおはしま／すをこそ一のたのみにても候へさやうにあとなくおほしめしたちな」(79才) はなにのたのみか候へきたゝくらうかともかくもならんを御らん／しはてゝこそと申させ給ひたりければ主上此御返事を(ついで)かんにおしあてさせ給ひて御泪いよ／せきあへさせ給はす君は舟／しんは水水よく舟をのせ水又舟をくつかへす臣よく君をたも／ちしん又きみをくつかへす保元平治の昔入道相国君をたもち／奉るといへ共安元治承の今はまたきみをなみし奉る是／四しよのものにたかはす大宮の大しやうこく三条の内大臣は／むろの大納言中山の大納言このひと／もうせられぬいま／はふるき人としてせいらいしんはんはかりなりこの人さもか／からん世にはてうにつかへ身をたて大中納言をへても何に」(79ウ) かはせんとてさいしやう入たうせいらいは高野のきりにま／しはりみんふきやう入道しんはんは大はらのしもにうつもれ／て一かうこそほたひのつとめの外はしたじなしとぞ聞えける／むかしもしやうさんの雲にかくれゑいせん(ついで)の月に心をすます／人もありけり是

あにはくらんせいけつにして世をのかれ／たるにあらすや中にも高野におはしけるさいしやう入道こ／のよしをつたへ聞てあはれ心とくも世をのかれたるものかなかくて／聞もおなし事なれともまのあたりたちまははりて見ましかは／いかばかりかは心うからまし保元平治のみたれをこそあさましく思／ひしに今は世(ま)になりてかゝるふしきも出くるにや又いかなる事」(80才) かあらんすらんされは雲をわけてものほりふかき山のおくのおくへ／もいりなはやとその給ひけるけに心あらん程の人のあとをとゝむ／へき世共みえすおなしき二十三日にせんさす明雲大僧正てん／たいさすになりかへり給ひけるそありかたき是もたゝ入道相国／のいかうはならひ申されけるとぞ承る中宮たいりにわたらせ／給ひ関白殿むこなりよろつたのもしくやおもはれけん天下／の御まつりことは一かうくけの御さたるへしと申をきてふく／はらへこそ下られれさききの右大将むねもりいそきさんたいし／てこのよしを申されければ主上おほせの有けるは法皇よりゆつ／り給ひたる世ならばこそせいむをもしろしめされたゝしつへいに」(80ウ) いひあわせて大将はからへとてつゐに御返事もなかりけりさる／ほとに法皇せいなんのりきうにして冬もなかはずきせ給へ／は秋の山の嵐のをとのみはけしくてかんでいの月のひかりそさや／けき庭には雪ふりつめともあとふみつくる人もなしけに／つらゝとちかさなりてむれあしとりも見えさるきおほてらのか／ねのこゑはいあひ寺のひゝきをおとろかしせいさんの雪の色かう／ろほうののそみをもよほす夜るしもにさむけきき

ぬたのひ／ひきかすかに御枕につたひあかつきこほりをきしる車の
跡／はるかか門せんによこたはれりちまたをすくつかう人せいのは
／いそかはしけなるけしきうき世をわたる有さまもおほしめしし
ら」(81オ) れてあはれなりきうもんをまほるはんいのよるけい^(ママ)
ゑいを／つとむるもせんせにいかなるちきりにていまかゝるえんを
むす／ふらんとおほしめしつゝくるもかたしけなしさるまゝには御
／さんけいおりくゝの御ゆうらん御賀のめてたかりし事ともを／ほ
しめしつゝけてもくはいきうの御なみたおさへかたしさる程／にと
しくれ年きたりて治承も四年になりけり／

平家物語卷第三終

(以下、二行分空白)

┌(81ウ)

(次号に続く)

(はくちえ 本学日本学研究所研究員)

(すずきあきら 本学教授)